Cradle　＜上＞

木住　和

序章　Prologue

目の前に大きな太陽があった。

京(けい)はそれに向かって歩いている。

どうして夕日は大きく見えるのか、誰かに問うたことがある。するとはにかむようにしてさぁね、とはぐらかされてしまった。

（不思議だなぁ）

京はいつもの道をいつもの時間に歩く度に思うのだ。太陽はこうして変わらず僕らの周りを廻っている。それなのに、僕らが太陽の周りを廻っているのだと言った学者がいる。正直、すごいと思う。けれどそれが解ったところで僕の生活が変わるわけでもないし。ましてや太陽が僕らの周りを廻っているように見える事には変わりないのだ。なのに、ヒトは知りたがる。

（不思議だなぁ）

宇宙人探しの方が見つかった時の衝撃はより大きいし、生活の変化も期待できるのに。なのに大人は、宇宙人はいないと言い切るのだ。その一言で夢を失った子どもは何万といるだろう。

これからどんどん沈んでいく一際大きな太陽を見ると、京も気が沈んでいくようで、いつも何か考えながらぼーっと歩いている。そんな所を友達に見られて鈍臭い、と笑われるのはいつもの事だし、小石につまずくのもよくある事だ。

でもこの日、つまずいたと思って力を入れた両足に手応えはなく、そのまま前のめりに倒れて視界が暗くなったのには、流石の京も驚いていた。

＊　＊　＊

「くそっ」

リアンは短慮を起こして街を出た。厩(うまや)から一頭、馬を拝借して何となく東に向かって走っている。

きっかけは些細な事だった。ちょっとした小言にムッときて言葉を返すも、いつも言葉足らずなリアンに勝てるはずもなかった。引くに引けず、言い争いも決着を見せないまま、制止する部下や同僚を振り払って出て来てしまった。

実を言うと、後悔している。

それでも手綱を緩めず、馬を走らせるのはただの意地だろう。この際、田舎に帰って暫(しばら)く暇(いとま)を貰うか、辞任してしまってもよいかもしれない。

あいつがきっとうまくやってくれる。もしかしたら自分よりも……。

そう思うと無性に遣る瀬ない気持ちになってくる。つい、馬に鞭を入れた。いつも乗るものとは違う騎馬は、身を捩(よじ)るようにして嘶(いなな)いた。

「あ、待て……ッ」

リアンは体勢を崩した。手綱が手から離れ、反転する景色がゆっくり見えた。その景色を冷静に見ながらリアンは思った。
（…くそぅ……）
初めての落馬だった。

＊　＊　＊

もう殆ど感覚は麻痺してしまっている。
一週間、飲まず食わずで座り通し。一日目で足腰が痛みだした。二日目はその痛みで呻いた。三日目は喉が渇き、呻き声すら出なかった。四日、五日は惰性で乗り越えた。六日目の記憶は殆どない。そして今、朦朧とする頭はただ一つの事を考えていた。
（天の梯子…ジエン……）
ユイファンはその瑞祥が現れる事ばかりを考えていた。もうそれしかできる事がなかった。体力の限界だったのだ。それを願って暫くした頃、霞んだ目に光が見えた。
一筋の、七色。
ついに幻まで見るようになったか、と思ったが、それは確かにそこにあった。その存在は揺るぎない。
（あぁ……）
ユイファンは足を動かそうとした。しかし麻痺した足は縺(もつ)れ、顔から突っ込むようにして倒れてしまった。ユイファンは、今自分が座っていた坐岩(ざがん)を見、それに縋るようにして立ち上がった。
（渡らなければ）
ユイファンは震える足を叱咤して、一歩、また一歩と進んだ。あの光までもう少し…。しかし無情にも、光に後一歩の所で足が崩れた。
（俺は…、行って…そして……）
ユイファンの体が、意識と共に沈んだ。

第一章　　霧深き森　Lost Their Ways

　思わず瞑った目を開けると、そこは霧の中だった。
　緑が深く、濃い白が視界を遮る。
　京は首を傾げた。夕日の中を歩いていたのではなかったか。しかしその包むような暖かい太陽の光もなければ、足元はコンクリートでもない。湿った土だ。それを少し、つま先で蹴ってみた。確かに土の感触。更に首を傾げた。周囲からは虫の羽音のようなものが聞こえていたが、それがふと止んだと思うと声がかかった。
「なんだ、随分間抜けそうなのが出て来たじゃねぇか」
「……本当に三日三晩かかったな」
　京は首をまわして背後を見た。霧の中からすぅっと人が現れた。長身でがっちりした体格の金髪と、それよりは小柄な（でも京よりは高い）少年の域を超えたばかりと思われる黒髪の二人。その双方の服装も変わっていて、京は瞬いた。深い霧のせいでよくは見えないが、一般的な洋服でないのは確かだ。その二人の後ろから白い顎髭を伸ばした翁（おきな）が現れた。
「さて、これで揃いましたな。まずは森を出ましょうぞ。長居する場所ではございませぬ」
「……おい、じいさんよ、本当にこれでいいのか」
　長身金髪の方が背を向ける翁に声をかけた。
「これもミネルヴァ様のご随意。この老人がもの申す事ではありませんな。…おぉ、そうでした、新しい方。これから森を抜けますが決して道を誤れる事無きように」
　それを聞くと長身金髪は京をちらっと見、翁の後に付いていく。小柄な方も無言で付いていった。流石の京もぼぅっと突っ立てるわけにも行かず、声をかけた。
「あ、あのう」
「来い」
　言ったのは翁ではなく小柄な方だった。
「ここにいるのはいい心地がしない。早々に出るぞ」
　こうして京は聞きたい事も聞く事ができず、流されるようにして彼らの後を追った。

＊　＊　＊

　森、と言っていたように、よく見ると木が沢山あった。
　最初、京たちがいた所だけは木が場所を空けるようにひらけていたみたいだ。歩くにつれ、足場もだんだん悪くなって来た。木の根が無数に地面を張っているのだ。それに躓かないようにしながらも、先を歩く者たちを追うのは簡単ではなかった。彼ら、翁と長身金髪、小柄黒髪の他に実はもっと沢山の人がいるのに京は気付いた。長いローブみたいのを纏っているようで、衣擦れの音があちこちから聞こえる。しかし、やはり霧のせいでその人数が何人かは解らない。その彼らがよほど早く森を抜けたいのか、その足並みは早い。　その上、この濃い霧では目の前を歩く

小柄な男の背中の影を見るので精一杯だった。
　突然のことが起きた。にも拘らず、京がさほど驚かないのはその性格のせいばかりではないだろう。頭は混乱していたが、それよりも迷子になる方が嫌だった。歩きながら、夢かな、なんて思ったけど、木の根に躓く度にその考えは打ち消された。
　慣れない足場と早歩きで京の息があがり始めた頃だった。小柄黒髪の声がした。
「おい、じじい。金髪の男の気配がしないが」
　その一言で歩きの集団が歩を止めた。全員が小柄黒髪の周囲に集まる。そこで京は二十近くの人間がいる事をやっと知った。今、中心に翁がいる。
「……ふむ。確かに。あれだけ言っておいたのにも関わらず…」
「あ、あのう、どうしたんですか？」
　喋りかけるチャンスは今しかない、と思った京は集団の中央に進み出た。翁の渋面が見えた。
「あぁ、新しい方、あなたは無事のようで」
「えっと、なんで僕がアタラシイカタなんですか？」
「それはお前が最後だったからだ」
　小柄黒髪が言った。何が最後なのか、続きを待ってみていたがそれ以上何も言わず、翁が後を継いだ。
「最初に説明をしない儂（わし）がよくなかったですな」そう言って翁は顎髭をなでた。「我々は今、あなた方を必要として『喚び』ました。最初にこちら、ユイファン殿、そして金髪の方、リアンソード殿、最後にあなたを喚びました」
「僕を？」
　翁はうなずいた。
「して、名はなんと？」
「三ツ橋京です」
「ミツハシケイ？これまた変わった名ですな。儂はシルージャ・イ・モルトと申す。で、何の話でしたかな……そうそう、呼んだところまででしたな。詳しい事は今ここで話すよりも、村に出てからの方がよいでしょうが、」
　シルージャが眉間にしわを寄せた。
「もしかして、そのリアンソードさんが迷子？」
「の、ようだな」
　言ったのはユイファンと呼ばれた小柄黒髪だった。
「この森は人を惑わすのです、ミツハシケイ殿」
　辿々しい言葉遣いでシルージャと名乗った翁が京の名を言った。どうやら、姓と名の区別がついていないらしい。
「京、だけでいいです」
　と、念のため言ってみたが、どうやら細事のようだ。
「じじい、とにかく俺は森を出たいがどうする？」
　ユイファンの言葉に、シルージャの顔は更に曇った。周りのローブの人たちも何か囁き合っている。探しにいかないのだろうか。いくら霧が深いとは言え、わざわざ喚んだ人を置き去りにな

んてするだろうか。
シルージャが渋面のまま頷いた。
「仕方ありませんな。リアンソード殿は諦め、我らは森を抜けよう」
　周りのローブがそれに頷いて歩き出した。
「ちょ、ちょっと待ってください！いいんですか、それで」
「迷ったあいつが悪い。この森がよくないものだと言うのは解っていたはずだ」
　ユイファンが冷たく突き放して歩き出してしまった。そばに立っているシルージャも先を促す。
「さ、行きましょうぞ」
「せっかく喚んだのに、ですか？それっておかしくありませんか？」
　シルージャはゆっくり首を振った。
「この森ではそうはいかんのです。解ってくだされ、ケイ殿」
　そう言われれば、京になす術などない。後ろめたい気持ちがないわけではないが、先を行くシルージャの影を見失わないようにして歩き出した。

しまった、と思った時はもうどうしようもなかった。
こちらに喚ばれたのが二番目だったリアンは、いくらかの説明を聞いていた。なのに、森の見せる幻影に惑わされて迷子になってしまった。
最初、そこに見たのは母の姿だった。
仕事仲間と揉めて、馬を出して落馬した。そして気付いたらこの森にいた。見慣れない森だったし、よくない気配もしていた。母の姿をしばらくぶりに見に帰ろうと思っていた矢先の、不運。だからだろうか、幻の母の姿を見て、思わずそちらに走って行ったら何もなかった。振り返って元いた集団に戻ろうとしても戻れなかった。
どうやら完全に、見知らぬ森で迷子のようだ。子どもの頃は森が遊び場だった。初めて行く森でも、その頃身に付いた野性的な勘、とでも言うのだろうか、そのおかげで迷う事も困る事もなかった。
しかしこの森は違う。
森全体が意志を持っているかのように、森にいる様々なものを拒絶しようとする。普通だったら見かける動物もいっさいいない。霧が深いせいで太陽の位置も解らず、方角も解らない。動物がいないから、木の実の在処や水の湧き出る場所も解らない。そもそもこの森にある木は実をつけるのかも疑問だった。地面を掘れば出る水も、こうびっしりと木の根が張っていれば容易には掘れない。服装も軽装、持ち物は普段から肌身離さず持っている愛剣のみ。これで食べ物がない状態で、自力で森を抜けなければならない事になる。果たしてそううまく抜けられるだろうか。
そう思案していたとき、目の前に一人の人物が現れた。

＊　＊　＊

ユイファンは確かに幻を見ていた。歩く度に現れ、そして消えて行く。
どの幻もユイファンの心を動かしたりはしなかった。ユイファンはそういう人間になってしまったのだ。ユイファンを育てた人、拾った人、殴った人、蔑んだ人、道を示してくれた人。見えては消え、また見える。どれも、こちらに来る前にユイファンがいた世界の人たちだった。
あの日、朦朧とする中で天の梯子———ジエンを渡ろうとした。そこで足が崩れ、気がついたら森の中だった。その事に特に動揺などしなかった。ただ、違う場所にいる事だけは理解した。
翁に帰れるか、と聞くと是、と答えた。
ならば困りはしない。翁の話を聞いて、特に協力しようと思ったわけではないが、する事もなくなってしまったのでただ付いて来ていた。ユイファンの後に二人現れ、翁はこれで全部だと言った。そして今、幻が見える森を歩いている。人を惑わすのが目的の幻も、ユイファンにはどうでもいいものばかりで通用しなかった。周りを歩くものたちもこの森のこの性質は解りきっているのだろう。誰も道を誤らずに歩いていた。しかしふと、目の前の金髪の影が揺らいだ事に気付いた。そこでよく注意してみると、その影はすっと消えた。前を歩いていると思った金髪の男の影は途中から幻に成り代わっていたらしい。金髪の男は消えていた。
しかし、そのこともユイファンにとってはどうでもいい事だった。

やっぱり後味が悪い。
迷子になっている、と解っていてわざと置いて行くというのは。
シルージャは心に隙を与えるな、と言った。それがこの森の攻略法なのかもしれない。でも京には心に隙を作らない、というのがどういう事なのかいまいちよく解っていなかった。だから気付けば、消えたリアンの事を考えている。
せめて、印を残しながら歩けないものか。
京が肩から斜めにかけているショルダーバックには、筆記用具や塾のテキストが入っている。その筆箱の中にカッターが入っている。これで木の幹に印を付けようか、迷っていた。バックからカッターを出すのに足を止めてしまうと迷子になりそうだし、というのがその理由だった。印を付けても自分まで迷子になってしまったら意味はない。
そのとき、視界の端に動く影を見つけた。それが金色の影だから思わず足を止めてそちらを見た。するとその影は彷徨い歩くように動いている。
（リアンソードさん、だ）
おそらくこちらに気付いていないのだろう。その影はいっこうに近づいてこない。
「リアンソードさんですか？こっちですよぅ」
「お前、最後のガキか？」
声が返って来た。確かにリアンソードのものだ。京はよかった、と胸を撫で下ろして、声を出しながらその影に一歩近づいた。
「こっちですよ、わかりますか？」
「どっちだ？」
「こっちです、こっち」
京はまた一歩近づいた。影はどんどん小さくなって行くように見える。まずいな、と思って先を行くシルージャに声をかけようとして振り返った。しかしそちらにシルージャの影は見えない。足を止めた間に先を行ってしまったのか、リアンソードに呼びかけるよりも先にシルージャの歩を止める方が先決だったな、と後悔した。京は集団の方に向かって呼びかけた。
「シルージャさぁん、ちょっと待ってくださいリアンソードさんが…」
いましたよ、と言おうと思った時、木の根に躓いて転んでしまった。不運にも、その拍子に左目のコンタクトがとれてしまった。立ち上がって周囲を見ると、視界はいっそうぼやけて見えた。影も見えなければ、声を出しても何も返っては来ない。
（あー、迷子になったな…）
元から見えない視界なのであっても意味のない右目のコンタクトも外しつつ、木の幹に手をかけながら歩き出した。
（さっきの声も、幻だったのかな）
もう京にそれを確かめる術はない。

「フィル…」
　リアンの目の前には喧嘩別れしてきた華奢だが感じのよい男が立っていた。その『フィル』が穏やかに笑った。
「こんなところで何をしているんだい？」
「こんなところって……」
　リアンははっとした。これは幻だ。『こんなところ』に『フィル』がいるはずもない。だが、その心を読んだかのように『フィル』は話を続けた。
「もしかして、リアンも迷ったのかい？私はあの後、リアンを追ったんだよ。君は本当に怒りっぽいね。よりによって、私の馬に乗って行くなんて。私も君の馬に乗って追いかけたんだ。そしたら君の姿が揺らいでね、これはまずいと思って私もその揺らぎに飛び込んだらこの森だよ。一体どうなってるんだい？ここは精霊もいないし」
　そう言ってフィルは周囲を見渡した。
「ほ、本当にフィルなのか？」
「どうしたんだい？実際目の前にいるじゃないか。兎に角、ここを出よう。よくない感じがする」
「あ、あぁ…でも……」
　幻かどうかの踏ん切りが付かない。目の前にフィルが現れたことで安堵してしまった心をもう一度引き締める事ができないでいる。そのフィルが歩き出して、リアンは付いて行った。するとフィルは振り返ることもせず、背中越しに話しかけてきた。
「リアンはさ、これからどうしたい？」
「どうって…」
　あまりにも唐突な質問に、リアンは首を傾げた。質問の意図がわからない。すると、それをわかってか、フィルは間を殆ど開けることなく続けた。
「戦士隊副隊長まで昇進して、王族の警護も引き受けて……、上奏（じょうそう）だって出来る立場にいる。それなのにあまり政治に興味はないみたいだし、部下への指揮は疎（おろそ）かにするし。はっきり言って、職務怠慢だよ」
　リアンはそれを聞きながら今までのことを振り返った。最初は目的があって入った国軍だが、入ったとほぼ同時に目的は満たされてしまった。今では田舎にいる母への仕送りの為に働いているようなものだ。隊長の推薦があって、ここまで昇進したが、正直これでどうしようとも思っていない。職務怠慢になるのも仕方のないことだった。隊長はリアンを次期隊長に、と考えているようだが、そんな大役が務まるとは自分でも思っていない。王宮にいることがどんどん窮屈になっていた。そんな時の、友フィルとの喧嘩は王宮を出るいい機会となった。フィルは文官だが、武官としての能力もあり、人徳もある。自分が抜けてもこいつがうまくやって行くだろう、と思った。だからこそ出てこれたのだが、そう思うことは自分を惨めにするような気がして苛立ったのも事実だった。
（俺は、何をしたかったんだろう……）
　結局飛び出しても解決にはならなかった。その証拠に、今もこうして気持ちが揺らぐ。

「フィル、俺、」
　やっぱ戻る、という一言が恥ずかしくて言えない。そもそも喧嘩は終わっちゃいない。言おうかどうか迷っていると、フィルが足を止めて振り返った。
「ねぇ、やりたいことも目的もないんだったら居ても仕様がないんじゃない？」
「…フィル？」
　リアンの位置からはフィルの表情が見えない。ただ、いつもと調子が違うことが解った。
「この森で彷徨った挙げ句に野垂れ死にするのも、王宮で何もしないで過ごすのも変わらないよね？」
「……何が言いたい？」
　聞きたくはない。しかし、促さずにはいられない。
　なんとも居心地の悪い、矛盾した気持ちである。リアン自身、そういう気持ちに気付いていなかった。
「君が居なくても王宮に変化はないし、困らない。一人の有能な戦士が居なくなっただけじゃあね。また誰かが代わりを務めるだけだ」
（あぁ、そうか）
　リアンはようやく得心がいった。
　森は人の心の隙をつく。その人物が隠している奥底まで見抜いて。その人物が一番弱いところを抉（えぐ）るのだ。
　フィルは頭がいい。リアンとは古馴染みだし、何を言い当てられても不思議はない。ただ、ここまで無神経ではないのだ。リアンもフィルのことはよくわかっている。だからこれが幻だと気付いた。気付いたけれど振り払えないのは、それがリアンの心を体現したものだからだ。
　不安が、形となって現れた。それも、一番嫌な形で。
　心の内でリアンは笑った。こんなにも、強いと思っていた自分の心が弱かったなんて。目の前の『フィル』は消えない。自分では振り払えないくらい、不安が膨張してしまった証拠だ。シルージャたちが早く出たがっていたはずだ。慣れた者でもこの幻は、きつい。
「『フィル』、はっきり言え」
「…すごいね、気付いてなお正気を保てるなんて」
『フィル』という皮を被った森の悪魔が囁いた。
「でも君、意味ないよ。もう居ないのと同じだから。この森じゃ、誰も来ない。たとえ帰ったところで、そこは君の居場所じゃない」
「……言え」
　リアンは微かに呟いた。もう、どうなってもいい。
　前を歩く『フィル』はゆっくりこちらを振り返った。その目と、視線が交わった。
「死んじゃえば？」
　『フィル』は見たこともない表情で笑った。

「駄目だよ！」
　突然の声にリアンは文字通り飛び上がった。振り返ると、人影が走って来るのが見えた。その背格好は子ども。しかもこの声は……
「あのガキ！？」
　視界が少し開けたような気がした。相手の顔が見える。確かに駆けてきたのは最後に喚ばれた子どもだった。
「あぁ、よかった。本当のリアンソードさんだ」
　子どもはにこりと笑った。気付けば『フィル』の姿が見えなくなっている。
「あ、僕のこと解る？えっと、そうだ、リアンソードさんには自己紹介まだだったね。三ツ橋京です。名前は京、だからね」
「……お前、本物か？」
「そうだよ。僕も迷っちゃって。せっかく合流できたのに役に立たなくてごめん」
　子ども———京はそれでも困ったような顔をせず、えへへと笑う。どうやら本当に本人のようだ。
「なんでここまで来れた？幻は見なかったのか？」
「見たよ、リアンソードさんの。そのあとも変な声ばっか聞こえてきたんだ。お母さんとか、友達とかが僕を呼ぶんだけど、何にも見えないから」
「幻が見えなかったのか？」
「うん、どうしてだろう？でもよかったぁ。リアンソードさんに会えて」
「リアン、でいい」
　助かった、ようだ。沈んでいた気持ちが軽くなった。『フィル』が言ったとき、リアンは本気で死ぬことを思った。ただ、死に場所くらい、自分で選びたいなと思った。そこに想いもよらぬ声がかかって『フィル』は消えた。いや、完全に居なくなったわけではないだろう。姿を隠しただけだ。隙あらばまた出てくるだろう。
「とにかく行こう、リアンさん」
「さん、はいらない。それよりケイ、行くったってどうすんだ？」
　すると京は足元を指差した。
「よくよく考えたらはじめから目印あったんだよね」
「目印？」
「僕さ、この森に最初居たとき、地面を足でこすって泥がついたんだ。その泥が木の根について僕が歩いてたとこが解るんだ。…まぁ、頼れるかは疑問だけど」
　リアンはそう言って笑う子どもを見た。
「お前、フィルより頭いいかもな」
　京は首をかしげた。

＊　＊　＊

　京の言う通り、その跡をたどってきた道を引き戻った。京は泥の跡をよく見るため、屈んで歩

くから犬のようだ。
「あ、」
　京が立ち止まった。
「どうした？」
「どうしよう、ここで行き止まりだ。僕、ここでみんなと逸(はぐ)れちゃったんだよね」
「そうか、困ったな」
　口で言う言葉が感情を宿していないことに、リアンは自分でも驚いた。まだ、『フィル』の言ったことを引きずっている。
　自分は、死んでもいい。
　でも今は京がいる。これを巻き込むわけにはいかなかった。そこまで惨めにはなりたくない。
「ん？」
　リアンの目線の少し下、木の幹に真新しい傷が見えた。
「おい、これ」
　京が顔を上げて覗き込んだ。
「あ、印？」
「やっぱそう思うか？」
「シルージャさんかな？」
「いや、この傷は…刃物とはちょい違うからな。太い針で引っ掻いたみたいだ。ユイファンか？」
「なんで？」
「三叉の錐(きり)みたいな武器を携えてた。それだろう」
「へぇぇ」
　京は感心したようにその傷を見る。
「あっちにもある！すごい、ユイファンさん」
　らしくないな、と呟くリアンの先を京は陽気に歩き出した。

ミネルヴァの森はこの世界———クレイドルでは神聖視されていた。人が侵してはならない聖域だと。

その森は絶大な力を持ってして、クレイドルの危機の時になんらかの奇跡を起こすとされている。しかし、その詳しい内容を知るのはクレイドルでも極わずか、政務の主な指揮をする宰相（さいしょう）とその側近、そして王族のみである。

民衆には聖域、と述べているも実態は魔性の森である。

ミネルヴァの森は、クレイドルの王が崩御（ほうぎょ）すると異世界から三戦士（トリエント）と呼ばれるものたちを喚ぶ。その選定を女神ミネルヴァが行う。ゆえに森はきたる三戦士を惑わし、その強さをはかる。森に動物はおらず、常に霧が深く立ちこめている。しかしただの一羽だけ梟（ふくろう）が棲んでいるという。その梟が森の番をし、ミネルヴァに報告を行う。

少なくとも宰相たちはそう言う伝説を聞いていた。

伝承に則（のっと）り、三日三晩決められた陣を張り、呪文を唱える。一晩に一人ずつ戦士を召喚するのだ。ミネルヴァの森の中心である場所には苦もなく行くことが出来、その四方に術者を据え、交代しながら儀式を行う。その最初の日の晩、宰相シルージャはその目で初めて戦士が召喚される瞬間を見た。

伝承は本当だった。

先代の王からそれとなく聞きはしていた三戦士の存在。それは王が崩御した時にしか現れないので、民衆も知らない。ただ、有名な伝説だけは残っていた。エイダという三戦士の英雄。しかしそれはあくまでも伝説だった。

シルージャは安堵した。無事に三戦士を招き入れたことに。しかし問題は森だった。来る者は拒まない森が、出て行く者を引き止めようとする。シルージャたちは元より儀式を執り行えるように準備をしていた。だから森に対する備えもあった。だが、三戦士はどうだろうか。世界を救うとされている三戦士ならば森を抜けるのは容易（たやす）いはず、という意見と、三戦士を惑わす為にある森だからそれは難しいかもしれない、という意見が拮抗したが、結局三戦士には備えを用意せず、自らの力で森を抜けてもらうことに決まった。それは伝説の三戦士の力に期待するところが大きかったからかもしれない。

しかし、召喚した戦士たちの外見は自分たちとさほど変わらず、平凡だった。これが奇跡の力かと疑うくらい、最初に出てきたユイファンの身なりは見窄らしく、シルージャは落胆の色を隠せなかった。次に出てきたリアンソードはそれなりの身なりでほっとしたものの、最後はやはり凡庸な子どもだった。そして森を抜けてみれば、残ったのはユイファンのみ。他の二名は森に惑わされてしまった。これで、クレイドルの窮地が救えるのか、シルージャたちは困惑した。森を抜けてすぐそばにある村で宿を取ると、シルージャは自分の居室に同行していた術者のみを集めた。ユイファンはそれに明らかな不快の色を示したが、シルージャもそれどころではなかった。

三戦士をどうするか、相談がなされたが、これと言って解決案は出ず、混迷していたとき、梟の鳴き声が聞こえてきた、ような気がした。

＊　＊　＊

「おい、」

部屋の敷居を跨いでユイファンが現れた。その足音が聞こえず、いきなり声をかけられたシルージャたちは飛び上がった。

「おぉ……ユイファン殿、どうされましたかな」

シルージャは冷や汗をかきつつも、平静を装って尋ねた。それにユイファンは関心がないようで、表情を崩さずに宿の入り口の方に顔を向ける。

「村の奴らが騒いでる」

そう言われれば、なんだかざわついているように思える。なにかあったのだろうか。小さな村だと、小火（ぼや）などの小事でも騒ぐと聞いていたからそれだろう、と思っていたが、形相をかえた宿屋の主人が慌てて部屋に入ってきたのは尋常じゃなかった。

「ささささ、宰相様！」

駆け込むようにしてきた宿屋の主人は、その勢いで額を床にこするようにして跪（ひざまづ）いた。

「ふ、梟でございます！梟の化身でございます」

「何があった」

シルージャの側仕えが語気を荒くして尋ねた。

「森から、梟の化身が…。ミネルヴァ様が使わしたのでしょうか？人を携えて御座（おま）しにおなりです」

宿屋の主人の言は要領を得ず、シルージャの側仕えは宿の外を見に行った。ユイファンは我関せず、とでも言うように壁に背をもたれかけ、腕を組んで目を閉じている。暫くして、側仕えが息をあげて戻ってきた。

「シルージャ様、三戦士が、森を抜けてきました！」

第二章　沈まない太陽　Always the Same

村人は森から人が来ることを知らない。
森には動物がおらず、そこは人が足を入れてはいけない聖域だとされていた。その森にまつわる伝説なら、この村人たちがよく知っていた。森には女神ミネルヴァの生が芽吹く、と。
村人たちは初め、武人の格好をしたリアンを気高き梟の化身、それと共に現れた子ども――京をミネルヴァの御子（みこ）として迎え入れた。
村人たちがリアンと京に頭を下げるので、当の本人たちはすっかり困ってしまったが、そこにシルージャが現れて二人は安堵した。
「なに、わざわざ本当のことを言わずともよいでしょう」
シルージャは白い顎髭をなでながら穏やかに言った。
「でも、僕なんだか……神様の子どもって言われるの、やだなぁ」
「お前はまだいい。俺なんか梟だぜ」
ふぉっふぉっとシルージャは笑い、リアンは憮然とした。
「村人衆は少々勘違いしたようじゃが、めでたい印であることには違いないので、そう思わせといてやってくださいまし」
するとリアンはそれだ、と言ってシルージャを見る。
「そのめでたいっつ一意味をちゃんと説明しろ」
シルージャはおお、と声を上げた。
「森を抜けたら説明する、というお約束でしたな」
そうして三戦士は改めてシルージャの居室に集められた。

＊　＊　＊

「先ほど、少々ユイファン殿には説明しましたが、最初からいたしましょう」
京は、ユイファンに久々にあったように感じた。森の中ではお互いの姿がよく見えなかったのだから何とも言い難いが、ユイファンの身なりは森に居た時と変わっていた。乱れていた髪には櫛が通され、服装も見窄らしい布切れのようなものからシルージャがきるような鮮やかなものになっていた。京は、急に変わったように見えるユイファンをまじまじと見た。
ぼさぼさだった少し長めの黒髪は、実はきれいな深緑色をしていて、それが一つに束ねられている。珍しい髪の色に目を見張ったが、もっと変わっていたのは目だった。左右で違う瞳の色をしている。左が緋色で、右が碧色。思わずきれいだと見とれてしまった京に気付いて、ユイファンは不快そうに何だ、と尋ねた。
「あの、森で目印を残してくれたでしょう」
「だから何だ」
やっぱり、と思った京は笑ってありがとうと頭を下げた。

「別に礼を言われる筋合いはない。あれは自分が迷った時の為に残したものだ」
「ふむ」シルージャは顎をさすった。「印を残してもあの森は魔性の森、そう簡単に出てこれたのはまさに奇跡。ミネルヴァ様の御加護があったとしか思えませんな。そもそも、あの森は人を惑わすことしかしません。印があっても見えない、というのが普通でしょう」
　京は首をかしげた。
「そーいや、お前言ってたな。幻聴は聞こえるが、幻視はなかったと」
「え、でも最初にリアンの影を見たから迷ったんだけど」
「それだけ、なんだろ」
　言われて京はうん、と頷いた。そこでまたあっ、と声を上げる。
「なんだよ」
「さっきから目が霞む、って思ったんだ。眼鏡めがね」
　京は自分のバックの中から眼鏡ケースを取り出した。
「森の中じゃ、元々霞んでたし。うん、これですっきり」
「なんだ、目が悪かったのか」
　リアンの言葉に京はちょっとね、と言って空のケースをしまった。
「なるほど。そういうことじゃったか」
　納得したように頷くシルージャに対して、リアンと京はきょとんとした。そこにユイファンが一言加える。
「目が悪いから、幻が見えなかったんだ」
　京は手のひらをポン、と叩いた。
「そっかぁ。ユイファンさん、あったまいいー」
「お前たちが、馬鹿なだけだろう」
「んだとぉ」「あははー」
　ユイファンはさらりと何事もないように言う。それに対して怒ったのがリアン、笑ったのが京だ。
「お前、わかってんのか。馬鹿って言われたんだぞ、へらへらすんな」
「でも僕、本当に馬鹿なんだよー。ユイファンさん、鋭いなー」
「てめっ、こんな奴のことさん付けする必要ねー。ユイ、謝るまで俺は許さないからな」
「……好きにしろ」
　微笑ましいと言えば微笑ましいやり取りに見えるが、シルージャはこの三人の行く末を思って溜め息をついた。

　シルージャの説明は老人特有と言えるのか、少し回りくどく長かった。結構な時間が経ったように思えたが、窓の外の日はいっこうに傾こうとはしなかった。
「えーと、つまりシルージャさんの話をまとめるとぉ、ここは日本じゃないわけだ」
　それは来た時から何となく思っていたことだが、実際に言葉にすることで確かめたかった。自分が異世界に来てしまった、それはあまりにも実感が伴わなかったからだ。村人も日本に居るような人たちと大差ない。ただ、顔立ちは西洋風もあればアジア風もある。服装も洋服ではない。それだけの違和感だった。それも、アニメか映画の世界でありそうなものなのですんなりと受け止められる程度の違和感だ。
「はぁ、ケイ、それってまとめになってねーぞ」
「とにかく俺たちが呼ばれたのはクレイドルの王が死んだから、と言うことだな」
　リアンが批判し、ユイファンがきれいにまとめる。京はただ頷いた。
「しかし、説明になっていないな。王が死んで俺たちが喚ばれる。それは何故だ？異世界の人物の三人に、この世界を救う手だてはないだろうな。何一つ知らないし、俺にはこの世界が滅ぼうが関係ない。第一、こんな取り柄もなさそうな二人のお守りはごめんだ」
「てめえ、ユイ！ペラペラと言いたいことだけ言いやがって！取り柄がないだと！？俺だってお前ごときにお守りされんのはごめんだ」
「ねー、喧嘩はもうやめようってさっき約束したばかりじゃん」
　シルージャは何度目かの溜め息をついた。
「確かに、ユイファン殿が仰ったように、具体的にどうされるべきはこれから説明することですがの。もうお疲れになったでしょう？」
　いんや、と首を振ったのはリアンで、京とユイファンは何も言わなかった。京は正直言って、疲れていた。どうやらクレイドルと日本の間で時差があったようで、日本に居た時は夕方だったのにまだこちらは昼だ。日本なら、もう深夜か、もしかしたら明け方に近いかもしれないだろうな、と思うとどっと疲れが押し寄せてきた。そんな京の様子を見て、シルージャは目を細めた。
「無理は体に障（さわ）りますぞ。クレイドルも就寝の時間。一先（ひとま）ず皆様、体を休ませてくだされ。続きは明日じゃ」
「え、就寝の時間って。まだお昼じゃん」
　京の言葉にシルージャは首を傾げた。
「はて、オヒル？」
「なんだ、クレイドルの人間ってのは夜行性か？普通寝るなら夜だろ」
「はて、ヨル？」
　リアンの言葉にも、シルージャは同じ反応を示した。シルージャは本当に困ったようだった。このシルージャの反応に、滅多に表情を崩さないユイファンも驚いたようだった。
「おい、じーさん、昼と夜もわからないのか？ボケたか」
「ボケとは失礼ですな」
　リアンの不躾な言葉を、シルージャは憤然と否定した。それに何より、周囲の従者までが首を

捻る。どうやらこれは———
「ボケた、と言うより知らないようだな」
　ユイファンがぼそりと呟いた。
「おい、じーさん、この世界には昼と夜と言う言葉はないのか」
　リアンの問いにやはりシルージャは首を傾げた。
「えっとね、太陽が昇ってる時が昼で、沈んで月が出てる時が夜って言うの」
　京は自分なりに説明してみたが、果たしてわかっただろうかとシルージャの顔を覗くと、彼は非常に驚いたように小さな目を大きく見開いていた。
「なんと、皆様の世界では陽が沈むなどと言う天変地異が起こるのですか。しかし、陽が沈んでしまって困らないのですか。ヨルとは恐ろしい。陽が沈むなど、考えられない……」
　シルージャは本当に驚愕しているようだが、それは三人も同じだった。
　———陽が沈まない世界
　それこそ考えられない。
　陽が沈まないとは、この星は宇宙の中で一体どういう位置にいるのだろうか。ここにきて京は、異世界に来た、という実感がじわじわと湧いてきた。
　結局その日は、シルージャたちが就寝の時間だと言い張り、床につくことになった。京は本当に太陽が沈まないのか確認しようと思っていたが、体は疲れていたのだろう、気付けばすとんと眠りに落ちていた。

瞼の向こうが眩しい。
そうか、お母さんがカーテンを開けたから朝日が……。
って、おかしいな。僕の部屋、西向きなのに。
眼を開けて上体を起こすと、そこは明らかに“僕の部屋”ではなかった。ぼーっとする頭がだんだん覚醒していくにつれ、昨日の出来事が頭の中で鮮明にリプレイされた。
「起きたか」
言ったのは窓辺で片膝を立てて座るユイファンだ。毛布のようなものを羽織っているが、寝ていたような顔ではなかった。
「えっと、朝？」
「ずっとな」
窓から外を見れば、太陽は寝る前と変わらぬ場所で煌煌と光を放っている。そう、場所までもが変わっていない。この世界では太陽は不動のもののようだ。
部屋の中を見渡す。この部屋は京たち三人にあてられた宿屋の一室だ。シルージャは別の部屋で寝ているはずである。部屋には就寝時のために、光を遮る黒いカーテンがついている。京たちが泊まる部屋ではずっとそれは開いていたようだ。そうしていたのはずっと窓辺に座るユイファンだろう。リアンは今もぐっすり眠っている。
「僕、どれくらい寝てたのかな。クレイドルの時間では今何時なんだろ」
「さぁな。太陽が動かないから、俺には時間の見当が全くつかないな」
そう言われて、京はふと疑問に思った。
「そう言えば……、クレイドルの人たちは、どうやって時間決めてるんだろう？普通は朝と夜があるから時間があるって思うんじゃないかな」
「そうだな……考えられるのは、習性、とか」
「習性？」
「動物の、な。種によっては人間より確かな体内時計を持っているから、どっかで動物飼って一日中観察する。そいつの行動のパターンから一日の流れっていうのを作る。つまり、行動時間と就寝時間。最初はそうやって決めていたのかもしれない。後は時計を作って管理する」
「ん～」
京は自分の左腕にしている時計を見た。そこにはデジタル表記でp.m.6:17とある。日付も表示されているが、それはクレイドルに来た時と変わらない。京は首をかしげた。こちらに来てから数分ほどしか立っていない計算になる。時計が狂ったのだろうか。そのことも十分考えられる。とりあえず今はこれが京にとっての唯一の時間感覚である。この腕時計は出来るだけ外さないでおこう、と心に留めておく。
それから暫くしてシルージャが朝餉（あさげ）に呼びにきた。リアンはそれに起こされ、寝癖のひどい頭を抑えながらシルージャについていく。宿屋で出される朝餉を京は、ホテルによくある朝ご飯にしてはちょっと豪華な、そして量の多いものを想像していた。その分、実物を目にすると落胆は大きい。かなり質素な食事だった。パンのようなものが主食として出されたが、これはぱさぱさとしていて食べにくい。白濁色の液体は初め、牛乳だと思って飲んだが、それよりはかなり味が

薄い。最後に果物が出た。これは初めて見る果物だが、みずみずしくてかなり甘い。一番おいしい、と思った。
「シルージャさん、この果物、なんて言うの？」
「ダルシスです。初めてですかな」
「うん、これ、すっごくおいしい」
「俺の国じゃ、ドルチェドって名前だったけどな、これ」
　そう言って、リアンがごつごつした黄色い果物を一口かじる。
「リアンのとこでもこれ、あるんだ。いーなー。日本に持ち帰りたいなー」
「あぁ、そうだ」日本、という単語に触発されたようにリアンは掌を打った。「失念していた。じーさん、俺はいつ帰れる？」
　リアンが言ったことに、京は思わず顔を上げた。今まで黙って食事をしていたユイファンもその手を止め、じっと睨むようにシルージャを見た。
「そうですな、昨日、話が途中で終わりましたな」
　シルージャは待ち構えていたかのように、左手であごひげを触るとゆっくりと喋り始めた。
「我らの王が崩御なさった。なれば次の王を決めねばなりません。今この王不在の時期と言うのは内乱も起きやすく、過去の例を見ても早々簡単には次の王は決まらないのですじゃ」
「それで、俺たちが？」
「だけど何をすればいいの、僕たち」
　シルージャは手を広げてまぁまぁとはやる二人を押さえた。
「では、一つお聞きいたしましょう。皆様の世界では、次の王をどのようにお決めしますかな」
「え、えっとぉ……」
　京はこの質問に困った。
　王って言うことは、日本で言うところの天皇？
　京にはこの世界の“王”と日本の天皇がイコールではない気がした。この世界の王とは一体どんな人なのだろう。
「俺んとこは世襲制だ」
　リアンが一番に答えた。こう断言するところを見ると、リアンの世界も王制なのだろう。
　シルージャが視線でユイファンに答えを促すと、ユイファンは面倒くさそうに口を開いた。
「俺のとこは王はいない。政治もどうやって回っているか知らない。……多分、どっかのお偉い貴族が適当にやってるんだろう」
　興味関心が無さそうな口ぶりだ。まったく知らない、というのは国民としてどうかと思うが、かといって京も詳しいわけではない。
「ケイ殿のところは？」
「ん、んー。一応、天皇がいて世襲制だけど。でも日本の政治は別の人が動かしてて、そっちは選挙で決めてるよ」
　なんとなく、答えてみたものの、これでいいのかという不安と疑問はあった。
　シルージャはみんなの答えを聞いて満足そうにうんうんと頷いた。
「このクレイドルでは、そのどれにも当てはまらないのです。クレイドルでは神なる存在が次代

の王を決めるのです」
　これを聞いた三人は一瞬、何を言っているのかが理解できなかった。
　———神だって！？
　京は神という存在を信じていない。いるとも思っていない。無宗教だから、と言うのもあるが、もし自分がキリスト教徒であっても信じはしないだろうなとも思う。リアンやユイファンの反応を見ると、少なくとも京と同じようだ。神を信じていない。その三人の反応を見て、シルージャはまた頷く。
「伝承に残ってましてな、三戦士（トリエント）が呼ばれたのは過去に幾度となくありましたが、どの方も神を信じてないご様子だとか。今の皆様と同じですな。我々からしてみれば、少々奇異なことなのですが」
「待て。神が決める、と言ったな」
「そうですが何か、ユイファン殿」
「ならば俺たちが呼ばれた理由は何だ」
　得たり、と言う顔をしてシルージャが頷く。
「いやはや、今回の三戦士は非常に飲み込みが早くて助かりますな。ええ、そうです、あなた方にしていただきたいのは神の声を聞いてほしいのですよ」

リアンにとっては胸くそ悪くなるような話った。
（くそ、なんだってこんなことばっかり……）
初めこの世界に来た時は、これがあの世か、結構霧が深いんだな、なんて思ったものである。
しかし、すぐに人が現れ、助けを乞われた。あの世も荒れてるのか、とも思ったのも束の間、これが現実であると実感していった。一体どうなってるんだ、と頭は混乱していたが、それを表に出さない意地だけは健在だった。
リアンの次に呼ばれた京が来るまで、シルージャから簡単な説明がされた。ここがどこなのか、何故呼ばれたか。それを聞いた時は、頭が痛くなるような話で細かいところまでは覚えることが出来なかった。要するに、混乱が深まっただけである。それを今、混乱もない落ち着いた気持ちで聞いていたが、理解が出来るようになった分、腹が立ってきたのだ。
シルージャの話はこうだった。
クレイドルと言う世界では、王が神によって決められる。それ以外はあり得ず、また政治も王を中心として成り立っている。その王が崩御すると、王以外の者に一時的に政権を持つことが許されるとは言え、次の王を早急に決めなければならない。そのためには神から次の王が誰なのかを聞かねばならないのだが、この世界中で神の声を聞けるのは王のみに与えられた力なのだと言う。そのため、神の声を聞く為には神がいる場所まで赴（おもむ）かねばならない。そこは聖域であり、許されぬ者は立ち入ることができない。これは初代の王が神の声を聞き、定めた最初の法であると、シルージャが言った。しかし、この法が言う“許されぬもの”というのは“王が許可を下していないクレイドルの人間”なのだそうだ。だから———
「だから、異世界から来られた三戦士（トリエント）はこの法に触れぬのですよ」
シルージャは穏やかな表情で言った。
「そもそも、神なんて野郎がいるとは思えない」
リアンが突っぱねるとシルージャは意外にも頷いた。
「儂もこんな歳ですが、実際お目にかかったことはありませんからな。皆様には、こちらの神を信じろ、などと言う強制はいたしません。実際、神は雲の上のお方、我々にとっては実感がない存在であることは違いませんな」
「……降りる、と言ったら？」
リアンがぼそっと呟いた。
「降りる、とは？」
とぼけた調子のシルージャに、リアンは苛々と答えた。
「その、神とかいう野郎に会いに行くのは俺抜きでやってくれってことだ！ケイとユイの二人で十分だろ」
「で、リアン殿は帰られると申すのですか」
「……そうするつもりだ」
ふぅっとシルージャが息を吐いた。
「実は、……大変申し上げにくくここまで伏せてきましたが、皆様がご自分の世界に帰る方法を儂は知らぬのですよ」

「「なっっ！！」」
　声を上げたのはリアンとユイファン。京は声すらもあげられずに唖然としていた。リアンは今にも怒り狂いそうで、ユイファンの眼も険しい。京だけがまだぼうっとしている。シルージャは慌てて続けた。
「いえ、でも帰ることは出来るのです！実際、過去の三戦士が帰られたと言う記録も残っております。ただ、方法は記されていませんが…」
　殺気立ている二人に変わって京が聞いた。
「じゃあ、どうやって帰るの？」
　その声はちょっとかすれていた。それを京自身が自覚できたくらいに。
「その方法も神に聞くのが一番だと思われます」
「つまり、」気は立っているが自分を落ち着かせるようにリアンが口を開いた。「どうしても俺らは神って野郎に会わなきゃなんねーんだな？」
「そういうことになります」
　リアンは村の宿を出るまでシルージャに突っかかっていたが、最後は諦めるようにして首を縦に振った。そしてその日の午後、シルージャと三戦士は馬車に乗ってクレイドルの王都・レックスアーブを目指した。

第三章　　語り継がれる伝説　Folk Tale

昔々―――

この世界に名は無く、人の心が穏やかでない時代の噺（はなし）

人が自分の力を誇示せんと、内乱の絶えない時代の噺

ある街で二人の男が、どちらが強いかと競い合っていた。その勝敗は長い間つかず、街の人々はこれに困り果てていたが、それでも自分の応援する男が負けないように応援を続けていた。街は二分していたのである。

ある日、とても美しい少年――ルシファーが街を訪れた。

あまりにもかわいらしいルシファーに、街の人たちは我先にと世話を焼いた。するとルシファーが無邪気に喜ぶので、街の人たちは少年と過ごす時間が増えていった。その頃には、二人の男たちのことなど、街の人たちにはどうでもよくなっていた。

「あの人たちは何をしているの？」

ある時、ルシファーは目の前で乱闘し始めた二人の男を指差して尋ねた。

「ああやって、いっつも張り合っているのさ」

うんざりしたように女が答えた。これに別の女も頷いた。

「いつまで経っても終わりゃしないよ」

それを聞いて、ルシファーは言った。

「じゃあ、こんなのはどう？」と天を指差した。「あの、光り輝く世界一奇麗な石の欠片を早く持って帰った人が勝ち、というのは」

乱闘していた男はそれを聞いて声を上げた。

「そいつぁ名案だ」

もう一人の男も頷く。

「あの美しい石は強き者が持つに相応しいな」

そうして男たちは、天に達するほど高い山へと登り始めた。これに興味を持った街の人たちも一緒に登っていく。

一月かけて、男たちは山の頂きに着いた。そこには煌煌と輝く石が手を伸ばせば届く位置に浮いていた。

「「これは俺の物だっっ！」」

二人の男は山の頂で乱闘を始めた。一緒について来た街の人たちも、石のあまりの美しさに眼がくらみ、自分の物にせんとし、その乱闘はますます大きくなっていった。

そのとき、誰が気付いただろう。一つの影が、光る石に近づくのに。

辺りがぱっと暗くなった。それに驚いた人たちは乱闘をやめ、石を持つ少年ルシファーを見た。その顔はまさに天使のごとく美しくかわいらしいが、その笑みに人々はぞっとした。

「これは僕が貰っておくよ」

そう言うとルシファーは一目散に山を駆け下り始めた。乱闘していた人たちは慌ててルシファ

ーを追う。しかし誰も追いつけない。そればかりかどんどん距離が広がっていく。光る石を失った世界は闇に覆われていこうとしていた。足元が見えなくなって、人々はルシファーを見失い、進むべき道すらわからなくなってしまった。
　山の麓で待つ人々も、山頂での異変に気付いて集まっていた。そこに、石を抱えたルシファーが降りてきた。人々はルシファーから石を取り戻そうとするが、うまくいかない。ルシファーの悪魔のような笑い声だけが闇にこだまする。人々は闇の中で絶望に落ちようとしていた。
「待てっ」
　ルシファーを呼び止めたのは街で狩人をしている青年――エイダだった。
「それは世界を照らす石だ。お前の物じゃない」
　腰に携えた剣を抜き、エイダはルシファーに立ち向かった。
「これを持ってる僕が一番強いんだ」
　ルシファーもエイダと対峙する。うっすらとした光の中で競い合う二人を闇から見ていた街の人たちは、自然とエイダを応援した。それに呼応するように、弱くなっていた石の光が強くなった。だんだんと人々に活気が戻る。
　ルシファーはとうとう追いつめられた。ルシファーの背後には真っ暗な洞窟が、目の前には剣を握るエイダと街の人たちがいる。
　エイダが一歩、間合いをつめ、ルシファーの手を斬りつけた。ルシファーはあまりの痛みに、持っていた石を落としてしまった。エイダは更に間合いをつめた。
「この石は世界に返そう」
　ルシファーはそれでもエイダをきっと睨むと言った。
「光があるところに影はある。僕はその影だ。またいつか、石を盗りにくるよ」
　不敵な笑みを見せると、ルシファーは背後の洞窟へ走って行ってしまった。
　こうして世界は光を取り戻し、エイダは英雄となり、平和な世界が築かれた。
　だが、ルシファーは今でも洞窟で石を奪うときを待っている。

広場での紙芝居。

それを地べたに座って真剣に聞くのは、かなり小さな子供たちばかりだ。京もその群れの後方に立って聞いていた。帽子を目深にかぶったお兄さんの手書きであろう絵はまさに芸術で、おまけに人を引きつける話術も持っている。ついつい通りかかった京までがその噺に引き込まれてしまった。自然と拍手をしてしまう。この噺は「ルシファーの大罪とエイダの英雄伝説」というらしい。

京たちは馬車で一日ほど走ったところにある街に滞在していた。

馬車の中である程度、この世界についての知識をシルージャから教えてもらったが、どうやら『クレイドル』というのは国の名前ではなく、世界の名前らしい。そしてこのクレイドルには国と言うものが無い。だから普段は争いが無いのだと言う。それでもこの広い世界はいくつかの領地として分かれており、それぞれの領地を貴族が統治している。ここは貴族・スタンラード卿の領地であるプリムスという街である。大河の側にある大きな街だ。近くの鉱山から削り取れる石で作った建造物はどこか中世のヨーロッパを思わせる。最初に訪れた村とは違い、足元にも石が敷き詰められている。ただ、中世のヨーロッパとは違うな、と思うところは屋根部分にある。民家は殆どが平らだ。屋根が無く、屋上と言った形になっていて、そこで洗濯物を干したりしている。ヨーロッパでは洗濯物などは人目につかない裏庭や中庭に干すことが多いと聞いていた。しかし、この街では庭を持つほどの土地の余裕が無いのだろう。郊外に行けば行くほど、民家が窮屈に並んでいた。中心部には、豪邸が多く、その分、建造物の外観にはこだわっている。教会のような建物もあり、屋根も平ではなく尖塔のようになっている。そのてっぺんには風見鶏のような（何を象ったものかはよく見えなかった）ものがあった。

今は、街の北側広場、ラッパを吹く天使の彫刻がある噴水前に京は立っていた。

はじめはスタンラード邸（この建物が一番豪奢（ごうしゃ）だ）に呼ばれたが、堅苦しい挨拶ばかりしてくる貴族たちに飽き飽きした京たちを慮（おもんばか）って、シルージャが屋敷から出ることを許可してくれた。

シルージャに同行していた従者をつけようかと提案されたが、これをユイファンが断った。それでなんとなく、散歩に出かけてみたのだが、リアンもユイファンも思い思いの方に進んでいってしまい、結局京も独りでぶらぶらとするはめになった。街は広いが、スタンラードはこの街の領主であるので町の人に尋ねれば帰ることは出来るだろうと楽観視して、どんどん離れる方向に歩いたら紙芝居に見入ってしまった、と言うわけである。

クレイドルのことは殆どわからないが、こういう噺はどこに行ってもあるんだと、一つの世界にいることを実感する。京は、子供たちが紙芝居のお兄さんの前で大きく口を開けている革製のトランクにコインを入れていくのを見ていた。町中の大道芸人やストリートミュージシャンみたいだな、と思ったが、日本と違うのはその場にいた子供たち全員が何らかの代価を払っていることだった。日本の場合、支払いは任意である。子供たちはつぎつぎと鞄にものを投げ込んでいった。相手が子供だけに、それはお金ばかりではない。飴のようなお菓子類もあれば、使い古したおもちゃもある。どこかで拾ったのだろう形の面白い石を、未練たらたらで放り込む子供もいた。京は次第に焦り始めた。少し離れていたとは言え、ずっと紙芝居を見ていたのである。何

か払わなければならないのかもしれないが、何も持っていない。このまま見て見ぬ振り、と言うのも出来なくはないが、迷っているうちに子供たちは代価を払って方々に散ってしまっていた。鞄に入った代価を革袋に入れ直し、紙芝居の道具をトランクに入れていたお兄さんがふと、京の方に向いた。帽子を目深にかぶっているので表情がつかみ取りにくいが、怒ってはいないようで、京を手招きした。なんとなくそれに従ってお兄さんの近くに寄っていくと、
「君、貧乏？」
「え、いや、そうゆうわけじゃ……」
　遠回しと言うのかあからさまと言うのか、いきなり代価を払わなかったことに関して問われて京は戸惑った。紙芝居のお兄さんは身支度を済ませてすくっと立ち上がった。
「ふーん、じゃあ、その腕に巻いてるのは？」と京の腕時計を指した。
　京は慌ててそれを隠した。時間がわからないと不安、と言うわけではないが、この世界に来てから肌身離さずつけている。
「こ、これはあげれません！」
「はは、まぁいいさ。んーじゃあさ、俺は色んな街を回ってこういう噺やってるから、次会った時に何か用意しといてくれよ」
　それはかなり確率が低い。京がこの街にとどまっていて、また彼が訪れるのならまだしも、京は今、王都に向かっての旅の途中である。相手も次に会う確率は低いと思っているのだろう、その口調は本気ではない。
「これがお仕事なんですか？」
「いや、趣味さ。旅もお伽噺も。それより坊主、どうだった？」
「あ、はい、すごく面白かったです、今のお伽噺」
　なんという月並みな感想。自分でももうちょっとましなことが言えないのかと恥ずかしくなる。しかし彼はそんなことを気にしてはいないようだった。
「ふーん。てことは初めてか、今の噺。おかしいと思ったんだ、坊主くらいの年代があのお伽噺を真剣に聞いてるのって。お前、ちゃんと親に面倒見てもらえてんの？」
「え、えぇ？」
　どういうこと――と聞く前に彼が歩こうや、と言って先を歩き始めた。
「俺、この先のアルトリエっつー宿に泊まってんだけど、お前んちは？」
「あ、僕、今はスタンラードさんって人のお屋敷に泊めてもらってるんです」
　すると並んで歩いていた彼の目が、帽子の下で大きく見開かれた。
「何、お前、お坊ちゃん？こりゃ失礼した。一介の旅芸人が口聞いちゃいけねーわな…って、何独りで出歩いてんだよ？従者は？」
　なんか勝手に話を進めてしまった彼に苦笑しつつも京は首を横に振った。
「別に僕そんなんじゃないよ。それよりさ、さっきの噺って有名なの？」
「ん、あぁ。ありゃガキが寝る時に親が話して聞かせるっつーくらい、一般的だな。まぁ俺流のアレンジはあるけど。なんだ、お坊ちゃんは親が忙しくてそんなこともしてくれないってか」
「だから違うってば」
　そんな話をしていると宿アルトリエに着いてしまった。街の中でも外側に位置する宿は、中心

部と比べると安そうだが、南側から中心部へと来た京から見てもわかるくらい、北の方が華やかだ。これから行く王都も、この街より更に北にあると言う。そのせいかもしれない。
「ついでだ、荷物おいてきたらお屋敷までお供してやるよ」
　この街に来たばかりの京にとっては願っても無い申し出に甘えさせてもらった。アルトリエからまた、元来た道を歩きながら屋敷へと向かう道中、京は彼からいろいろな話を聞いた。
「俺はロイ・ド・…、まぁファミリーネームはいっか。お前は？」
「京です。三ツ橋京。よろしく、ロイドさん」
「ミツハシ・ケイ？変わってんな。それと発音違うし。ロイ・ド、だ」
　違いがわからない京は首をひねった。とりあえず、ロイドでもいいらしいのでそう呼ばせてもらうことにした。ファミリーネームを聞くと、どうだって良いだろ、とはぐらかされてしまったが、
「実は聞くと誰でもびっくりする良い家のボンボンなんだよ」と声を落として囁いた。
「え、そんな人がこんなコトしてて良いの？」
「お前に言われたかないなぁ。それと、もうちょい冗談とそれ以外の区別、つくようにしといた方が良いぞ」
「うっ…」
　なんだか馬鹿にされてるなぁなどと思いつつも、ロイドの素性がますます気になった。京は冗談の仕返しのつもりで、ロイドの冗談に乗っかった。
「自分で稼いでご飯食べたことがないようなボンボンには紙芝居の仕事はきついんじゃないですか？」
「あ？嫌みか。いーけど。…そだな、語り部っつーのはこれといって収入は無いからな。まぁ旅してるとネタになるような話も聞けて楽しいし。俺のは完璧趣味だし、周りの奴らは俺のことをアホだって笑うだろう」
　そんな風に自分のことを語る彼に、意地悪で言ったことを忘れて京は反論した。
「さっきの噺、本当に面白かったよ。アホなんてことないじゃん。子供たちだって真剣に聞いてたし、僕はいい仕事だと思うよ」
　ロイドは首を振る。
「仕事じゃない、趣味だ。いや、前の仕事を今に生かしてるから仕事に近いとも言えなくないけど……」
「前って？何をやてっていたの？」
「あぁ、前は古い資料の整理、かな。“千読み”っていうちょっと特殊な職業だよ。その読みあさってた古い試料の中に、エイダ伝説の元になったことの記録もあってな、だから俺詳しいんだよ」
「元？実際にあった話なの？」
「ああ、大分改竄（かいざん）されてるけどな。お伽噺じゃ、ルシファーは教訓足るべく悪者扱いだが、実際は良識のある人物だったらしい」
　え、と驚く京にロイドはピッと指を立てて、まだある、と先を話してくれた。

「一説には本当にこの世界をどうこうしようとしたとも言われているが、のちに王に就いたエイダを支えたとも言われているし、エイダが王になった後に裏切ったとも言われている。史実なんてのはそんなもんだ。かなり曖昧なのさ。エイダとミネルヴァは恋仲だったが、それをねたんでいたのがルシファーだとか、またその逆とかな」
　ミネルヴァと言う単語をどこかで聴いたな、と思いつつもさっきの噺が実在した人物にまつわるものだと聞いて京は興味がわいた。
「ねぇ、他にはどんなのがあるの？」
　おう、と答えてロイドは楽しそうに色んな話をしてくれた。京は話に夢中で民家の間の小路を歩いてることをさして気にしなかった。

バルゼットら三人の男たちは働き口が無く、街から街へと彷徨(さまよ)ってついに最南端の田舎町であるプリムスまで来てしまった。ここでなら何とかなるだろう、と言う淡い希望を持って街をふらつくも、よそ者であるバルゼットらを快く受け入れてくれる場所はなかなか無かった。三人は、半ば諦めかけていた。これが人生というものだという開き直りと、何故俺ばっかりという憤(いきどお)り。そんなときのあの誘いはとても甘いものだった。目の前でちらつかせられると、それを手に取らずにいれない。まるでお菓子を欲する子供のように。バルゼットらは、危険だとわかりつつもあまりに巨額な報酬に眼がくらんだ。

内容は実に簡単なものだった。しかし、それが失敗したときの危険さは大きい。それでも仕事を受けてたったのは、ターゲットの三人のうち二人が子供であったことにある。依頼は三人のうち一人でもいいから捕らえること。ならば子供を狙うの定石だ。しかし、小心者のルイスが一番小さい子を狙うのを渋り、十六、七歳ぐらいの少年を狙うことにした。

決行日、三人が揃って町中に出歩いた。しかもたった三人だけである。これはバルゼットらには好都合だった。更に進むと三人はバラバラに分かれた。思いもよらない幸運である。

天はまだ俺たちを見放しては無かった！

バルゼットは浮き足立ちながらも、予定通り緑色の長髪の男をつけた。しかし不運にも、これは暫く歩いたところで見失ってしまった。道角を曲がったらいなかったのだ。暫く辺りを歩いて探したが見当たらない。道は人が多いわけではないが、見晴らしのよい大通りである。道を行ったり来たりしていたが、通行人に不審がられては作戦は成功しない。探すのを諦めてバルゼットはもう一人の子供を捜しに歩き始めた。

北へ向かっただろうことは、ターゲットの三人が別れた道で何となく予想できたのでそちらに向かう。その道中、金髪の長身の男を見つけた。ターゲットのうちの一人である。しかし、体格を見るからに一筋縄では捕らえられそうには無い。それでもバルゼットらはとりあえず隙を見て捕まえようと後をつけ始めた。

だが、金髪の男はどんどん東にある公園へと向かう。公園まで出てしまうと隠れる場所が無く、作戦を実行には移せない。金髪の男は公園に出たところでぴたりと止まった。

―――誘われている。

バルゼットはそう考え、すぐにその場を離れた。

残るはあと一人。十二、三歳の子供である。やはり最初からそちらを狙えばよかったと愚痴るとルイスは項垂(うなだ)れた。もう、子供を狙うことに躊躇(ためら)いは無いようだ。

バルゼットらはラッパを吹く天使の噴水前で子供を見つけた。呑気(のんき)に紙芝居など鑑賞している。その後、子供は紙芝居の男と行動をともにし始めた。これはバルゼットらにとっては予測していなかったこととは言え、もう引くに引けない。頃合いを見て捕らえられるように適度な距離を保って後をつけた。

願いが通じたのだろうか、子供と男は小路へと入っていった。この道はスタンラード邸へ向かうのにうってつけの近道でもある。そして、人目にもつかない。バルゼットは作戦を実行に移した。

＊　＊　＊

「———でな、この話はここからが面白いところなんだが、」
　京は真剣に話を聞いてくれる。ロイドにとってはとてつもなく嬉しい。
　やっぱり俺は噺屋に向いてるかな、マジで転職を考えよう——と思ってしまう。聞き手がよければ話し手が生きる。話すことより聞くことの方が難しい、とロイドは常々思っているのだ。
　それでもロイドが話屋を本職としない理由はそれなりにあった。ロイドは京に顔を近づけて声を潜めた。
「とまぁ、中断して悪いんだが、暫く喋ってる振り、してくんねーかな」
　何故、と問いそうになる京をロイドは視線だけで制す。京もわかってくれたようだ。
「それでそれで？」
　明るく、話を促すように聞いてくれた辺り、随分機転が利くようだ。
「助かるよ。今、誰かに後をつけられてる。まぁ、それがバレるようじゃ、素人だろうから大丈夫だ」
　京は驚いたような表情を見せたが、しっかりと頷く。
　———よし。
　ロイドは次の角を曲がったところで、後をつける賊を捕らえようと頭の中で算段を決める。京はそのまま屋敷へ走らせればいい。狙われているのは、おそらく自分だろう、と。
　しかし、ロイドが行動する前に賊が動いたのは計算外だった。
　背後の足音が早くなり、近づくのがわかった。動き出した相手にあわせて、振り向き様に肘鉄を食らわす。がたいのいい色黒の男がそれ受け、その脇から別の男が飛び出してきたので足をかけて転がした。が、逆にその男に足をつかまれ、バランスを崩しそうになるのをもう一方の足で踏ん張りながら色黒の男の拳をよけた。そのふとした隙に、三人目の男が横を走り抜けた。
　その目的は———。
　目線だけでそれを確認する。
（しまった。俺じゃない）
　そこにはまだぼうっと突っ立っていた京がいた。
「走れっ」
　怒声にビクッと体を震わせた京だが、逃げるより先に男が京の上からすっぽりと麻の袋をかぶせた。京はもがいて抵抗するが、男の方が力が強く、殆ど意味がない。
　その様子を見ていて気を取られたロイドは、その横面にまともな正拳を食らってしまった。口の中が切れ、鉄のような血の味が広がる。ロイドはそっと腰の“もの”に手を伸ばそうとした。が、色黒の男がのしかかるようにしていきなり倒れてきて、その手は男の体の下敷きになった。そこから手を引っ張りだして男から離れようとしてロイドは気付いた。
「気絶……してる？」
　気付けば足をつかむ男の力も緩み、立ち上がることが出来た。その背後で、京を捕まえた男が間抜けな声を上げた。
「ふあぁあ…な、なんだテメー、あ、兄貴たちを…！」

男の声はそこで途切れた。振り向けばもう倒れた後である。傍らには、長身の金髪の男が立っていた。どうやらこの男がすべてやったらしい。助けてくれたのだから、この男たちの仲間ではなさそうだが、それでもロイドは警戒心を解かない。いつでも腰の“もの”が抜けるように構えておく。金髪の男は、そんなロイドを気にも留めず、麻の袋の中でもがく京を袋から出してやっていた。
「あんた、何者？」
「礼が先じゃないのか、紙芝居屋さん」
ロイドは眉間に皺を寄せた。
（そんな前からつけられてたのか…）
「あ、リアン！どうしてこんなところに？」
袋から顔を出した京が嬉しそうに声を上げた。その様子から察するに、知り合いらしい。ロイドは息を吐いた。
「いや、屋敷に戻る途中だろ？たまたま道が同じになっただけだ」
「あー、そっか」
京は妙にな得しているが、
「嘘、だろ」
ロイドが言うと、リアンという金髪の男はあっさり認めた。屋敷までの近道としてこの小路を好んで使うのは、屋敷に住む者や招かれる者の中にはいない。それだけ薄汚いところなのだ。
「お前はさ、気付いてなかっただろ」
「え、何を？」
京はきょとんとしている。やっぱりな、というように頭（かぶり）を振って、リアンはことの顛末（てんまつ）――賊に京がつけられる前からリアンが二重尾行していたことを説明してくれた。

小路を抜けるとすぐに屋敷が見えた。
この街で一番でかく、一番凝った建築物だ。
（なんだか、肩が凝ってしまいそう……）
これが京の第一印象だ。これだけすごい屋敷なのだから、すごい貴族なのだろうと思うが、旅していて色んなことに詳しいロイドに言わせれば“田舎者”なのだと言う。しかし田舎だからこそ、土地は広いらしい。大きさに圧倒されて、すごく見えるだけだ、とロイドは言った。
「じゃ、俺はここで」
ロイドが足を止めた場所は、屋敷は見えるもののまだまだ距離はある。敷地が広いだけあって、門まで回るのにも距離がある。門はまだ見えてはいなかった。
「門ならそっちをぐるっと左に回って柵沿いを歩けば着くから」
「なんだよ、もう帰るのか？」
「俺は別に客人じゃないからな。じゃあな」
京は呼び止めたかったが、リアンが惜しまず別れの言葉を発したのでそれに倣った。
結局、こうもあっさり別れてしまったのだ。意地悪されたので、こちらも逆に根掘り葉掘り聞いてやろう、なんて考えてたのに。残念だ。
「また会えるかな」
「さーな。てかお前、あの紙芝居芸人のことより自分のこと考えろ。襲われたんだぞ。こんな世界（トコ）で、頼れる奴なんていねーからな、少しは気ぃつけろよ」
リアンが思いの外、京のことを心配してくれてると知って嬉しくなった。すぐに自分の感情を表に出して、相手のことなど気にしていないように振る舞っていても、根はすごく優しい人なんだ、と新しい発見をしたような気分だった。
「うん。……でも何で襲われたのかな？」
「俺もつけられたしな。狙いはもしかしたら俺たち三人かも……。ユイはどうだろうな。案外、あいつあっさり捕まってたりしてな」
と、リアンが面白いことでも言ったように笑うものだから、京はそんな冗談はやめてよ、と言おうとしたとき、背後から声がかかった。
「俺はお前があっさり捕まると思ったが？」
「ユ、ユイ！？いつから…」
「俺が最初にあいつらにつけられた。だから撒（ま）いて、あいつらの後をつけたらお前と京が襲われたんだ」
リアンが京を助けてくれた事件を、さもテレビドラマで見た内容のことのようにユイファンがさらりと言った。
「お、れ、は、襲われてない！つーか、これって三重尾行！？くそ、気づかなかった」
「そんなことよりお前は詰めが甘い。あいつらを差し向けたのが誰か、なんで聞かなかった？」
「聞いたってそんなこと、簡単に吐かねーだろ」
「だから拷問するんだろ」
拷問、とユイが当たり前のことのように言うので、京は何のことだか一瞬わからなかった。

「…何した？」
　リアンはそんな京を眼球だけ動かして見、視線をユイファンに戻して声を落として聞いた。
「簡単だった。一人、小心な奴がいたから腕を折るって言ったらスラスラ喋った」
　その言葉に京はぞっとした。
　何故こんな事が淡々と言えるのだろう。
　何故そんなことをするのだろう。
　ユイファンは京と年が近いものと思っていた。同じ子供だと思っていた。それでもやはり、違う世界の違う人なのだと痛感する。
「折ってないんだろ」
　リアンが念を押すように聞いた。
「喋ったからな」
　だとよ、と京を安心させるかのようにリアンが京の顔を見た。それに何となく頷いたが、まだそっとするような悪寒は消えていなかった。
　違う世界の違う人種、違う考え方、全くの他人。
　そういった中に自分は放り出されたのだ、と言う実感がやっと湧いてきたのだ。
　———こんな世界（トコ）で、頼れる奴なんていねーからな
　先程、リアンが言った言葉がよみがえる。確かにそうなのだ。
　リアンもユイファンも、誰に頼ることなく生きていくことは可能なくらいの強さはあるだろう。
　———でも僕は？
　そう思ってしまうと、心がどんどん後退していくようで怖かった。何かにしがみつきたい。何かに支えてもらいたい。
　急に、日本が恋しくなった。
　いや、恋しくなったのは家だろう。家族のいる家。最近は帰りたくない、と思っていたほどなのに。
　夕日が差す中、すぐには帰りたくないからとのろのろ歩いていた自分を思い出す。そう、そのとき転んでクレイドルに来てしまったのだ。初めは怖いとも思わなかったこの異世界。この先どうなるのか、不安でたまらなくなってしまった。
　思わずリアンを見上げる。
「そんな顔すんなよ」
　困ったようにリアンが言う。
「え？」
「お前、泣きそうな顔になってんぞ。……ユイ、あんま変なこと言うなよ」
　そうじゃない、とは言えなかった。帰りたいんだ。そういったら二人はどんな顔をするだろう。
「変なこと…？わからないな」
「チッ、これだから空気読めねー奴は。——で、黒幕は誰だったんだよ」
　リアンのその一言で、京は一気に現実に引き寄せられた。

「心配しましたぞ！」
　スタンラード邸の門に足を踏み入れるか否かのところで、シルージャの側仕えに痛いくらい腕を引っ張られ、屋敷へと連れてこられた。そこに慌ててシルージャと屋敷の主であるスタンラード卿がやってきた。シルージャはあまりの喜びに目に涙らしいものを浮かべているが、それとは対照的にスタンラード卿はそわそわしていた。
「よくぞお戻りになりました。皆様がなかなか戻られず、焦りましたぞ。やはり、使いの者をつけておくべきでした」
　これはスタンラード家の威信に関わる大事、と大げさに言うスタンラード卿をリアンはきっと睨んだ。
「ああ、使いの者はいらなかったが…途中、賊に襲われてな」
「なんと」
　シルージャが驚嘆する。
「大事には至りませんでしたか。ああ、これは私の責任にございます。街の治安には自信を持っていましたが、賊がでるとは。なんたること。皆様が無事で何より」
　捲(まく)し立てるようにスタンラード卿が言う。唾が飛びそうだ、と思うくらいだが、本人は唾よりも額の汗を気にして先程から何度も拭っている。そして視界の端にシルージャを捉えて、その様子を気にしているようにも見えた。
「スタンラード卿、今日の所は三戦士(トリエント)も戻ってきたことですし、お疲れじゃろう。儂から話したいことがあるがそれはまた明日にでも。先に、街に散らばせた衛兵達に連絡を」
　毅然とした口調でシルージャが言ったのに、スタンラード卿は一瞬身体をびくつかせて何度も頭を下げた。シルージャはそれを見ずに下がろうとする。それをリアンが止めた。
「じいさん、俺からも言いたいことがあるんだが」
「なんでしょう？」
「賊の糸を引いてた奴を知りたくないか？」
　にやりと笑ったリアンに、シルージャは眉をひそめた。
「それは、いまここで明らかにすると言うことですかな」
「ああ、そうする必要と価値があるだろう」
「ということは、賊が吐いたのですか、その操り師を」
「ああ———、そこにいるスタンラードっつうおっちゃんだ」
シルージャは一度目を見開いて、そのスタンラードを見た。京も彼を見たが、予想していた以上に彼は落ち着いていた。もっと焦るだろうと思ったのに。
「はて、それは謂われのない濡れ衣というもので」
　などと言って首を傾げている。
「それは確かですな、リアン殿」
「ああ」
　スタンラードがふっと息を吐いた。
「大方、賊が私の名を口にした、と言うところでしょう。しかし私はこの街、プリムスを管理す

るもの。誰だって私の名は知っていますでしょう。問われて咄嗟に出てくる名としては無難なところでしょうな」
　リアンがぐっと言葉に詰まる。京に聞こえるくらいの小声で、あいつシラきるつもりだ、と言った。シルージャの対応にびくびくしていたときよりも数段落ち着いている。練習していたのかも知れない。だとしたらたいした俳優だ。
　証拠がない、と言われてしまえばこちらも追求することができない。シルージャとしても明確にしたいところのようだが、相手をきつく見据えただけで頭を振った。
「リアン殿、どちらにせよお疲れであろう。今日の所はひとまず…」
　リアンが悔しそうにしている。直接、賊を締め上げたユイファンはしれっとしていた。
「詰めが甘いのはどっちだよ」
　そう問うリアンに反応も示さない。スタンラードはいやったらしいねちねちした笑みを浮かべている。それを見て、京は思わず割って入ってしまった。
「あの、」とポケットから一枚の紙切れを出した。「これさ、僕を襲った奴が多分落としたと思うんだけど、スタンラードさんの家紋が入ってるんだ。それで拾ってきたんだけど、」
　それを聞いたスタンラード卿は、見ていて面白いほどに顔色が変わっていった。
「そ、それは――ッ！燃やせと書いたはず……」
　その反応を見たシルージャは誠ですか、と京の手から紙切れをひったくった。
「お前、いつの間に……」
　リアンも驚いているが、紙切れを見たシルージャはぽかんと口を半開きにした。しかし、すぐにそれを京に返すと、スタンラード卿に問い詰めた。
「これはどういう事ですかな」
　スタンラード卿は顔色が悪くなった上に身体をがくがくと震わせている。
「も、申し訳ありません、宰相様！」
　そう声を上げたのは門扉の警護をしていたスタンラード邸の使いだった。
「すべてわたし一人の謀（はかりごと）でございます！ですから、どうぞスタンラード様には……」
「お主がやったにせよ、これはスタンラード家の大罪！免れると思うな！」
　シルージャの声が玄関ホールいっぱいに響いた。これには京だけでなく、リアンもユイファンも驚いていた。
「ま、待って下さい、シルージャさん。その人は悪くないです！」
　京は床にぬかずく青年の前に立った。
「シルージャさん、その紙見てわかったでしょう？だから僕に合わせてくれたんでしょ」
　周りの人は、京の言っている意味がわからないようでぽかんと京の顔を見るばかりだ。床にぬかずく青年の顔色はわからないが、きっとスタンラード卿と同じくらい青い顔をしていることだろう。京は思ったよりも効果を示してしまったことに、ちょっとばかり後悔を覚えていた。そしてシルージャはその京じっと見た。これから何を言おうか、思案しているようにも見える。そしてふっと息を吐くと、表情は以前厳しいままだが、口調穏やかにシルージャが言った。
「ええ、あの紙にはこの街の簡単な地図が描かれていましたな」
　その言葉に、その場にいた人たち――京とシルージャを除いた全員が驚いた。それは京がアル

トリエという宿に着いたとき、ロイドに念のためと描いてもらった地図だったのだ。
「おかげで大罪人が明らかになりました。明らかになった以上、裁かねばなりませぬ。それが、スタンラード家の使いであれ、主であれ。変わりはいたしませぬ」
「僕が、その紙がスタンラードさんのだって嘘付いたのには訳があるんです」京は焦りと後悔から必至に弁護を始めた。「その人、ええと、ダッテさんでしたっけ？ダッテさんが昨日、手紙を届ける仕事に出かけるときに僕、少しおしゃべりしたんです。郵便屋さんに頼まないで直接渡しに行くなんてよっぽど大事な手紙なんですねって。そしたらダッテさん、この仕事を任されたことを誇りに思うって、スタンラードさんがどんなにすごい人かって話してくれたんですよ」
　スタンラード家の召使いでも下位にあたるダッテは、床に手をついたまま、まだ下を向いていた。
　ダッテは少年に喋ったことを悔いていた。手紙の内容は知らされていなかった。ただ、今度布く政策を試すためのものだ、と言うことだけ聞かされていた。
「この書簡を街の中にいるまっとうな生き方をしていなそうな者に渡せ。これを渡し、その者がこの街で裕福暮らせるかどうか、それを確かめるためだ」
　スタンラード卿はそう言った。だからダッテもそれを信じた。いつだって街のことを思い、街のためになるような政策を布いてきた人だ。これも何か、すばらしいことが書いてあるに違いない。中を見たい衝動に駆られたが、折角信用され任された仕事なのだからと、いまの自分はこれで十分満足なんだと、言い聞かせてその仕事を全うさせたのだ。これがまさか、こんなことになるなんて。まさか、領主様がこの世界を救う三戦士を襲うだなんて。いや、きっと理由があるはずだ。俺は領主様を信じる。領主様のやることを。
　だから名乗り出たのに、またこの少年が邪魔をする。ダッテは下に向けた顔を上げられなかった。
「シルージャ様、客間へ。ここで立ち話では疲れます。そこでお話しいたしましょう」
　この思い沈黙の中、折れたようにスタンラード卿が提案した。
「言い訳か」
　シルージャの言葉が厳しい。
「どんな罰でも甘んじて受けましょう。ただ、私の話も聞いていただきたいのです。……ダッテよ、そなたも参れ。そなたに罪を着せたままでは私は一睡もできまい」
ダッテは流す涙が誰からも見えないようにうつむいたままだった。

＊　＊　＊

　時刻はどうやら深夜らしいが、カーテンからは光が漏れているのでどうも朝のように感じる。スタンラード卿の話は深夜まで及んだのだ。深夜、だとは言われなければわからないのだが。
　スタンラード卿の練った謀策はこの街、プリムスのためのものだった。
　クレイドルの王が崩御することはすなわち、世界の安定が崩れることを意味する。それは端的に言えば内乱が始まると言うことでもある。プリムスはクレイドルの中でも一番の田舎町になる

。領土が広いだけの何もない平穏の街、それがプリムスだ。ただ、そのプリムスも王崩御の時に荒れるのは、何代も前の領主から引き継がれた日誌にも事細かに書いてある。プリムスはどの街からもかなり離れており、内乱の心配はないが、ただ一点、どの時代にも困ったことが起きていた。

それは難民の存在である。

内乱が始まると、その地から逃れてくる人が増え、そう言った人は田舎に集中する。プリムスもその一つで、領土だけは広いので、余所の街から来た人が勝手に家を建て住み始めるのだ。元々財政は、初めからいる住人にのみ有効に使われる。それを難民まで回す余裕はないのだ。そうなれば自ずと街での争いごとが増えていく。当然のように街は荒れ、この援助を首都にある大臣達に乞うのだが、彼らとて内乱の収拾でそれどころではない上、首都レックスアーブからプリムスまでは距離がありすぎる。プリムスは見放されるのが常だった。

そこで唯一にして最後の好機は、宰相らが三戦士を迎えに上がるためにプリムスを通るときであった。そのときに、街の評判は多少下がれど、余所(よそ)からあふれる難民に困っているのだとわからせる。そのための謀策だったのだ。実際に、賊に三戦士を襲わせることでその存在を印象づける。そのためだけの三文芝居のはずで、危害を加えるつもりは毛頭なかった。この作戦での失敗は、謀策の主犯がスタンラードだと知れること、そのことに彼はずっと気を揉んでいたのだ。

そして失敗した今、スタンラードは落胆の色を隠さなかったが、幾分ほっとしたようにも見えた。何事もない、と言うわけではなかったが、何よりダッテの罪を免れ、京たちも被害を受けることはなかったのだから。

このスタンラードの話が終わり、シルージャは無言で部屋を後にした。

リアンもユイファンも各々部屋へと戻るようだったし、京自身も疲れていたのでそうした。ただ、スタンラードとダッテはその場に残っていた。

朝、になったらしい時刻に京は起こされた。

何となく寝付きが悪かったので、まだ眠かったがどうやらもうこの街を出ると言うことらしかった。身支度を済ませなさい、とシルージャに言われ、それが終わると朝食を食べもせずにさっさと馬車の中に詰め込まれてしまった。

静まりかえった朝の街で、馬の蹄が石畳を鳴らす音だけが響く。

どうして、と京が問う前にシルージャが口を開いた。

「したことが街のためとはいえ、皆様にはとんだご迷惑をおかけしました。これ以上、この街の醜態をさらす前に早々に立ち去ろうという儂らの意見をスタンラード卿が了承しまして、慌ただしくはなりましたがこのような形を取らせていただきました」

「あんた、理由はどうあれ、あいつを裁くっつった件はどうするんだ」

リアンが問うた。やはり、裁かれるのだろうかと京は肩を落とした。

「ここで裁かねば、クレイドルの法が崩れます。ですが裁くのは王の役目。次代の王が決まれば卿の罪も明らかになりましょうぞ」

京はぱっと顔を上げた。

「え……てことは、」

口をもごもごさせ、手を空中でふらふらさせながら言葉を探す京に、リアンが解説した。

「今のところ、職務剥奪はしないってことだな。賢明な判断だ。ここであいつを外したらそれこそ街が荒れる。でも裁かねーと王の威厳に関わる。じいさんが裁いたんじゃ意味はないからここはとりあえず保留って意味だ」
「スタンラードはあれで三百年続く貴族。長くあの街を任せておりますからな。――それにしても、リアン殿は政情にお詳しいようで」
「詳しいって訳じゃない。ただ、近くで見る機会が多いから」
　そういえば、と京はふと思った。リアンとユイファンのことを自分はほとんど知らないのだ。お互い、違う世界から来た。勿論、生活も全然違うし、元いた世界で何をしているのかもどのようにしてきたのかも全く知らないのだ。
　ガタゴト、と馬車が揺れた。石畳の街を出たようで、揺れの周期が不規則になる。おそらく、轍（わだち）を通っているのだろう。
　ガタゴト、ガタゴト。
　ここはプリムス―――クレイドルに来て最初の街。そこを出たばかりでまだまだ旅は長そうだ。時間はあるだろう。その時間を使って、色々と話をしていけばいい。そう思えば、きっとこの旅も怖いものではないはずだ、と京は自分に言い聞かせるようにして、馬車の揺れを感じながら眠りに落ちた。

全くもって情けない。まさか風邪を引こうとは。
どういった世界の構造か、ここクレイドルでは太陽は常に南天にそびえ、沈むと言うことを知らない。それでいて、この世界では時間の概念が思った以上に確立しているのが不思議だ。
そして、京の体内時計は明らかにこの世界とズレている。
いつだったか、テレビの特集か何かでヒトの体内時計は25時間だと聞いたことがある。しかし地球の自転で決めた一日は約24時間でズレがある。なのにヒトが24時間周期で行動できるのは、太陽や時計などの外部刺激があるからだ、と学者が偉そうに言っていた。
いま、京の外部刺激となり得るのはずっと身につけているデジタルの腕時計であるが、どうも壊れたようだ。表示はされてはいるから、電池切れではないようだが、わずかにしか時間が進まない。クレイドルでの時間は、シルージャがどうしてか時間を知らせてくれる。それは従者の一人に時間の管理ができるものがいるから、と適当な説明をされたままではっきりしていない。京はすっかり生活リズムが狂い、その所為で体調を崩してしまったのだ。
（本当に情けない…）
馬車はもう五日ほど走り通しだが、次の街に着かない。道々、小さな集落、廃屋、村のなれ果てのようなものを見たには見た。しかしあれは殆ど乞食のようなもので、シルージャ達が寝起き泊まりできるような場所ではなかった。シルージャは馬車の中で、あれは昔の難民がプリムスに向かう途中でキャンプをしいてそのまま居座ったのだと説明した。スタンラードが首都の大臣に救援を求めようにもなかなかできない、と言っていた意味を熱に浮かされながらも京は理解した。
（これじゃあ、本当に何かあったときにも困るよね……。だって、重病人が出ておっきい病院で診てもらいたいときも馬車で五日じゃぁね……）
召使いのダッテが、スタンラードを崇拝するようにどれだけの偉人かを語ったときのことも思い出す。それは、まるで国の政策のように街全体の政策一手に引き受け、なおかつ管理のシステムが行き届いているというものだった。聞かされてもどれだけのものなのか、なかなか理解できなかった京だが、そんな無知の京だからこそダッテは色々と喋ってくれたのだと今更ながらに思った。政治がどれだけ大変なのかを京は知らない。
無知だ。
自分が知っていることは何もないし、特技も取り柄もこれと言ってない。自分は搾取するだけの人間。いつだってそう思ってきた。
そしていまも、早く次の街に行かなければならないシルージャたちの足を止め、彼らの時間を搾取している。シルージャの従者の一人が京の様子を診て何か言う気配を感じながら、京の意識は深く沈んでいった。
次に気づいたときは揺れている馬車の中だった。
四人乗りでなかなか座り心地の良い荷車の造りをしているその馬車には、シルージャ、ユイファン、京の三人しかいない。リアンの姿が見えなかった。京は横になった身体を起こした。

「あ…れ？リアンは？」
「他の馬車だ」
　ユイファンが素っ気なく答えた。
「ケイ殿、まだお加減もよろしくはないでしょう。身体は寝かせたままになさい」
　ああ、だからか、と思った。
　京が寝るスペースを作るためにリアンが退いたのだ。
　しかし、とふと思う。それならば、ユイファンの方が退きそうだ。同じ馬車にいると言うことは病人の面倒など見る手間があることを意味する。そういう類（たぐい）の面倒を、ユイファンは嫌っているように見えたのだ。
「じじい、今は何時だ？」
「そうですな、だいたい陽の五刻でしょう」
「陽の五刻……昼か」
　クレイドルの時間の数え方を京はまだ理解していなかったが、どうやらユイファンはわかっているようだ。
「あと一刻ほどで馬車を止め、食事といたしましょう。ケイ殿にはどうされましょうか」
「まだ、固形物は食わせない方が良い。この狭い中で戻されでもしたら困る」
「はぁ、まあそうでしょうが、全く食せず、と言うのもよろしくはないでしょう」
「まだ平気だ」
　それは、と言いかけてシルージャは口をつぐんだ。それは、の続きは京には何となくわかった。
　“それは、ユイファンの主観だ”
　この揺れの中で胃にものを入れれば確かに戻すかもしれないが、流石（さすが）に空腹を感じていた。一体どれくらいこうして横になっていたのだろう。
　シルージャの言った通り、一刻（これがどのくらいの長さか、と言うことを京は理解していないのだが、とりあえず一時間と同義だろう）が経って食事のために一行は馬車を止めた。
　何ともみっともない話だが、自分の祖父くらいの年代であろうシルージャに支えてもらいながら京は馬車を降りた。ユイファンはさっと馬車を降りると、珍しく自ら他人の元へと歩み寄る。それはシルージャの従者の一人で、一言二言と言葉を交わすとユイファンは何かを受け取った。そしてまた一人、さっさと焚き火の側へ腰を下ろし、何かもらったもので作業をし始めた。長い癖のある緑の髪をうっとうしそうに耳にかけながら、何かを作っている。それを京はぽかんと見ていた。
「意外だろ」
　いつの間にか、京の側に腰を下ろしていたリアンが言った。
「ユイファン、何してるの？」
「お前のクスリを作ってんだよ」
「ク、クスリ！？」
　毒の間違いではないだろうか、と耳を疑ってしまうほどの意外性である。

リアンが政治に詳しいことと言い、ユイファンが薬を作れることと言い、この二人はすごいなと驚嘆してしまう。どうやら京の意識がぼんやりしている間に色々あったようで、それをリアンが話してくれた。

従者の中に一人、医学の知識を噛んだ程度の者がいたようだが、薬を作る技術もなく、詳しい診断もできずに一日馬車を止めてしまったのだという。ただの馬車酔いなら近場から薬草を採ってくれば良いが、京の場合はそうではなかった。いつまでも歩を進めないシルージャたちに、ユイファンが痺れを切らしたのだそうである。滅多に自分から物事を起こそうとしないユイファンが動いたことに一同は驚きを隠せず、リアンは声を上げて笑ったという。その所為(せい)でリアンはユイファンに睨まれ、馬車を追い出されたとも愚痴っていたが。

その話を聞いてる間に、ユイファンは薬の調合を終えたらしく、京の側に腰を下ろした。

「木の実を砕いて甘く煮詰めた。飯はこれで我慢しろ。それを食い終わったらこれだ」

とユイファンが差し出したのは、見るからに苦そうな濃い抹茶色の練り薬だ。親指の先くらいの大きさがある。これを飲み込めと言うのか。錠剤でもカプセルでもないから、苦みが一気に口に広がりそうだ。

「それを、白湯(さゆ)で飲み込め」

椀に入った白湯を押しつけるようにして渡すと、ユイファンは自分の食事へと入ってしまった。

暫くそれを持ったまま、視線をきょろきょろと動かしていたが、やがて観念したように京はまず煮詰めた木の実を食べ始めた。消化しやすいようにか、ペースト状になっているそれはとても甘く、久々に食べ物を通す喉も拒まない。量は握り拳ほどもないくらいに僅かだが、それを病人とは思えないくらいの早さでぺろりと平らげた京の前には、深緑を思わせる薬が残るのみだ。

「青汁が固まったものみたい……」

それを全部、口の中に詰めると急いで白湯を飲み込んだ。しかし、練り薬であるため、喉に引っかかってなかなか飲み込めない。京の予想通り、それはかなり苦く、その苦み口中にすぐ広がり、飲み込んだ後も白湯を何杯か飲んだが、それでも苦みは引かなかった。その数時間後、ようやく次に街に着いたのだが、それまで馬車の中で顔色を悪くしていたのは言うまでもない。

着いた街は閑散（かんさん）としていた。
季節でもないのに木枯らしでも吹いているような、寂（さび）れたイメージがつきまとう。店は閉まり、街路を歩く人影は見えなかった。街の外れだからだろうか、と初めは思っていたが、中心部に進むにつれ、そうでないことがわかった。
街全体が、静かだった。
程なくして京たちが乗る馬車は、プリムスの時と同様、領主の屋敷に着いた。プリムスよりも建物は豪華で大きい。使用人の身なりも良かったが、愛想がないようにも思った。屋敷の正門で、二人の若者が京たちを出迎えた。
「長旅、お疲れでしょう」
アイスブルーの瞳の青年が口火を切った。
「イ・モルト閣下、並びに三戦士（トリエント）の皆様、部屋をご用意いたしましたのでごゆるりとお休み下さい」
次いで口を開いたのはグレイの瞳の青年。二人が門の両脇に立ち、その外側に並ぶように使用人が立っている。まるでシンメトリーのようだ。
アイスブルーの瞳の青年がディーラ、グレイの瞳の青年がツァイラと言った。顔はそっくりで背丈も同じ。茶色い髪は綺麗にセットされているが、二人の髪の分け目が右と左で違う。違いと言ったらその分け目と瞳の色くらいだ。
二人からの礼もそこそこにシルージャはすぐ部屋に通すように命じ、京たちもろくに挨拶ができぬまま、二人の青年はそれぞれの屋敷へ戻っていった。
そう、領主の屋敷は三つあった。柵で囲まれた広大な敷地に三つ。一つは門を入ってすぐの所に、もう二つはその屋敷よりも一回り小さく、大きな屋敷の両脇にあり、二人は別々の屋敷へと戻ったのである。京たちは真ん中の大きな屋敷に通された。
「シルージャさん、あの人たちって双子？」
「左様、このトワルスディースを治めるリディア家の跡取りなのですよ。しかしこのことはこの街では禁句。どうぞ、この先ここではそのことを話題に出さぬよう」
シルージャの声は小声で、恐らく、傍で屋敷を案内していた使用人にも聞こえなかっただろう。いや、聞こえていたかも知れない。それでいて気付いていない振りをしているとも言える。それくらいに、先程から使用人たちの態度は冷たい。
彼らに連れられて通されたのは、大広間だった。
そこには、一つの大きな肖像画がある。他にも寛げるようなソファ、テーブルが配置されて、一方の壁には扉がいくつかあり、それが個室に繋がっているようだった。
「こちらは普段、舞踏会などの催しで多くの客人を招いたときに使う客間でございます。そちらに」と使用人は扉がいくつか並ぶ壁を示した。「三つ、お部屋がございます。お飲み物はそちらに用意させていただきましたが、他にも何かご入り用でしたらいつでもお呼び下さい。わたくしどもは部屋の扉を出たところに控えております。では、ごゆっくりおくつろぎ下さい」
前の時と同様、この豪奢な客間はシルージャと京たち四人だけのために用意されたもののようで、これだけの広さがあるというのにシルージャの従者は別の部屋に通されたらしい。

「それでは皆様、プリムスからずっと馬車でお疲れでしょう。特にケイ殿、ここで体調を万全になさって下され。準備が整い次第、この街を出ましょう」
　シルージャは早くこの街を出たそうに、そう言った。
「ああ、大分寂れてんな。どういう政治をしてんだ、ここは。これじゃ、散歩しようにもする気にならねぇ」
　ソファにどさっと座ってリアンが言った。
「ここ、トワルスディースは今、内乱が起こっておるのですよ」
「ふーん…成る程な」と、リアンは珍しくもなさそうに呟いた。「前、じいさんが言ってた王がいないから荒れるっつーのはこういうことか？」
「そうですな、ここはその一例とも言えますでしょう」
「あのさ、」と京はおずおずと喋りだした。「原因は、さっきちょっと言ってたこととか？」
　それにシルージャが頷いた。
「あのディーラとツァルラ、跡取りが二人おりましてな。実は二月ほど前、元領主のゲッテ・イル・リディア氏が亡くなられて、今まさに後継者争いをしております。クレイドルでの貴族は、長兄が一家を継ぐことになっておりますが、あの二人を取り上げた乳母が多少ぼけた老婆だったそうで、どちらが長兄か産まれてすぐにわからなくなりましてな。幼少の頃は仲の良い二人だと聞いておりましたが、今ではどちらが領主か醜く争う始末。ゲッテ氏も嘆いておられることでしょう」
「そんな程度か…。この内乱が王の在不在に関わると？どうとでもなりそうなものだが」
　リアンとは対になっているソファに腰を下ろしたユイファンが呟いた。
「王は、この世界で神についでの絶対権力者であります。故に、各地のもめ事は王の膝元で明らかとなり裁かれる。王がおわせば、この問題も早急に解決しましょう」
「じじい、俺は政治について疎(うと)いがまるでそりゃ、王が世界を監視していて悪事を働ける奴は誰一人いないみたいな言い方じゃないか。胡散臭(うさんくさ)いな」
　ユイファンが眉根を寄せて言った。それにシルージャが首を振る。
「どう申されても結構。これがこのクレイドルの柱であり、政治です」
　シルージャはぴしゃりと言ってのけた後、眉間にしわを寄せた。
「……些(いささ)か、失礼を。申し訳ない。儂も少々、疲れておるようじゃ。若いときのような短慮を」
「ごめんなさい。きっと僕が風邪引いちゃったりしたからだと思う。うつったかな」
「いえ、これでも身体には自信があるのですよ。しかし、やはり疲れましたな。……この老人、一足先に休ませていただいても構わないですかな」
「うん、僕ももうちょっとしたら休むし、問題ないよ。ね？」
「ね、って俺に言ってんのか」
「二人ともだよ」
　ユイファンは視線を送るだけで同意の意を示した。シルージャはそれを見て部屋の一つに下がった。京はもう一つの部屋に入り、用意されたお茶を三人分注いで、テーブルまで運んだ。香り

からすると、アールグレイのような気がするが、色は紅茶のそれとは違う。一口飲むとほのかに甘いが、後から少し渋みが残る。ユイファンはそのお茶が口にあったようで、さらりと飲み干してしまった。
　そういえば、と京は思った。
　三人だけでいる、というのは初めてではないだろうか。いきなり、互いに違う世界から呼ばれた三人。この三人だけで広い客間にいる。のんびりお茶を飲んでいる。そんな時間だからこそ、何か話すことがあるように思って口を開きかけたがつぐんだ。思いついた言葉が「このお茶、おいしいね」なんていう平凡なもので、これで話が弾むかと言ったら、この三人ではあり得ない。折角なので、有意義な時間を過ごせたら、という京の考えは空回りしかけた。それを止めるものがあった。
「お前、」ユイファンが珍しく口を開いた。「政治に詳しいんだろ。その目から見てこの世界、どう思う？」
　ユイファンから振られた話にしては珍しいテーマである。ユイファンとは普段何かと口論していて、一見折り合いが悪いように見えるリアンもこの話題には興味があるようで身を乗り出した。
「先に言っとくが、詳しいんじゃない。あくまで自国の政治にちょっと関わってるだけだ。王政ってのは同じだから似てるだろうが」
　リアンはお茶を一口すすって続けた。
「正直、ユイと同意見だな。胡散臭いことこの上ない。たとえ神がいて、王がいて、政治が行き届いていようと、隅の隅まで見通すことはできない。王がいなってだけで崩れる国は多いが、王がいれば絶対荒れないって国もないんだと俺は思う。…こんなこと、言えた立場じゃねーが」
「あのさ、前から思ってたけどリアンって政治家？」
「急に話逸らすんじゃねーよ。って、まーいーけど。…俺は国軍戦士副隊長兼戦士指揮官兼王女警護だ」
「……え？」
　あまりに長い肩書きに京がついていけずに聞き返した。
「要するに人手不足で、俺が一人で三役くらい。そういう立場の人間だ」
「王女警護……随分、中枢に関わってるじゃないか。お前がそんな御仁だったとはな。お見逸れしたよ」
　とユイファンは戯(おど)けた調子で言った。
「やっぱユイ、喧嘩売ってんのか？」
「続きをどうぞ」
　そう言ってユイファンは自分のカップに新しくお茶を注いだ。
「あ…？えーっと、どこまで言ったっけ。……そうそう、国な。
　荒れるか荒れないか、それが王の存在で決まるかと言ったらそうじゃないって話だな。それだけ王が完璧な存在だったら、どこの国だって王を据(す)えたくなるだろう？だけどそうじゃない国もあると聞いたし、国同士の戦争が王によってけしかけられるときもある。『神がいる』とこの世

界では言う。神が完璧な存在なら、その神がわざわざ王を指名しなくったってテメエで政治をすりゃいい。それをしないってことは、やっぱそれなりに問題があるってことだし、俺は神の存在ってもの自体胡散臭いと思ってるからな。案外、無駄足かも知れないぞ」
「ん～。でもシルージャさんはいるって言ってるしな。僕、神様ってちょっと見てみたいかも」
「ロクなもんじゃないって、きっと。それにな、王がいないから今この街は荒れてるって言ったけど、原因が世継ぎ問題だろ？単なるお家騒動じゃねーか。それも世継ぎが産まれたのって何年も前の話だし、それは王が崩御する前だろう、恐らく。てことは、お家騒動の火種はずっと前から抱えてて、たまたま王がいなくなったときに問題が大きくなったってことだろうよ」
「つまり、王様がいるいないって関係ない？」
「そーゆうこと。間が悪い、とはこのことだ」
　はぁっとユイファンがため息をついた。
「話、長かったな。結局は一行で済むことを。俺、お茶三杯も飲んだぞ」
「あぁ？じゃ、何か？お前は話ふっといて聞かずにただ茶を飲んでたと？…やっぱ喧嘩売ってるよな、そりゃあ」
「つまりは俺の意見と同じだな、ということ」
　横でリアンが、無視かよと呟いているのもユイファンは気にせずに話を進めた。
「俺は政治とかわからないから、あのじじいに提言できない……が、とりあえず俺は俺のために進む。この世界の王がどうなろうと、今の話で関係ないってことははっきりしたから。“帰り方”がわかり次第、すぐ帰る。そのために俺はあのじじいについて行く」
「……そういうことか」リアンが納得顔で頷いた。「ま、そうだな。今はまだそうするほかないし。ケイは？」
「え、え？」
　この二人が出したかった結論は、この世界の行く末ではなかった。
　自分たちのこれからを、シルージャがいない今の内に提示しておこうという意図なのだ。それも“帰る”という、その先を見ての考えを。京は“これから”の未来を、神様に会うまでの道中としてしか捉えてなかった。その先をどうする、と聞かれても、これと言ってすぐには言葉にできなかった。多分、帰れるのだろう、と何となく思っているだけだった。
「う、ん。そだね。…でも、僕たちの役割って次の王様を決めることじゃないの？それ、放棄するの？」
「やらないと帰さないって言われりゃやるかも知れないけど、どうだろな。正直わからん」
　ユイファンもそれに頷いた。
「まだ、知らない……いや、知らされていないことがある、気がする」
「へぇ」感心したようにリアンが声を上げた。「お前もか」
「え、そうなの？」
「そりゃな。お国のことだもんな。おいそれと全部説明しねーだろ。特にあのじいさんは秘密主義だな、絶対」
　リアンは一人で納得したようにうんうんと頷いた。
　―――どうなのだろう。

京は考える。
知らないこと、確かにいっぱいあると感じた。それは、この世界に来る前から、ずっと。
自分は無知だ。それをずっと感じている。知りたい、と思うのに、なかなか思ったようにいかない。それは、ただ自分が知りたいだけで相手との情報交換が成り立たないからだといつも思っていた。
情報は、タダではない。
京の世界ではそれが常識である。だから、ギブ・アンド・テイクが基本となる。知りたい知りたい、だけで駄々を捏ねることはできないのだ。恐らく、この世界の人々もそうだろう。こちらから有益な物が得られるか、もしくはそれに値する何かを提示できなければ、知りたいことすら知ることができない。
———ただ、と京は思った。
ただ、僕は搾取するだけの人間。教えてもらいたいことを教えてもらっても、僕は何も提供できない。無知で、その上、卑怯な人間。
だから、聞いても教えてもらえないことが多いと諦め、それが普通と思い込んでしまう。そうじゃないかも知れないのに、自分に否があると思わずにはいられない。そして、知りたいことも知り得ずに、限られた籠の中での生活に満足したように錯覚し、振る舞う。これで良いのだと、言い聞かせ続けなければ、また誰かを傷つけてしまいそうで、恐ろしい。
———この籠に錠をして。
しかし籠の鍵を持つのは自分であることもよく理解していた。内鍵を閉めて閉じこもっている自分を、まるで外から見たようによく、わかっているのだ。どうか、その扉を開けないでとビクつく自分を。その反面、籠から飛び出していきたい、と言う憧れも抱いていた。
だからこそ、シルージャに必要だと言われたときは、恐ろしさ半分に嬉しかった。シルージャから聞いた話をすべてと思い、それを全うすることができる、そういう自分にひととき酔っていたのは言うまでもない。
しかしそれは所詮、まやかしなのかもしれない、と言う事実に京は混乱した。
シルージャは全部を喋ってはいない。それが事実ならば、京は籠の中でただ単に餌を与えられ、喜んでいた、と言うことに他ならない。
真実はどちらなのか、籠の中に留まっていただけではわからない。与えられたことだけを為すのか、自分で考えた上でそれを判断しなければならない。それをリアンとユイファンは臆することなく実行しようとしている。京にはそれが、眩しく、また更に自分を卑下する思いに駆られた。
———どうなのだろう。僕は、どうすればよいのだろう。
ふと見た空は、相も変わらず明るい。それが余計、京を不安にさせた。

ロイドは、シルージャたちが街を去ってもう一週間経とうという頃、ようやく次の街へ行くため腰を上げた。

プリムスはどの街からも遠い。

それ故、一度馬を走らせたらなるべく早く次の街に着きたいのが心情だった。そう思うと、ゆっくり走る馬車を一頭の駿馬(しゅんめ)が、たとえ人と荷を乗せていようとも抜き去ることは容易に予想できる。ロイドは、いや、ロイはシルージャたちと鉢合わせることを懸念して、この街に暫(しばら)く留(とど)まっていたのだ。

そう、ロイというのが彼の実の名である。旅の途中に出逢った少年はロイドが名だと誤解をしたようだ。

“ド”は冠名である。そのことを知らないようで、そのことがロイに本名を口走るのを思いとどまらせた一因でもある。

冠名とは、何代か前の王の時代から続く風習で、貴族のように名で呼ぶには憚(はばか)られる人物を呼ぶ場合、姓だけでは同姓が多く、区別のためにつけたのが由来とされている。実際、大臣に名を連ねる者には同家の出身者が多く、冠名と姓を合わせて使わなければ、人物の区別をつけにくいのだ。今では、殆ど習慣化している面もあるが、親に兄弟が多く、自身も四人兄弟のロイもまた冠名を持っていた。

自覚はないが、ロイの家もまた貴族である。自分は放蕩癖(ほうとうへき)があり、それを嫌う祖父や父からは避けられているようにも感じていた。だから、ちょっとくらい家出してもお咎(とが)めはないだろうと家を勝手に飛び出したのがちょうど三年前である。しかし家の様子も気になり、何度か王都に戻ってはそれとなく様子を伺った。すると意外にも父は自分の行方を捜しているという。警邏隊(けいらたい)の知人から聞いた話で、どうやら貴族連中にもその話は回っているらしい。ロイはますます家に帰りづらくなった。気付けば、貴族と名のつく者から身を隠すようになっていた。自分でこれは末期だな、などと呑気に考えながら。

そう呑気にも構えていられなくなったのは、王崩御の知らせを聞いたときだった。家ではさぞかし忙しいことだろう。恐らく、ロイを探している暇などないくらいに。本来だったら家名の下にロイも本分を全うするべき時期である。家に帰ろうかどうしようか、そう思いながら足は王都から遠退き、プリムスまで来てしまった。

しかし何の縁だろう。ロイは実際に三戦士(トリエント)と相見(あいまみ)えた。

街でばったり会った彼らが三戦士と知ったのは別れた後だが、京という少年との会話でそれとなくわかってはいた。とりあえずはシルージャ以下貴族たちからは身を隠したが、三戦士と会ったことで、王都に戻ろうという気が出てきた。でもやはり、鉢合わせはまずい。そう思って宿でのんびりと田舎観光を味わっていた。

街に不届き者が、僅かではあるが姿を見せてきている。この街を出るならそろそろだろうと、自慢の愛馬に水を与え、櫛を通しているそのときだった。

宿の玄関、通りの側でなにやら人が集まっている。気になってそちら側に回ると、話し声が自然と聞こえてきた。

「見たかい、あれ。ありゃどうやらミネルヴァの森近くのアル村から来たようだ」
「へぇ、アル村？なんであんさん、わかったんだい」
「見てなかったのかい？馬車を引いてた動物を。あれはアル村で重宝されているケルーだよ。アル村じゃ、馬の変わりに使ってんだ」
　ケルーは白っぽい毛の、何とも間の抜けたような顔の馬に似た動物である。馬よりも一回り小さく、足も遅いが長時間労働を嫌わず、馬よりも力がある。自然、田舎の小さな村などでは重宝されるようになった。プリムスは田舎ではあるが、他の街との行き来が意外にも多いため、足の遅いケルーはあまりいなかった。
「なんだろうな」ケルーのことを自慢げに話していた男が顎髭をいじりながら呟いた。「アル村の連中は滅多にこっちに来ないからな」
「確かに。あの村の奴らは変わっとるからな。女神ミネルヴァをこれでもかと崇拝しとる」
「そうそう。あ、そうか、案外それで来たのかもな」
「ありうる」
　もう一方の太った男が、二重あごをぷるぷる揺らして頷いた。
　ロイはアル村のことをよく知りはしなかったが、今の会話には何となく興味が湧いた。古書整理を仕事にしていたときの感覚がまだ残っていて、その感覚がざわついた。
　———女神ミネルヴァを崇拝している。
　ロイが知らないミネルヴァの歴史を、何か知っている人物が居てもおかしくはない。古書には無いような、もっと具体的な話が聞けるかもしれない。場所がわからないアル村に赴くよりは、今来た人物にそれとなく話を聞いてみたいとも思った。ケルーが引く馬車はどうやらスタンラード邸に向かったようだ。ケルー一頭で車を引いている。力が強いと言うのは本当のようだが、やはり足は遅かった。馬車も、お粗末な造りで石畳に車輪が引っかかりながら進むのは何とも不安な感じだ。よくぞそんな馬車に乗れると感心してしまう。
　ロイは櫛を通していた駿馬にちょっと待ってろよ、と声をかけて自身もスタンラード邸に向かった。

第五章　　森からの来訪者　　Lucifer comes

「痛てて……」
　彼は方向感覚を失った折に打った腰を、手でさすりながら立ち上がった。
　見ればそこは霧ばかりで周囲の様子は伺えないが、彼は自分が目的地に到着したことを確信した。打った腰も、もう問題ない。
　ここに来るのは二度目である。道などはわからない。しかしそれでも自然と足は動いた。
　———大丈夫。行ける。今回はちゃんと準備してきたんだから。
　霧は深く、前方など一寸先も良くはわからないが、それでも前を向いて彼は迷わず歩き出した。

＊　＊　＊

　アル村の村長は齢（よわい）八十八の高齢で、杖をついてやっと歩いているという有様だった。そんな老人の体調など、お天道様は気にもなさらぬよう、と言って心配する村人たちに笑っていったのはつい数日前だった。何せ、その日は女神ミネルヴァの御子が現れたと村は大騒ぎだったのだ。当然、驚いた村長もそれで腰が抜けたかのように数日たてなくなってしまった。お陰でその御子にはお目通りならなかった、そのことだけが残念でならなかった。立派だったと皆が口々に言う梟の化身にも、是非挨拶をしておきたかった。体調を崩したことよりも、その無念の方が大きかった。
「ミネルヴァ様の御子にお会いして、それを冥土の土産にしたかったのう」
　寝具に横たわって空を見つめながら思わず呟いた。独り言のつもりだった。
「お義父さん、何をおっしゃいますか。まだまだ、お義父さんには生きててもらわないと困りますよ」
　透かさず、息子の嫁から相の手が入る。励ましのつもりか、世辞か、村長にはわからなかったが、それを確認したいともどうとも思わなかった。
　その日、またこの年寄りの体調を崩すような大事が村に起こるとは、村人の誰もが思っていなかった。

　　ホウゥ———

　寝具に横たわっていても聞こえた、梟の鳴き声。
　嫁が窓に顔を向け、首を捻った。
「気のせいかしら」
「いや、私にも聞こえたぞぅ」
「あら、じゃあ今のは？でも、梟さまは御子さまを伴って王都に向かわれたはず…」
「神の為さることなど、この衆人にはわかるまいて」

そう言うと村長は身体を起こした。義父さん、と嫁が 窘 めるのも聞かずに人を呼んだ。
「おぅい、誰か」
暫くして、がたいの良い若い男が顔を出した。村長の家で奉公している男だ。
「今の声、聞いたか」
「梟の、でございやすか」
「左様。もしや、ミネルヴァ様から何か…うーん、なんじゃろう。とにかく何かあるかもしれん。確認して来い」
「わかりやした」
男が出て行くのを見送って、嫁が言った。
「昨日の今日で、また何かあるわけ、ないわ」
「いや、つい先日のことだからむしろ、何かあるのかもしれん。今度こそ、私が村長として迎えねば」
「駄目ですよ」キッと睨んで言う。「まだ、体調もそこそこなのに。これ以上悪くするつもりですか」
「後生だ。これだけは勘弁願いたい」
嫁がふうっとため息をつく。それと同時に男が戻ってきた。
「じっさま、森から人が」
ほれ見ろと言わんばかりに村長は嫁を見てやると、男に手を貸してもらいながら立ち上がった。家から出ると、もう既に村の衆が全員と言ってもいいほど人が集まっていた。そして、少し空間を経て一人の人物が立っている。皆、遠巻きにそれを見ていた。白を基調にした上下一連の変わった造りの服装、そして変わった荷を持っている。白銀に輝く長い髪は整えられ、前髪は左右に分けて肩より前に垂らしていた。後ろの腰のあたりで、長い髪を束ねている。髪は長いが性別は男のようだ。しかし女性のようにこれまた肌の色も白い。そして、端正なその顔立ちは非常に落ち着いているように見えた。
男に支えられて出てきた村長に気付くと、彼は微笑んだ。
「もしや、ミネルヴァ様の使いでございましょうか？」
ミネルヴァの御子が旅立った後だ。何かあって、あとから伝令が来たとしてもおかしくはないと思い、村長は聞いた。一瞬、彼は目を見開いたがすぐに頷いた。
「そうです。然(しか)るべき方への伝言をたずさって参りました」
「「おぉ」」
村人たちからどよめきが起こった。あちこちで何か囁く声も聞こえる。
「やめんか」村長は一喝した。「無礼であろう」
「いえ、結構です」彼はまた微笑んだ。「それよりも私は使命を全うしたく思います。王都に向かえばよいと思うのですが、何分、この足で行くには骨が折れます。お力添えをお願いしてもよろしいでしょうか」
「ええ、ええ、私たちにできることがあれば何でもいたしましょう。ミネルヴァ様の御随意に」

＊　＊　＊

森を抜けた彼は、とりあえず流れに身を任せることにした。それが世渡りのコツでもある。ミネルヴァという名が出てきたときは動揺しかけたが、何とか平静を保った。そのまま老人の言葉をじっくり聞いて、大まかなことは摑めた。彼はそれに合わせた。そうするのが一番の近道だと悟ったからだ。ここに来るのは二度目だ。だが、様変わりしているのを感じた。やはり、とも思ったし、ちょっとがっかりもした。以前来たときは村長なども居らず、村は惨憺（さんたん）たる有様だった。田舎の風情を残してはいるが、随分とまとまったように見える。目的地には着いたが、目的を果たせるかどうかはまた別問題だ。これからどうすべきかは少しずつ情報を集めていく必要があるだろう。そのためにも、まずは大きな街に行きたかった。村長はそれを聞き入れ、馬車を用意してくれた。なんだか人を騙しているようで、良心がチクリとした。心の中で何度も感謝の言葉を述べながら、彼は難なくプリムスへと到着したのである。

前にはなかった場所に街があった。

それも、かなり大きい。建物も文化的で、彼は特に整列された石畳が気に入った。お陰で馬車は変な方向に揺れたが、それは特に気にするほどのものではなかった。程なくして、大きな屋敷の前で止まった。二人の門番は怪訝な顔をする。それを同乗してきた村長の息子がそっと耳打ちをして教えてくれた。

「ケルーを下品な馬だと思ったのでしょう」

それに頷くわけにもいかず、彼はただ微笑んだ。そうすれば、解釈は相手側にのみ有効で、真意はどちらともとれる。馬車から降りた彼は、大きな屋敷の玄関で中年の男と会った。その男が家主のスタンラードと名乗り、手を差し出した。

「スタンラード卿」と村長の息子が一歩前に出た。「こちらにおわすのはミネルヴァ様の使いです。いっかな貴族といえど貴方と手を握るにふさわしい同列の者とは違いますよ」

「ふむ。神であるならばそうであろうが、使いであろう。それに、アル村の村長の息子だったか。貴方こそ、私に意見できる立場ではございませんな」

男はその言葉にぐうの音も出ないようで、押し黙ってしまった。

「スタンラード卿のおっしゃる通りです」

彼は随伴の者を慰めるつもりで言った。そして、スタンラードの手を握り、名を名乗るという社交的な挨拶をした。

それが、彼の最初の難関となった。

「ちょっと！」
　ロイはスタンラード邸の前で激しく激高する男を見た。門番にくってかかるが、門番は涼しい顔でそれを押し返す。
「あんたら、こんなことして！天罰が下るぞ！」
「五月蠅（うるさ）い！お前はもう用を果たしただろう。その変な顔の馬を連れて帰れ」
　見ればそこには、先程見たケルーが引いてきた馬車がある。門番の言う変な顔の馬とはどうやらケルーのようだ。そして激高する男に連れて帰れと言うのだから、男はアル村の者だと言うことになる。ロイは進み出た。
「どうされた、貴殿。このような豪邸の前で、見苦しいですよ」
　その言葉に男は更に顔を赤くし、門番はやれやれといった風にあしらった。
「貴方は？」
「ロイという名の旅芸人です。この度はこの高名なスタンラード卿が治めるプリムス来訪の記念にと、我が自慢の芸を是非ともご覧いただきたいと…」
「駄目だめ駄目だめ」ロイが言い終わる前に門番は顔の前で手を振った。「あの方は遊技に付き合っていられるほど暇じゃない。ほら、あんたも帰った帰った」
　言われると思っていたロイは、人受けの良い笑顔を見せて、激高する男を引っ張って一度門を離れた。
「何をするんだ！」
　男はまだ怒っている。
「相手は貴族だ、そんな風に怒ったって相手にされないよ。話なら俺が聞いてやる」
「あんたに？あんたに聞いてもらうんじゃ意味がない。あの野郎！畜生！」
「落ち着いてって。俺が話聞いて、スタンラード卿に話通すから」
「……は？」男は一瞬呆けた。「あんたみたいな一介の旅芸人が何を」
　ロイはにやりと笑った。
「知恵だけはある。どうにかなる。な？話くらい聞いてもいいだろう？」
　それを聞いて、男は不承不承とことの顛末を話し始めた。

＊　＊　＊

　神の使者を送り届ける、と言う大儀を任されて男は意気揚々と村を出た。
　道中、と言ってもプリムスまでたいして時間はかからないので、たかが数刻ではあったがあまりに興奮してしまい、意味もないことをぺらぺらと一人で喋りながらケルーに鞭を入れていたという。その間、神の使者はただただ高貴な笑みを浮かべて飽きもせず話を聞いてくれていた。そしてようやくプリムスのスタンラード邸に着き、これで大任を果たしたと思った矢先に不運が起こった。
　男としては何がどうなったのかはわからない。
　神の使者が名を名乗った。するとスタンラードの顔が曇り、まるで連行されるような扱いで神

の使者は屋敷に押し込められた。その一部始終を見ていた男は穏やかではない、一体どうしたと声を上げるとスタンラードはあれは神などではなく悪魔だと言ってのけた。それに男が激高したのだ。ろくな説明もなく、門扉の外へ追い出され、そして今に至る、と言うわけである。

＊　＊　＊

「悪魔、かぁ」ロイは話が終わったところで呟いた。「なんでだろうな」
「何でも糞もあるか！あいつら、きっと言いがかりだ。このままじゃ、あの御方が危ない。なぁ……あんた、どうにかなるって言っただろう」
　縋るように男が聞いてきたのに対し、ロイは意地悪い笑みを見せた。
「交換条件」と言って指を一本立てる。
「な、なんだ」男は不安そうに訊ねたが、「何でもする、言ってくれ」
　それでにやりとロイは笑った。男にとってはかなりの大事のようだ。うまく事を運んでやろう。
「アル村に伝わるミネルヴァの神話、全部聞かせてくれ。それとちょっとした芸を披露するから、あんたの村で雇ってくれよ。うまくいった後でいい」
　何だ、そんなことかと男は頷いた。案外あっさり頷くものだから、もっとふっかけてやれば良かったと内心で舌打ちした。
　それはともかく、これは腕の見せ所とロイはまた一人で門番の所へ戻った。
「なんだ」と門番が怪訝な顔をして言った。「駄目だと言っただろう」
「いや、今度は違う用事で。事前に文を送っていなくて失礼と重々承知だが、今すぐスタンラード卿に会いたい」
　門番は奇妙な表情を見せた。
「事前に文を送ろうが、スタンラード卿は旅芸人なんぞには会わん」
　そこでロイは意地の悪い笑みを見せた。
　ここで切り札の登場だ。普段は鬱陶(うっとう)しい家名も、こういうときには役に立つ。
　ロイが姓名を名乗ると、門番の口が見る見るうちにぱっくり開いた。ロイはそれを愉快に眺めた。

汗を拭きながら現れたスタンラード卿の顔を眺めるのも実に面白かった。
正直、家名の力がここまで大きいと思っていなかったのだが、相手はすっかり恐縮してしまったようだ。今は、スタンラード邸の応接間に通され、香り高いお茶と甘い菓子まで用意されている。それに比べ、ロイは旅芸人をしているとき同様の野良着なので、この部屋ではそこだけが似つかわしくない。しかし、ロイはそれを全く気にしていなかった。スタンラード卿は応接間に入ると、貴族然とした挨拶をした。
「ロイと言います。この度はお忙しいところ、時間を割いていただいて申し訳ない」
ロイは気さくに挨拶をした。
「えぇ…あの、申し訳ありませんが冠名は？」
「いえ、仕事とは関係なく来たのです。ここには貴族としてではなく一個人の立場でいます。どうぞお気遣いなく」
それだけいってもスタンラード卿は落ち着かないようだったが、ロイは簡潔に本題に入ろうと話し始めた。
「先程、こちらにアル村から使者が参ったとか」
「えぇ、えぇ。もう噂になっているのですか」
「いえ、たまたまその場を見ただけです。門の外で男が一人、大声で怒鳴り散らしていたので気になったのですよ。そしたら悪魔がどうこうと言うじゃありませんか。一体どうされたのです。悪魔とは……。場合によっては、」とロイはここで声を少し潜めた。「父に、話を通しましょうか」
声を潜めるという演出が功を奏したのか、それともロイの父という人物の効果かはわからない。しかし、スタンラード卿は考え込むように押し黙った。軽くあしらわれることを懸念していたロイにとって、この反応は良さそうだ。そう思ったとき、スタンラード卿がぼそりと呟いた。
「実は、その件で今悩んでいたところなのです。どう対応したらよいのか、と。正直、私の力だけではどうにもできないかもしれないと思っています」
「その、使者とは一体？」
「アル村の男は神の使者と言っていましたが、どうやら悪魔のようです。本人自らそう名乗りました」
自ら？自ら悪魔だと悪魔が名乗るだろうか。実に変な話だ。
「貴公の話だけでは些(いささ)か理解しかねる。もう少し詳しく聞いても？」
「そうおっしゃるが……私にも良くはわかりません」
「では、その悪魔だか神の使者だかに会わせてもらえませんか？」
そのロイの提案に、スタンラードは戸惑い、身に危険が及ぶとなかなか了承してはくれなかった。大きすぎる家名の所為(せい)だろう、とロイは持ち前の話術で説き伏せた。スタンラードは不安を持ちつつも、妙に納得させられた。
しかし、それでも厳重に警護役を二人おき、悪魔と呼んでいる男には縄を後ろ手にかけた。ロイとしては、会話を聞く人間が自分以外にいるのを嫌がり、何とか説得をして警護役には部屋の外で待ってもらうようにした。

「ふう」
　一通りが済んで、二人きりになったところでロイは息を吐いた。この状況まで持ってくるのに思った以上に時間がかかってしまったからだった。そして、悪魔と呼ばれた男の顔を見た。不当な扱いをされているのに、その表情は穏やかだ。見た目から、とても悪魔には見えない。年齢はロイと同じくらいだろうか。話から膨らんでしまった想像より人間味のある顔立ちで、しかし格好だけが妙に白いので、やはり人間ではないのか、と思わせる奇妙な人物だ。
「貴方は、警察か保安関係の方ですか」
　先に向こうが口をきいた。声音にも不安やおびえなどを感じない。冷静に話ができそうだとロイは安堵した。
「いや。…というか、言ってる意味が良くわかんないけど」
「ああ、表現が微妙に違うのですね、こちらでは」
「こちら？」ロイは眉根を寄せたが、「いや、詳しいことは後回しだ。時間が無さそうなんで、悪いけどサクッと話進めさせてもらうよ」
「はい、どうぞ。私もその方が助かります」
「まずお互い自己紹介だな。俺はロイ。元・千読みだ」
　一瞬、悪魔と呼ばれる男はその綺麗な顔をしかめた。ロイは、その一瞬の変化を見逃さなかった。それにこの反応。
　（京と同じ……だな）
　つまり、聞き慣れない言葉を耳にしたときの反応だ。本当は、聞き返したかっただろう。だけど、彼は話を進めること———自己紹介を優先した。
「私は、ルシファー・ケンツィベルです。科学者をやっています」
「ル…ルシファー……」
　ロイは、いくらかの答えを予想していた。しかし返ってきたのは思いもよらぬ名だ。頭が一瞬、空になってしまったかのように思考が停止した。身体も石のように固まっていたことだろう。もう一度、ルシファーから声をかけられるまで、頭が働かなかった。
「あの？先程も名乗ったらこのように捕まってしまったんですけど。私の名前って何か不吉な相でも出てるんですか？」
「あ、いや、そうじゃないけどな…。ルシファー、ね…。ファミリーネームはケンツィベル？」
「はい、そうですけど、それも何か？」
　ケンツィベル。ルシファー・ケンツィベル。
　ロイは何度もその名を頭の中で暗唱した。間違いようがない。確かにそうだと頭の中で、がんがんと警鐘が鳴り響く。
（伝説の……史実に出てくる、ルシファー）
　これは幸ととるべきかどうなのか。
　それを知るためにもまず、相手を理解することが先決だ。
「それも後回し。先に、貴方が“ここ”に来た理由を聞かせてもらおうか」
　混乱しそうな頭を切り換えて、ゆっくり訊ねた。
「……では、その前にこちらも聞きたいことがあるのですが、今は何年ですか？」

「第十五期の283年だが。ん、と……通しの暦では3507年だな」
「ああ、やはり。そうでしたか」
　意味深なルシファーの呟きに、ロイは訊ねたいことがワッと泉のように湧いたが、それをぐっと我慢した。
「んで、何で来たんだ？」
「人に会いたかったんですけど、もう無理でしょうね」
　ルシファーは、悲しそうに言った。
　ロイは、そんなルシファーの心の内まで興味を持たず、ただひたすら、頭の中で今の話を、そしてロイが知っている限りのことを整理した。
　伝説の中の悪魔、ルシファー。
　史実はそれを、悪魔とは語っていない。そう、
　ルシファーの、本当の為人（ひととなり）は―――
　ルシファーの、本当の目的は―――
「そうか……。あークソッ！」ロイは頭を掻きむしった。その突然の行動にルシファーは少し驚いたようで目を見開いた。「頭がこんがらがる！でも少しはわかった。これ、もうちょっと整理したいな。なぁ、あんた、悪いけど俺に少し付き合ってくんない？」
　捲（まく）し立てるように言うと、ルシファーはふっと少し笑った。
「はぁ。構いませんけど。でも、私もやりたいことがない訳じゃないので」
「さっきの、会いたい人がいるってやつ？」
「それもありますが、他にも」
「そこは考慮するよ。まず確認しとくけど、会いたい人ってのは？」
　ルシファーは言うのを少し渋ったが、
「エイダとミネルヴァの二人です」
　その答えがますますロイの確信を強めた。
「ん。つーことは、お前は間違いなくルシファーだな」
「……？おっしゃっている意味がわかりませんが」
「えー、つまり、」とロイは論弁する教授の如く、得意げに言った。「あんたは初代王エイダと共にいたという三戦士ルシファーであり、現在はお伽噺（おとぎばなし）で描（えが）かれている悪魔ルシファーである。今までの少ない情報でそうだと俺は断言できるね」
「……」ルシファーは黙って目を伏せた。「貴方の言葉から察するに、どうやら私は伝説上の人物となっていて、そのイメージは悪いものである。そういうことですね」
　飲み込みが早い、とロイは思った。
「そう。ケンツィベルってのも史実とそのままの名だ。嘘で名乗るメリットもなし。それ以前にルシファーの本名を知ってる奴は俺以外にいるかどうか。これが事実なら一大事ってことで、速攻で王都に行こう。ここじゃ、何もできないからな。俺の勉強にもなるし、あんたの助けにもなるかもしれない」
「わかりました。お願いします。……ですが、どうやって私を解放するつもりで？」

「ハッ」ロイは笑った。「あんたの名前も不吉な相が出てるけど、俺の名前もそれなりに効力があるんだ」

悪魔との面談を終え、無事に出てきたロイを見てほっとしたのも束の間、ロイの申し出にスタンラードは肝を冷やした。
「悪魔を、王都へ？お一人で？」
「はい、一人の方が効率もいいし、早く着くので。なに、ご心配なく。武術の心得もありますし、ここまでも一人旅だったんです。あ、野宿にも慣れてますから」
「そ、そう言うことではなく！悪魔と二人きりでは……」
「その点は大丈夫です」ロイはスタンラードの言葉を遮(さえぎ)って続けた。「実は、彼の目的が明白になりました。光る石だそうです」
「光る石？伝承の？」
誰もが知っているから使える嘘をロイはついた。『エイダの伝説』は有名だからこそ、そこに出てくる言葉を使えば誰もが鵜呑みにしてしまう。
「その石の在処(ありか)を私が知っている、と嘘をついたのです。そう簡単に私に危害を加えたりはしないでしょう」
ですが、と渋るスタンラードを説得するのは先程に比べて容易だった。ロイの、思い立ったら梃子(てこ)でも折れない性格を面会前の遣り取りで理解したためであろう。ロイは、ルシファーに乗ってもらう馬を一頭、貸してもらえないかとスタンラードに訊ねた。すると、スタンラードは惜しげもなく差し上げましょうと言った。
「プリムスでは、馬はとても貴重なのでは？」
ロイが怪訝に訊ねるとスタンラードは手を振った。
「その代わりと言っては何ですが、こちらの願いを聞き入れてはもらえますか？」
「内容にもよりますが、何でしょう？」
「プリムスを見捨てないでいただきたいのです。これから難民が増えます。どうかご助力願えますよう」
成る程、先刻からロイに過剰に気を使うのはこのためか、と納得した。父や祖父は王都で政治の中枢近くにいるほどの人物だ。兄もその跡を継ぐか、それなりの役職に収まることは間違いない。その上、末子のロイにも何か家名を負うような役割を、と父が王城で手を回していると知り、ロイは自分の意志で千読みに就いた。だが、それも短期間。ロイが単身飛び出したことを兄や父は、許しはしないだろう。しかし、そんなことは家の者以外誰も知らない。スタンラードも然(しか)りである。いくら家名が大きいとはいえ、スタンラードの言葉を父に伝えたところで聞き入れてもらえるかと言えば希望は薄い。それでも、相手を安心させるために自信を持って頷いた。
「わかりました。そのように掛け合ってみましょう」

＊　＊　＊

門外に放り出されたアル村の男は、ロイが出てくるのかを今か今かと待っていた。ロイの姿を認めると、門番が制止に来るのも気にせずロイの元に駆け寄った。
「どうだった？あの御方は？」

「うん、時間かかっちまって悪いな。大丈夫だよ。このまま王都に向かうよう、手配してもらってる最中だ」
「ああ、良かった。俺ァこのままじゃ村に帰れないって心境だった。こんなに生きた心地がしなかったのは初めてだ」
　大袈裟なことを言う、とロイは笑ってしまいそうだったが男は真剣だ。
「えぇっと、ミネルヴァ様の話だったな。ここじゃなんだし、俺に一杯奢らせてくれ」
「あー」ロイは手を振った。「いーや。俺もすぐに王都に行くことになったから」
「そうか」と男は少しがっかりしたようだった。「なんか悪いな。せめて、ちゃんとした礼がしたかったが」
「んー、それじゃ、この一件が済んだら、俺がアル村に紙芝居に行くからさ、そん時にいっぱいうまいもん食わせてくれよ」
　ロイは、プリムスが南端の田舎町だと思っていた。その更に南には人知れない小さな村があることと知り合いが出来たことで、この放蕩（ほうとう）生活も長引き、楽しいものになるだろうという予感がロイにはあった。その実現のためにも、これからの大事を解明しなくてはならない。それは骨が折れそうだが、久々に骨のある仕事を見つけてロイは意気揚々とした気分でプリムスを後にした。
　———その傍（かたわ）らに、悪魔と呼ばれた青年を伴って。

第六章　　読めない文字　　Don’t Expect of me

　朝が来た、とは誰が言ったのだろう。
　この世界に朝という概念はない。故にリアンかユイファンだったように思うが、なにせ朝に弱い京だ。
　ぼーっとする頭で言葉の意味をはっきりと摑むことすらおぼつかない。なにやらいい匂いにつられて、身体を起こした。
　起きてすぐ、ここが自分の家じゃない、と一々再確認しなくて済むぐらい、ここ数日はこの世界に馴染んできたのだろう。それでも朝起きるとはっとする。あれは夢だったのかと、儚(はかな)い記憶を懐かしむのは、寝起きや就寝などの一人きりの時間に良くあった。今も、ぼーっとしつつも過去の記憶に縋(すが)っている。
（あぁ、お茶漬け食べたい）
　そう言った小さな思いが後でじわじわと身体に上って来るのだ。京はそれを振り払うかのように頭を振った。
　部屋を出ると、シルージャ、リアン、ユイファンの三人がテーブルについて食事を待っていた。
「寝坊助」
　リアンが声をかけてきた。
「体調の方はいかがですかな」
　シルージャも次いで声をかける。ユイファンにはそれを続ける意志がないようで、そっぽを向いている。
「お陰さまで、もうすっきり」
　京はずれた眼鏡を直しながら、笑って言った。
　トワルスディースに来て三日目、三つの個室にはシルージャ、リアン、京の三人が一人で使い、ユイファンは客間のソファを独り占めしていたようだ。そうじゃなければ、シルージャたちと事前に揃って同席などしないことは京にもわかっていた。
　ちょっとずつ、ちょっとずつだが京はお互いを理解してきている気がする、と感じた。
　暫くすると、昨日と同じ使用人が食事を運んできた。やはり愛想がない。殆ど無言で作業し、食器を並べ終わると早々に立ち去ってしまう。
「ねぇシルージャさん」食べながらで行儀が悪いとはわかりつつも、聞かずに入れなかった。「この街見てると内乱って感じしないんだけど。むしろ、静かって言うか…ちょっと変な感じ」
「左様ですな」口を拭ってシルージャが答える。「これは偽りの姿と申しましょうか。儂らに醜態を見せじと、一時的な停戦状態なのです。街では心中、穏やかではないでしょうな。恐らく、儂らが街を出ればまた乱が再び始まるでしょう」
「僕たちに見せたくないの？」
「三戦士に、と言うより儂でしょう。王ほどの権限がないにしても、儂の言には効力が伴うのです。後々王が決まった折にも儂が王に進言することだってあり得ます。だから過敏になるの

でしょう」
「そうか…。じゃあ、また内乱が始まっちゃうんだね」
　なんだかそれは悲しいことのように思えた。内乱もその休戦も全部はこの地主である二人の若い貴族によってもたらされている。街の人たちはいい迷惑であるはずなのに、その二人のどちらを支持するかと街の人たちの間でもそれなりに諍(いさか)いが起きて、内乱が大きくなったと聞いた。事の発端が何だったのか、そのうち忘れて争うだけになることも考えられる、とシルージャは言った。そう言ったことを歴史が示唆しているのだという。周囲の影響力の、なんと大きいことか。
「あのさ、」
「待った」京の言葉をリアンが止めた。「まさか、内乱を自分たちで治めよう、なんて言い出さないよな？」
　図星。
　自分たちが居る間は冷戦状態なのだから、せめてそこから話し合いに持ち込めないだろうかと提案するつもりだった。リアンもここ数日の付き合いで、京が考えることが予想できたのだろう。リアンは頑(かたく)なに首を振った。
「それはな、良い意見だと自分で勘違いしちまう。だが、実際蓋を開ければ、正義ごっこをするだけの自己満足だ。部外者の俺たちが掻き回すと酷くなることだって考えられる。そう言う意見は、実用的な提案とそれを実行する実力のある奴が言うモンだ」
　京は首を傾げた。リアンの言うことはもっともな気もする。だけど、詭弁(きべん)に聞こえなくもない。正論だとは思わなかった。
　どうなのだろう、実際。
　何が正しくて、何が間違いなのかはわからない。だから、どう正せばいいのかもわからない。だけれど何もしないより、何か知るべきでは。見ているだけじゃなく、発言すべきでは。それをしない言い訳を考えるより、実行すべきでは。
　京の頭の中で思考がぐるぐる撹拌(かくはん)される。
　やらなきゃ、と言う思いが、わからない、という渦の中に飲み込まれる。
「さて、」と食事を終えたシルージャが立ち上がった。「本日中にこの街を出ますぞ。ケイ殿の言うこともっともじゃが、乱を治めるにはまず王が必要なのです。一刻も早く事を平定に治めたくば、どうか旅路を行きましょう」
　京の思考の渦は、渦巻いたまま何処かに流れて行ってしまった。

トワルスディースを出て、また数日彼らは馬車に揺られた。
旅路は殆どこの馬車で座っているだけで、楽しみは風景を眺めるかお喋りくらいだが、同世代の子供もいないし、リアンもユイファンも馬車では寝ていることの方が多かった。折角、馬車酔いしなくなったのにと京は落胆の色を見せた。それも何も功を奏しはしないのだが。
小さな街や村を通る度、トワルスディースを思い出した。規模は小さいとは言え、どことなく似たような空気を感じたからだった。だが、自分たちの目の前で乱は起きない。ひた隠しにしようというのが良くわかった。
早く王を探すことが平定への早道であると頭ではわかっていても、納得できない。京はとても歯痒かった。
（僕は、何も出来ない———）
無力な自分に今できること、それは馬車が速く目的地に着くように馬車酔いをしないことの一点だけだった。
それを続けること、何日目だろう。いくつかの街、いくつかの村、いくつかの集落を通過していった果てに、今までとは比べものにならないくらい大きな街に彼らはたどり着いた。
南側の街道は、その街の大きな門に吸い込まれるようにして続いている。京たちを乗せた馬車当然、その門をくぐった。アーチ状の門の傍らには、出迎えるかのように石像が両側に一対、置いてあった。羽ばたく梟に手を差しのべる女性の像と、剣を地面に突き刺して堂々と立つ男性の像。それはこの道中で何度か話に聞いたエイダとミネルヴァの像であった。
街道は街の中心に向かって延びている。その道は大通りで、両側には居住まいの綺麗な店が建ち並んでいる。その店から出てきてお辞儀をする人や手を振る人。完全に歓迎ムードだった。そこには、今までの街にはない活気が溢れていた。
「ようこそ、アズブルルードへ」
街の中心にお決まりのような大きな屋敷、明らかに地主と思われる口ひげの立派な男が京たちを出迎えた。
「お久しぶりです、イ・モルト様」
「ラティ、そんな堅苦しい挨拶は抜きじゃ」
ラティと呼ばれた口ひげの男は首を横に振った。
「貴方は…まだ私を子供扱いする」そう言ってはにかんだ。「私も一人の息子を持つ身になりました。一人の権力者として、当然の振る舞いをさせて下さい」
それがこれかの、とシルージャは顎髭を撫でながら周囲を伺った。
街は一種のカーニバルの中にあった。笑い声が溢れ、陽気な音楽が流れている。シルージャも嬉しそうだ。
「紹介しましょう」とシルージャは京たちに向き直った。「彼はラティウス・ガイ・アズブルルード。この街の領主です。先代と儂は長い付き合いで、ラティは幼子の時分から知っておるのですよ」
そう言ってほほ、と朗らかに笑う。当のラティは気恥ずかしそうだ。
「初めまして、歓迎しますよ、三戦士のみなさん」
そう言って気丈に振る舞うラティウスの影に、ちらっと人影が見えた。その影がすっとこちら

に顔を出した。
「いらっしゃいです……」
　ぼそっと声を発したのは、京よりも若干年下かというくらいの少年で、光の加減で赤く見える茶髪が印象的だ。いかにもお坊ちゃんという格好をしている。紹介されなくても、ラティウスの息子だと言うことは察しがついた。
「済みませんねぇ」とラティウスは笑って少年の背を押した。「息子のラルです。ちょっと人見知りをしましてね」
　そう紹介された少年はおどおどしながらも、ラティウスに押されるがまま、前に出てきた。その視線はきょろきょろとせわしなく動いている。その目がふと、京を捉えて止まった。その瞳は深い青色だ。
「こんにちは」
　京が挨拶するとラルはおどおどしながらも笑い返した。
「おや、」ラティウスが驚いたように言った。「君も三戦士かな。ラルより少し上くらいか。ちょっとの間だけかとは思うが、どうぞアズブルルードにいる間はラルと仲良くしてやって下さい」
「はい、是非。よろしくね、僕は三ツ橋京って言うんだ。京って呼んでね」
「ケイ？」ラルが大きく目を見開く。「ぼくはラルです。ラル・キア・アズブルルード」
　心なしか、アズブルルードと言うのを少し躊躇(ためら)ったように見えた。それで京がわずかに首を傾げると、ラルもそれを真似て首を傾げた。
「ラル、良かったらお屋敷を案内して差し上げなさい」
　頷きかけたラルはまず京の顔を見、シルージャやリアン、ユイファンにも意見を問うように顔を見た。
「ケイ殿、良い機会でしょう。儂はラティと暫し歓談します故、どうぞお気になさらず」
　そう言ってシルージャは次にリアンの顔を見た。リアンは首の当たりを手でさすっている。長い馬車旅で首回りが凝ったようだ。
「俺はちっと部屋で休みたいな。ユイはどうする？」
「部屋に行く。出来ればこいつと別室が良い」
　と、親指をリアンに向けた。ユイファンの言葉にリアンはまた機嫌を損ねたようだが、別室という意見に相違はないようで頷いていた。
「わかりました。皆さんの意見に添えるよういたしましょう」

そんなわけで、京はラルと二人、屋敷の中を回ることとなった。
今までの街にもあったような豪奢（ごうしゃ）な屋敷だが、隅々まで手入れがされているのがよく目につく。京たちはまず庭に回った。その一画には色鮮やかな花が咲いた垣根があった。その花は良く見ると幾重にも花びらを重ねていて、薔薇のようにも見えるし椿のようにも見えた。ただ、一つの木から複数の色の花が着くのは珍しいなと思って京は見入った。目を見張るような深紅の花もあれば、淡い赤色、白、その斑だったり、黄色いものや青いものまである。その色の濃淡も様々で、見ていて飽きないだろうな、と京は思って眺めた。
「これ、庭師のリンクが趣味で作ったライアズの道です」
道と言われてなるほどと思った。垣根が道をつくっている。花に囲まれた道。その背丈が京よりも高かったら、これで迷路でもつくれそうである。
「ライアズってこの花の名前？」
ラルはこくんと頷いた。まだ、人見知りの性癖から京に対してもどことなくぎこちない。言葉数は少なかった。
「ライアズはお茶に入れると良い香りがするんです」
「これ、垣根が壁になってて道をつくってるの？」
「はい、リンクがぼくも楽しめるようにってわざわざ」
どうやらラルはリンクという庭師には懐いているようだ。もしかすると、この庭もラルのお気に入りの場所なのかもしれない。
「あれ？」そこに甲高い声がかかった。「若、こんなところで何油売ってるんすか。駄目でしょう、ちゃんとお客様の相手しなきゃ。昨日私がそう言いましたよね？」
「う、あ、違うんだ、あのね…」
振り返って声の主を見たラルはしどろもどろに弁明をしようとする。しかしそれを遮られた。
「あら？若のお友達？」
栗毛色の長い髪を一つに結った壮年の女性は、汚れた軍手で額の汗を拭った。その額が少し汚れたがそんなことはお構いなしのようだ。今も尚、手入れの作業中だったようで、着ている服は汚れても良い作業着にエプロンで、そのエプロンも少し変わっていて、園芸道具を一通り入れるようなポケットがついている。この女性がラルの言う庭師リンクだということは、紹介を受けずともすぐにわかった。
「リ、リンク。あ、あのね、」
ラルがもう一度弁明を試みるがそれもぴしゃりと遮られた。
「言いたいことはびしっと言う！若は喋ることに不慣れすぎます。もっと堂々となさいな」
もじもじと自分の服を引っ張ったりしてはいるが、ラルは彼女の言葉にしっかり頷いた。
「はい。あの、この人、ケイって言うんだ。三戦士なの。ぼく、父上に屋敷を案内するように言われました」
やれば出来るじゃない、と彼女は満足そうに頷いた。
「それで真っ先にこのリンクの庭を案内してくれるなんてさすが若！このリンクも苦節うん年、庭を造ってきた甲斐がありますわ」

苦節うん年って、と思ったが女性としてそれなりに年齢を気にしているのだろう。確かに見た目は中年の女性だし、庭いじりで服も顔も汚れている。お世辞にも美人とは言い難いが、クレイドルに来てから始めて活き活きした女性を見たと京は思った。
京もいくらか言葉を交わし、実に闊達(かったつ)で話しやすい女性だという印象を受けた。
ラルが次を案内すると言って庭から離れる寸前、リンクは後ろから京の肩をちょんと小突き、小声で言った。
「若をお願いしますね。何にでも物怖じしちゃうんで、是非仲良くしてあげて下さい」
そのときのリンクの顔は、まるで優しい母親の笑顔そのものだった。京はそこでまた、ふと家族のことを頭に浮かべた。

＊　＊　＊

しかし、リンクに頼まれたようにラルと仲良くなると言うのはそうそううまくいかなかった。夕飯の時刻まで、屋敷をぐるっと案内してもらっている間、何度も話を振るが手応えは今ひとつなく、京も少し困り果てた。その日一日の顛末(てんまつ)を、割り当てられた部屋でリアンに言うとリアンが驚いたように言った。
「へぇ〜。流石のケイもお手上げか」
「流石って、何が？」
「お前、誰とも気兼ねなく話すじゃん。誰とでも友達になれますって感じで」

そう言えば、とリアンのその言葉が京を過去の記憶へと誘(いざな)った。
小学校高学年の時に、仲が良かった友達にある日突然、露骨に嫌われたことがあった。何故、と問うと彼はこう言ったのだ。
「お前、誰と友達なんだよ」
京にはさっぱり意味が摑めなかった。
「え？みんな友達でしょ？」
「あいつもかよ」
と彼が示したのは彼と犬猿の仲にある男の子だった。
そうだよ、と言うと不快な顔をしてこう罵られた。
「良い子ちゃんぶってんじゃねーよ！誰とでも友達って顔してずかずか土足で何処でもあがれると思うなよ。俺、お前のそう言うとこが嫌だ」
当時、京は嫌われたのだという事実だけがただただショックだった。誰とでも仲良くなっちゃ駄目なのか。どうしてあんな風に思われ、あんな風に罵られたのか。京にはわからず、落ち込んでいた日々が続いた。それを見ていた幼なじみは京に同情を示すことはおろか、更に追い打ちをかけた。
「京ちゃんってさ、広く浅くの人付き合いだよね。誰かさ、一人でもこの人は一番！っての、作った方が良いよ」

広く浅く、と言う言葉が京の頭の中で反復した。
そうだろうか。本当にそんな付き合いしかしていないのか。
自問自答して、そのことを自覚するのに時間がかかった。そして自覚すると共にまた愕然としたのだ。そこに一つの答えを見つけたから。
何故広く浅い人付き合いをするのか。
何故誰にでも良い顔をするのか。
そうやって、色んな人から色んなものを得るためだ。あの人からはあれ、この人からはこれ、と得るものを得る。しかし、浅い付き合いでは向こうからの要求は少ない。これはすなわち、搾取だ。ただ奪うだけ。それも、奪っているのだと極力気付かれないやり方で。
母は京のことを世渡り上手と言った。母ですら気付いていないのだ。
自分自身が気付くのにも時間がかかった。なんて卑怯なことだろう。そう思っているのに、いっこうに改善されない自分の性格に京はだんだん落ち込んでいった。
しかしそれを誰にも相談せず、誰にも気付かれないようにいつも通りに振る舞う。結局、変わることなど出来ないのだ。

ここ、クレイドルでもそれを繰り返している。
それを再び思い返したのは、リアンの先程の言葉だ。
嫌だ、と思った。そして同時に、ラルと仲良くなるのはよそうか、とも思った。向こうだってその程度の付き合いを望んでいるはずだ。しかしそこで、庭であったリンクの顔が浮かんだ。若をよろしく、と言ったリンクの優しい顔。そしてリンクとは楽しげに喋るラル。ラルはどっちの付き合いを望んでいるのだろう。
「あのガキさ、」と黙りこくった京にリアンが言葉を継いだ。「なんか無性に腹立つんだよ。表に出たいのに出れない、みたいなあの態度。こっち来たきゃ来りゃいーじゃん。ケイ、ああいう手合いはびしっと言ってやるのが肝心だぞ」
「え、あ、うん」
驚いた。まさかリアンが助言をくれるとは。それで惚けていると、リアンは顔を少し赤くしてそっぽを向いた。
「受け売りだよ。俺の言葉じゃない、勘違いすんなよ。大したこと言ってねぇだろ」
「あ、そだね」
あはは、と笑うとリアンがこいつ～、と睨め付けた。そして最後に一言付け加えた。
「悩みってのは溜めるもんじゃないぞ」
悩みは溜めるものじゃない。確かにそうだ。
しかし、悩みを打ち明けられるほどの相手がいないことが、また京の心に影を落とした。

「ここは南邸なんです。北に本邸があって、そっちの方が大きい屋敷なんですけど、王都からの来客を迎えるときぐらいしか使わないです。父上は南邸の方が気に入っているみたいで、家の者は父上のことを変わり者だと言うんですけど、良い領主だとも言ってくれます」
　滞在五日目。なんだかんだと思案しつつも、屋敷にいる暇な時間はラルと過ごすことが当たり前のように毎日ラルと会っていた。
　屋敷の案内から街の話が殆どで、それだけで時間をつぶしている。日に日にラルの説明は上達していった。どうやら、京と会う前に予習をしてきているらしい。街についての話をするときは少し誇らしげだ。
　だが、肝心の街にはあまり出ることがなかった。リアンやユイファンは街を散策してきたらしいが、京は屋敷でラルから話を聞くばかり。
　その上、一所に五日も滞在することすら珍しかった。シルージャはそれ程までにラティと仲が良いのかと少々疑問に思うほどである。
「何で父上が南邸を好んでいるのかというと、」
「ラル」
　京は流石に退屈さを感じていた。今までは話を聞くだけだったが、そろそろこちらの言い分を聞いてもらえるのではないだろうか、と思った。それだけラルが落ち着くまで待っていたのだ。これには一つ、リンクの知恵も入っている。毎日、ラルは庭に顔を出すのでリンクとも自然と毎日会うようになっていたからだ。
「ラル、あのさ、僕街を散歩してみたいんだ。ほら、この前言ってた街の石畳に隠された梟の形をしたブロックを見つけると幸運を授かるって話。あのブロック見に行こうよ」
「え…でも、ごめんなさい。……ぼく、そのブロック、何処にあるか知らないんだ」
「まぁ、簡単に見つかっちゃ、幸運を授かるって話も胡散臭く聞こえるもんね。だから、ブロック探しを兼ねて散歩しようよ。僕、街見てみたい」
　ラルは街に出ることに抵抗があるようだ。そのことはリンクからも聞いていた。もう一押しだ。
「ラルに街を案内して欲しいんだ」
　ラルは困った顔をしながらも頷いた。

　ラルは街に出ることに躊躇(ためら)いがある。
　それを屋敷の者も心得ているようで、おどおどするラルに随伴を申し出ていたがラルはそれをことごとく断った。屋敷の者もしつこくは言わず、それに頷いて行ってらっしゃいませなどと愛想良く送り出したが、二人ほどがこっそりと後を着いてきた。プリムスでのこともあるので釘を刺されているのかも知れないが、ラルのことも心配なのだろう。当のラルは影の随伴者には気付いていないようで、大通りをまっすぐ歩き出した。
　大通りは両脇に店が建ち並び、人通りも多く、馬での行き来も目立った。ちょっと開けた場所では出店や旅芸人のパフォーマンスも見られた。とにかく賑やかだ。
　これはラルから先日聞いた話の通りだと言うことが実感できる。

首都から各地方への街道の中で最も主流な物の一つが、このアズブルルードを南北に突っ切っているオウル街道なのだ。勿論、王都からではなく地方から来た場合も必ずこの道を通る。商業用の馬車が通ることも多く、この街道沿いで盗賊に襲われるという話は昔良くあったそうだ。それを盗賊の取り締まりや、王都への関所としての役割を兼ねて貴族が此処に街を作ったのが始まりとされている。今や関所とは形ばかりで、商人が通る度にこの街は潤うようになっている。店の賑わいを見ればそれがはっきりわかった。

飲食店でも何処の地方の特産だとか、郷土料理だとかで客を引きつけている。地方文化が入り混ざった、まさに商業都市なのだ。

「ん？」

京は大通りをラルと北に向かって歩いている途中、左手にやけに細長い建物が見えた。高さもそれなりにあり、一際目立つ。外壁は真がつくほどの白。陽の光を受けてそれが光って見えた。

「ラル、あの建物はなぁに？」

京が指をさして聞くとラルは一回首を傾げてから答えた。

「えっと…多分、トロットの尖塔（せんとう）です」

「トロット？」

「はい、トロットはアズブルルードと親戚関係にある商人です。昔、この街が出来て間もない頃に商業で成り立っていくよう尽力した立派な貴族です。その当時、商業で成功したことを祝って建てた尖塔だと聞いてます。あの周辺は少し開けた場所になっていて、そこで商売するにはトロットの許可が必要なんです」

「今じゃ、そのトロットも廃れたがな」

背後からの声にラルはびっくりして京の腕にしがみついた。見ると浮浪者風の男が酒瓶片手に立っていた。顔が少し赤いことから見ても、昼間から飲んでいたのは間違いないだろう。

「なんですか？」

後からついてきた従者が動き出しそうなのを視界の隅に入れながら京は聞いた。

「おう、聞いて驚け。俺がそのトロットよ。リードル・トロット様だ」

「リ、リードル小父（おじ）さん？」

ラルが京の腕にしがみついたまま目を見開いて聞いた。

「おうよ、久しぶりだな、坊ちゃん」

「リードル小父さん、どうしてそんな格好で…？」

「ん、ああ…」リードルは白髪交じりの頭をぼりぼり掻いた。「数年の前の話よ。トロット広場が浮浪者のたまり場になったのは。お陰であそこで商売しようなんて輩がいなくなっちまった。そいで俺もこのなりよ」

トロットは自虐的に笑って酒瓶を仰いだ。

「そ、それなら！父上に言ってどうにか……」

「どうにもならねぇよ」リードルは吐き捨てるように言った。「あそこを浮浪者のたまり場に決めたのは他でもねぇ。おめぇの親父よ」

ラルはその一言に相当なショックを受けたようだ。京の腕を掴む手に力が入った。それを合図

のように、後ろから従者が近づいてきた。
「やぁトロットさん」
　青い服の若い男がまず話しかけた。一緒にいるのは白い服のショートヘアの女性だ。二人で連れ添っていればカップルに見えなくはない。尾行するにはちょうど良かっただろう。
「いけませんわね、こんなところで立ち話は。若も、お客様の相手をしている最中です。トロットさん、私たちとそこの茶屋でも行きませんか。勿論、奢らせていただきますわ」
「けっ！若造が！坊ちゃんだってもうガキって年じゃなくなる。後ろめたい部分を隠そうったってそうはいかねぇ！」
　リードルの大声に大通りを歩いている人たちが視線をこちらに向けた。ちらり、と見てはまた視線を戻す。そうやって自分は関係ないですよ、と言う顔をしながら見物しているのだ。
　二人の従者は慌ててリードルに何かを握らせた。ちゃりん、と言う音がして、それでまたリードルが激怒した。
「こんなんで俺をどうにか出来るとでも！？」
　握ったものを地面に叩き付ける。派手な音をして硬貨が数枚、石畳を転がっていった。
「では屋敷へ。ラティウス様がお待ちしております」
「あ、あの……」ラルがビクビクしながらも声を出した。「ぼ、ぼく、そこの茶屋で、リ、リードル小父さんと話が、し…たい、です」
　従者は困った顔をした。
「若、しかしこれは…」
　男が言いかけたのを、女が遮った。
「話なら茶屋ではなくて屋敷でも出来ますよ。一緒に帰りましょう」
「で、でも……」
　ラルは言葉を探すように目をきょろきょろさせた。
「じゃあ、僕たちだけで話させてくれるんだったらいいですよ」
　京が言うと、女の鋭い目つきが京の顔を見据えた。ちょっとの間。
「わかったわ」

　屋敷の客間、比較的小さい部屋に京とラル、それにリードルが通された。屋敷の者がリードルを見るときの目つきはあまり良いものじゃないのは、京でもわかったが当の本人は気にしてないようで、鼻歌なんか歌っている。
「坊主、なかなか良い機転だった」
　ソファに腰を下ろすなりリードルが言った。
「別に、機転を利かせたわけじゃないですけど」
　リードルは首を振った。
「んにゃ、これで坊ちゃんとゆっくり話が出来るってものよ。……にしても坊主が三戦士（トリエント）ねぇ。人は見かけによらねぇや」
　屋敷の表にあった造りの良い馬車に、忙しそうにして緊張気味の屋敷の者の様子を訊ねたリードルに京はそこで始めて自己紹介をしたのだ。

「その上、宰相様が滞在中とはねぇ。俺の鼻も効かなくなってきたなぁ」そう言うと、身をかがめてリードルはラルを見据えた。「気ィ付けなさいませ。彼奴(あやつ)が元凶よう」
　腹の底から出したような重くのしかかる声にラルはびくりと身体を震わせた。
「元凶って、なんのですか？」
　ラルの変わりに京が訊ねる。
「あぁ、トロット広場の浮浪者よ。あんたも三戦士なら知ってんだろ。王様が亡くなったってんで、あちこちで問題が起きてる。浮浪者なんか今じゃ、何処にでもいらぁ」
「でも、さっきリードルさん、数年前って言ってましたよね？浮浪者が住み着いたの。おかしくないですか、王様って最近亡くなったんじゃぁ？」
　これにリードルは頷いた。
「王崩御の知らせは確かに半年前に流れた。でも王様が危篤(きとく)だって話は数年前から噂になってたんだよ。なんでも、王女様はそれで城を出て行かれたとか。影射す噂にゃそれなりの影響力があるってもんだ。王都周辺の貧困層はさっさとずらかってったぜ。行動が早かった奴は、転居した地でうまくやっているだろうが後から後から移民が増える。これが街に収まんなくなって難民になるんだな」
　なるほど、そういうことか、と京はいくらか納得した。ラルは話の間中、俯いたままだ。そのままで、ラルはようやく声を出した。
「それで…トロット広場のこと、どうして父上が……？」
「ああ」と言いにくそうにリードルは頭を掻いた。「……ラティ殿は、ほれ。宰相殿と仲が良い。最初は難民を受け入れようとした。でもやっぱり無理だった。大通りに浮浪者風の奴がいてみろ。商業を売りにしているアズブルルードのイメージダウンだ。だから通りから離れた広場を指定したんだ」
　そんな、とラルは息を飲んだ。
　でも、どうして、を口の中で連呼する。隣にいる京がやっと聞こえるほどの声だ。リードルには聞こえていないだろう。そう思ったが、リードルは首を振って答えた。
「どうしようもなかったのさ、ラティ殿も。俺だって初めは頭に来て何度此処にどやしに来たか……。今でも腹の虫は収まっちゃいねぇが。でもな、」リードルはすっと顔を上げ、京を見た。「三戦士が来た。この世界が元に戻るのもそう遠くはねぇはずだ」
　期待を込めた目。
　そんな目で見ないで欲しい。
　僕には何も出来ないのに。
　僕はどうして此処にいるのか。
　いやだ、逃げたい。
　逃げたい。
　でも、逃げて何処へ行く？
　もう逃げられないのだ。
　何処へ行っても沈まない太陽が京を監視する。

京にはそんな風に思えた。

リードルは引き留めるラルの誘いを丁重に断って広場に戻っていった。今じゃ、浮浪者が問題を起こさないようにする監督者のような存在になっているらしい。彼奴(あいつ)ら、俺がいないとすぐ駄目になる、と言って軽い足取りで出て行った。
ラルはリードルの話にショックを受けていたようだ。
夕暮れ時（太陽は南天にあるが）になっても、リンクの庭園にあるベンチに黙って座ったままだ。京も何となく放っておけなくて隣に座っているが、声をかけずらい重い空気が流れている。
（うう…どうしよう。いつもだったら、こんなの平気なのにな……）
なんと声をかけるのがベストか。いくつか案が頭に浮かんだが、浮かんだ端から自分で却下する。そうこうしている内に、リンクが夕餉を告げに来た。
「何があったかは知りませんけどねぇ、男の子がそうウジウジしてたらみっともないったらありゃしませんよ」
開口一番リンクはびしっと言った。しかし、ラルは顔すら上げない。
「ぼくは…何も知らなかったんだ……」
ぼそっと、これまた隣にいる京がやっと聞こえるほどの声だったが、リンクは声を張って言った。
「当然でしょう！アタシだって知らないことはたっぷりあります！それくらいで、何ウジウジしてるんですか？！」
「でも！」とラルが声を張った。「父上はぼくに何も教えてくれないし、ぼくは…」

ぱしん！

京は心臓をばくばくさせていた。ラルは何が起こったのか、わからないように呆けている。ラルの左頬が遅れてほんのり赤みを帯びた。
「何言ってるんですか！教えてくれないと言う以前に、何も聞いていないじゃないですか、若は！」
リンクに叩かれたのだ。ラルはそのことに驚いていた。
「若！もっと自信を持って下さい。誰も貴方のことを嫌いになんか思ってません」
それだけ言うと、リンクは大股で庭園を出て行った。その目が少し赤かったのを、京は見逃さなかった。
ラルは、放心したようにぼうっと庭を見つめている。
「あ、あのさ…」
京は言葉を探しながら声をかけた。ラルのようにきっと僕は目をきょろきょろさせているんだろうな、と思いながら。
なかなか次の言葉が出てこなくて、不自然な間が出来た。それを補ったのは意外にもラルの方だった。
「ケイはぼくのこと、どう思いますか？嫌いですか？」

ストレートに聞かれると非常に答えづらい質問だ。始めてあった日から数えて五日目という付き合いである。好感を持てるほど親しくなったとは思えないが、だからといって嫌うほどのこともない。それで京は嫌いではない、と思ったままを口にした。ラルは俯きながらもはにかんだ。
「リンクは優しいですけど……多分、屋敷の人たちは僕のこと嫌いなんだと思います」
「そんなことないと思うよ」思わず口をついて出てしまった。「さっきの後をつけてた二人だってラルのこと心配だから、きっと…」
滑って出てしまった言葉を補おうとして続けた台詞は、京自身、建前なのだとわかっていた。そして、当の本人はそれを一番理解しているようだ。ラルは頭を振った。
「違います。僕が変なことしないように見張ってたんです、だって……だって、」そこでラルは唾を飲んだ。「ぼくは……父上の子じゃないから…」
小さくてもはっきりと聞こえた台詞。ラルのここまで物怖じする態度はここからきているのかと京は思った。本当の父子ではない。つまり、養子ということになるのだろう。血筋はアズブルルードの家系ではない。それなのに、一人息子であるがためにいずれはこの家名を背負って立たなければならない身にあるのだ。
「知ってるんです。ぼくが、ここの当主になるのを嫌ってる人がいることを。その人は今も父上に縁談を持ちかけます。その人は僕のことを汚いものでも見るような目をして見ます。全部、知ってるんです」
はっきりというその声は今にも泣き出しそうだ。
当主になる。自分でよいのか、と言う自問はいつも否という答えが返ってくる。誰かから否と思われている確信があると、そういうマイナスな考え方しかできなくなってしまうのだ。
「でも」とラルは顔を上げた。「父上はぼくのことを本当の子どものように扱ってくれるし、リンクはお母さんみたいでぼくは嬉しいんです。父上もリンクも尊敬してます。でも、父上はぼくにあまり話をしてくれません。隠し事が多いんです。今回も…それを知って……」
そうか、そうなのか。
ラルは自分が当主になることに責任を持っている。ラティウスも期待をしている。なのに、肝心の街の治世や仕事の話は伏せているのだ。そのことが、ラルにとって悲しいことなのだ。
「ラルは、本当にお父さん想いだね」京は笑顔で言った。ここまで尊敬できる親子関係が羨ましかったからだ。「ラルは、絶対良い当主になるよ。こんなにお父さんのこと、想ってるんだもん」
ラルは半泣きの顔だったが、照れたように笑った。
「ありがとう」
その言葉には自身が溢れていた。父を想う気持ちは、本物なのだと。

＊　＊　＊

夕餉の後、ラルが京たちがいる部屋にやってきた。それは珍しい、というよりは滞在中初めてのことだった。ラルは、いつも京が見る表情と違う顔で、シルージャの前に来た。気をつけの姿勢、そして———、

「イ・モルト様、ぼくを王都に連れてってくれませんか？」
　この申し出にシルージャや京が驚いたのは勿論、リアンとユイファンも表情を変えた。それだけ意外なことだったのだ。
「ラル、それ、お父さんに許可もらってないでしょう？」
　京が問うとラルはコクンと頷いた。
「ぼく、父上が街に出歩くことも規制するし、知らないことが実はいっぱいあったのに偉そうにケイに色んな話してごめんね。今日、外出て思ったんだ。やっぱり見て歩かなきゃ駄目だって」
　そこでリアンが口笛を吹いた。
「言うじゃねぇか」
　ラルはこの五日間、体躯（たいく）の良いリアンを怖がってる風があったが、このときばかりは照れて笑った。
「父上はきっと許してくれないだろうから、イ・モルト様にお願いしたいんです。…それと…ぼく、実は……」
　そこでラルはまごついた。一度決心しただろうに、どうも言いにくい内容らしい。京はゆっくりでいいよ、と声をかけたが、それでまた決心がついたようだ。
「実はぼく、千読みになりたいんです」
「ほほぅ」シルージャは長く白い顎髭をさすった。「それは感心。しかし王都行きはお父上からの許可がなければどんな事情とはいえ、連れてはいけませんな」
　ラルは目に見えてがっくりした。
「おい、ガキ」リアンの凄みの効いた声にラルの身体がびくっと震えた。「やりたいことがあったら、それはちゃんと認めてもらってからの方が良いぞ」
「経験談か」
　腕組みをして目をつぶっていたユイファンがからかうように言った。リアンがうるせぇと小声で言う。
「うん、僕もそうした方が良いと思うな」
「そっか…」
　ラルは呟いて一礼し部屋を出ようとして、取っ手に手をかけたところで止まった。そして振り返って京を手招きした。
　なんだろう？
　京はリアン達にちょっと行ってくるね、と声をかけてラルを追った。行き着いた場所はやはり庭園だった。花の香りが立ちこめた綺麗で落ち着く庭園。そこのベンチにラルが腰をかけて京を待っていた。
「どうしたの？」
　京が声をかけながら隣に腰を下ろした。
「理由…」
「えっ……？」
「ぼくが千読みになりたいって言った理由を京に聞いてもらおうと思って。迷惑…かな？」

　京は首を振った。千読み、と言う職業がどんなものかは知らない。ただ前も聞いたことがあるような単語だから、きっとすごい役目を負った職なのだろうと思った。そのことについての興味を、ラルがそれを目指す理由についても興味があった。
　ラルは頷いてから首のあたりに手をかけた。ラルは貴族風のきっちりした服装で、首のあたりにタイを付けていることも多く、気付かなかったがそこには細いチェーンのようなものがあった。それを引っ張ると、襟首から金属プレートが出てきた。
「これ、見て」
　幅が約一センチ、長さが約二センチちょっとの金属プレートに何やら文字らしきものが彫ってある。
「なんて書いてあるの、これ？」
「わからない」
「え？クレイドルの文字じゃないの？」
　京はもう一度プレートを見た。直線よりは曲線の割合が多い字で、丸や点などの単純な形はない。街で見かけた店看板にある字とは確かに違う形のようだ。京はふと、母親が書くミミズ字のそれに似ているとも思った。
「どっちから読むのかもわからないんだ」
　とラルはプレートを横にしたりもして見せた。見る向きによって字の印象は変わる。知らない字なのだから尚更だ。
「これ、そもそも字なの？模様じゃなくて？」
　聞きながらも文字だろうな、とは思った。一つ一つが記号のように並んでいるのだから。模様であれば続いたもの、あるいは繰り返しやシンメトリーなど見目良いものになっているはずである。
「これ、父上がぼくを拾ったときにぼくの首に掛かってたんだって」
　京は驚いてラルの顔を見た。ラルの表情は落ち着いていた。“拾った”とはつまり、ラルは捨てられていたと言うことか。本当の子どもではない、と聞いたとき、どこかから養子をもらったのだろうと思っていた。アズブルルード夫人に何らかの理由で子が出来ずに仕方なく、と言った理由とか、そんなことを考えていたのだ。拾ったとなれば何処の血筋か知れたものではない。屋敷の者でラルに嫌悪感を覚える者はきっとそのことを厭らしく思っているのだろう。
「きっと、ぼくの本当の親がくれたんだろうって父上は言うけど、ぼくの親は父上や屋敷のみんなしかいないよ。こんな物残されたって、と最初は思ったけど、どうしてこれを残してぼくを捨てたのかなって最近は思うんだ」
　うん、と頷いて京は聞いた。
「じゃあ、この字を読まなきゃいけないわけだ。で、それと千読みって関係あるの？」
　ラルはにこりと笑って頷いた。
「父上の書斎で色々文献読んでみた結果の結論です。これ多分、異世界文字なんだと思う」
「異世界文字？」
「うん。だからちょっと、ケイなら読めるんじゃないかって期待しちゃったけど、やっぱり違うみたい。異世界って複数あるって話は本当なんだ」

　これに京は頷いた。確かにリアンとユイファンはそれぞれ別の世界から来たようだ。
「ところで千読みって何やってる人なの？」
「あ、ケイは知らないんだ…。そうだね…、ただ、文字を読む人、なんだけど？」
「文字を読むだけ？」
「うん、昔の三戦士が残した文章はみんな違う字で書かれて、史書として残ってるけど、それを解読するのが千読み。千もの言葉を知り尽くしているから千読みって言うらしいよ」
　千読み。どこかで聞いたことがあるとずっと前から引っかかっていたが、そうか、思い出した。ロイドだ。確か、古い資料の整理をしていた、と言ってなかったか。特殊な職だとも。
「僕、もしかしたら千読みやってた人を知ってるかもしれない」
「え、本当？」
　ラルが目を輝かせた。
「ロイドって人で、今は旅芸人やってたよ」
「ロイド？」ラルは腕を組んでぐっと考え込んだ。「ロイド……。そんな人いたかなぁ？」
「まさか、千読みに誰がいるか、全部知ってるの？」
「はい。千読みってなるのがすごく難しくて、今現在は五人しかいないんですよ。その中でも稀代（きだい）の天才って謳（うた）われている千読みがいてですね、彼が……」
　そう言ったところでラルは空を見つめたまま静止した。
「どうしたの？」
「ケイ、もしかしてその人、ロイドじゃなくてロイ・ドじゃないですか？」
「え…」微妙な発音の違いを京は良く聞き取れなかった。「う、う～ん。言われればそんな気がしなくも……」
「凄いですよ！」ラルが嬉しそうに言った。「その人、絶対そうです！稀代の天才千読みですよ。ロイ・ド・モルト、彼に読めない字はないと聞きます」

＊　＊　＊

　数日後、旅の支度も整いようやくアズブルルードを立つことになった。この数日、ラルは京たちと共に王都に行きたい旨をラティウスに話していたが、渋面を作ったラティウスは結局首を縦に振らなかった。
　ラルはもうちょっと粘ってみます、と言って京にある物を手渡した。
「え！？ラル…、これって…」
「違いますよ」と悪戯を成功させた子どものように笑う。「複製です。リンクに頼んで作ってもらいました。街のとある工房の主人が似せて作ってくれたんです。そっくりでしょう？」
　ラルは本物の金属プレートを首から出して見せた。確かに似ている。
「これくらい出来なくちゃ、商業で発展したアズブルルードの名が泣きます。あの親父にはそう言っておきましたからね」リンクが満足そうに頷いた。「ケイくん、この数日はありがとうね」

「いえ、こちらこそお世話になりました」
　なんの、アタシは庭いじりしかしてないよ、とリンクは豪快に笑った。ラルもつられて笑う。そのとき、シルージャとラティウスが屋敷から出てきた。それを見てラルが早口に言った。
「ぼくもいずれ王都に行くつもりだけど、ケイの方が早いからこれ持って行って欲しいんだ」とケイの手に偽の金属プレートを握らせた。「父上や宰相様には内緒ね」
「うん、わかった」
　京はプレートを握ってない反対の手を出して小指を立てた。
「なぁに？」
「僕の国の風習。約束した時、小指を絡ませて約束は破らないってことを誓うんだ」
　京はラルの手を摑んで小指を絡ませた。
「指切りげんまん、嘘ついたら針飲ます。指切った！はい、これでオッケ」
「今のは呪文？」
「そんな感じかな？」
　ラルは嬉しそうに肩をすくめて笑った。
「ぼく、誰かと誓い立てるの、初めて」
「さて、」シルージャがラルの背後から声をかけた。「行きますぞ。アズブルルードの次はいよいよ王都です」
「ここからなら遅くとも明後日には着くでしょう」ラティウスが言った。「それでは皆さん、健闘を祈ってます」
　京は馬車の中からラルに手を振った。ラルも振り返す。何となく京は思っていた。
　ラルとはまたいつか会える。
　ラルからもらったプレートを首に提げて、そう思っていた。

静寂(せいじゃく)が流れる。嘘のように。
灯りが揺れる。囁(ささや)くように。
これからを想い、過去を憂(うれ)い、今に歩く。
その見つめる先は果たして何処(いずこ)か。
結果など誰にもわかりはしない。それがたとえ神であっても。
だから歩むのだ。だから前を見るのだ。
背にあるのは過去だけに非(あら)ず。己(おのれ)を支えるものが在(あ)る。
振り返るのは労(ねぎら)いのためか、無用の情けか。
否。
欺瞞(ぎまん)に満ちた自信だけでは何も出来ない。だから振り返るのだ。
横たえ、動かぬ身体は意識しなければどこかに行ってしまいそうだ。ようやくのことで、彼は首だけを動かした。
「フロー、」
彼はその名を口にした。呼ばれた少女は表情のない顔で彼を見た。約束通り、一言も発さずに。それでも彼は、少女が言いたいだろうことが不思議とわかった。
（今更、だな……）
彼は思った。一度でも振り返っていたならば、変わっていたかもしれない己の境遇を。恐れから振り返ることが出来ずにいた。労いでも罵倒でもなんでも良い。恐れを抱いたままでも振り返っていたら。
「フロー、」
彼はもう一度呼んだ。少女は決して喋らないが、何？と聞き返していると彼は感じて、言葉を続けた。
「もう、お前を縛るものは何もない。もう、演じる必要もない。私はもはや望むものがないのだから」
フローは不満に眉をひそめた。本当に？と言っているようだ。彼はふぅっと息を吐いた。
「此処(ここ)にて汝(なんじ)と我との盟約を破棄する。汝、自由なれ」
朗々とフローの額に手を当てて禁厭(きんえん)の言を述べると、いやいやする赤子のようにフローは首を振った。
「意外と頑固だな…。最期に、言葉を交わすこともままならぬか……」
その言葉に、フローの身体がびくっと震えた。閉じた唇が躊躇(ためら)いがちに、ゆっくりと開かれる。
「……これは、貴方の意に反しないだろうか…」
久々に聞く彼女自身の声に、彼は微笑んだ。

「あぁ、嬉しい」
　彼は天井を見た。随分と豪奢な造りだ。彼女と初めてあった頃は自分がこのような道を歩むとは思わなかった。そして思った。
　あぁ、俺が望んでいたのは“安心”だったんだ。偽りの鎧を何重(いくえ)に着たところで安息感は得られなかった。不安定に揺れるこの揺り籠(かご)も、頼りなくて……だから、王になったのに。今更だ、本当に。
　フローが不安そうに見つめる。
「お前の望むものは？」
　彼は不意に聞いた。突然聞いてみたくなったのだ。
「役割」
　フローは考える間もなく即答した。
「そうか……俺の方が短い人生だったが、お前はまだまだ答えも欲しいものに触れることも――――。いや、説教はやめよう」
　彼は自分で上体を起こすことのできないその身体を、フローに手伝ってもらい、起こした。これまた細工の素晴らしい机に手を伸ばす。引き出しから、一通の封筒を取り出した。
「まだ、俺との約束を守るか？」
「それが、貴方への恩返し」
「全く……頑固は誰に似たんだ」
「貴方が以前、不安から言ったこと、あれをやろうと思う」
「本気か？言うんじゃなかった。あのときは……お前に当たり散らしたな。すまない」
「気にしてない」
「うん、感謝してる。だから、これ」
　と、彼は先程取り出した封書を渡した。
「さっきも言ったが、もう自由だぞ。何をするにも俺に、世界に縛られるな。それでもどうしようもないときは全部、俺のせいにしろ。天は見通してる。お前がこの宮に居やすいよう、書状を書いた。いざというときは使え」
「…あり、…がとう…」
　礼を言い慣れていないフローは言葉を詰まらせながらも封書を受け取り、懐にしまった。
「これからはお前がお前の足で歩く。でも一人で歩いてるんじゃない。納得するまで歩けよ、俺の分も。中途半端でくたばったらあの世で説教だ」
「覚えとく」
「よし」
　そして彼は最期に、城下を、世界を見た。穏やかだ。心の底のように。そして彼は逝ってしまった。フローが思ってたよりも呆気なく。

　これが、秘された第十四代王の死―――これは今より数百年昔の話である。

彼女の帰省は城中の者が驚き、慌てふためいた。
何せ、五年ぶりである。城下で騒ぎを起こさずに、ひっそりと帰ってきたものだから不意打ち同然で、困った家臣を彼女は面白がった。
「あ～ら、デルトリィ、久しいわね。ん、どうしたのかしら、顔色が悪いわぁ。風邪かしら」
彼女の世話係をしていたデルトリィは頭痛で顔をしかめた。
「大事ではございません。それよりもステルニア・テレ様、どちらへ行かれてたのです？皆、心配していたのですよ」
「心配？安心の間違いじゃなくて。わたくしがいると皆、顔色が悪くなるみたい。面白いわ」
と面白くなさそうに言う。
―――黙っていれば、類をみないほどの美人なのに。
誰もがそう思ってため息をつくのだ。彼女はそれを知っている。壁を隔ててため息をついた臣下の数まで承知なのだ。
「フロー、荷をわたくしの部屋へ。デルトリィ、貴女は食事の準備よ」
フローと呼ばれたのは、日に焼けた褐色の肌に、これまた日に焼けたように色の薄い髪の娘だ。口許はいま、首に巻いたスカーフで見えないが、その口が動いたのを見た者はいない。
フローは喋らない。
それが皆の認識である。喋らないフローを彼女、エバは使いやすい道具のように扱う。それでもフローは文句も言わない。今もコクンと頷いて荷を運び出した。
「ほら、デルトリィ、突っ立ってないで貴女も……」
言いかけたエバの言葉を、別の声が遮った。
「フローを連れ出して消えたと思ったら、ようやく帰られましたか」
「あら、イ・モルト。貴方は生きてたの？」
と赤い絨毯の敷かれた階段を降りて近付く翁（おきな）を一瞥した。
「そのお言葉、先代のお耳に入らなくて何より」
「貴方の言いようをお父様が聞かなくて何よりだわ。次代がまだ決まってないのに、先代だなんて」
お互いに厭味を言い合って突っぱねる。この二人は折り合いが良くないのだ。
「フロー、やめだわ。どうせ追い出される部屋に荷を置くべきじゃないわね」
言われてフローはまた、エバの側に控えた。
「儂にさような権限はございませぬ。些（いささ）か、姫は誤解をされておられる」
「止めて」
エバがキッとシルージャを睨んだ。
「それよりもわたくし、お腹が空いてるの。デルトリィ、早く用意して頂戴」
「ならばご臨席なりますか？」
「いやよ、老いぼれと楽しい食事なんて飽き飽きだわ」
ストレートな悪口も、もはや城の者は皆慣れている。不満がないわけではないが、一々反論はしない。それをするのはシルージャだけだが、今はそれもなかった。

「なれば楽しい食事となりましょう。歳若い者が三人おります故」

　あら、とシルージャの言にエバは気味悪く微笑んだ。実際は完璧に計算された笑顔なのだが、エバの素性をしる使用人から見たら不気味なことこの上ない。

「三戦士(トリエント)ね。それじゃ同席させていただくわ。フロー、貴女もよ」

「では、灯(とう)の間にてお待ちしております」

灯の間、とは誰が付けた名か。城は何代もの王が使ってきたが、王が変わるとたいてい、部屋割も部屋の名も変わるものだ。しかし、灯の間だけは長いこと食堂として使われ、名も変わっていない。一節には、第十代王が造った間とされている。料理は見目も大事、と採光のための大きな窓と幾つもある照明がこの部屋の大きな特徴である。

こじんまりしたリビングで一家寄り添っての食事が常だった京からすれば、若干落ち着けないのも無理はない。これだけ広い部屋にたった数人で食事とは。食べながら喋るのは行儀が悪いとされるが、一人ひとりがこれだけ離れていれば喋りたくても喋れない。貴族などのお偉いさんが礼儀正しいと言われる所以(ゆえん)は部屋の広さにあるのではないかとさえ思ってしまう。料理の準備で待たされているこの時間でさえ、京はそわそわしてしまうのだが、ユイファンは目をつむって動かないし、リアンは慣れているのか、随分と気楽そうだ。京はユイファンかリアンに何度か話し掛けようか、と思案して、よし、声出すぞ、と軽く息を吸ったとき、分厚い木の扉がすぅっと開いた。扉を開けたのは褐色の肌に色の薄い髪の、顔の下半分はスカーフで見えないが恐らくは女性で、もう一人、開かれた扉から綺麗な赤みがかったブロンドヘアの女性が一礼をして入ってきた。

「お初にお目にかかります、私は第十五代王の娘エバ・ステルニア・テレでございます」

幾重にも重ねられたスカートを持ち上げ、軽く膝を折って礼をする。京は、この世界の人達が挨拶のときに頭を下げないことに気付いていたが、母国の文化や習慣はなかなか身に染みたものでついつい頭を下げてしまう。これがこの世界での失礼に値しないだろうか、と思いつつ。

「あ、お邪魔してます。三ツ橋京です」

「ちげーだろ！友達ん家に行ったときの挨拶だろ、それじゃあ」

すかさずリアンから叱咤が飛ぶ。彼は音をたてずに椅子から立ち上がると、左手を右の胸に沿えた。

「かように美しい殿下と同席できますこと、非常に嬉しく思います。私はリアンソード・オグニム。お見知りおきを」

「わぁ、なんだかリアンじゃないみたい。紳士か騎士だね」

「みたい、じゃねぇ。俺は騎士だよ。一応、躾を身につけさせられたっつーか……でもいまのはうまくねぇな」

「あら、わたくしは気に入りましてよ。左の手を前に、と言うのは貴方のお国の習慣？」

「はい、我が国では左手は信頼を掴む手としており、その信頼がこの胸の内にあると言う意味で胸に沿えるのです」

「随分と綺麗な解釈ですのね。あと、敬語は結構ですわ。聞き飽きてますから」

「はぁ……」

「そちらの方は？」

「ユイファン」

寝てるのか、と思っていたユイファンがおもむろに口を開いたが、名を答えただけで終わった。

「そう、実にシンプルな回答。これで一通り自己紹介は済んだわね」

「まだフローが済んでませんぞ」
　まだ扉を開けたままの状態でいる女性の側にシルージャが立っていた。
「わたくしの言葉を聞いていて？自・己・紹介と言ったの。フローは口がきけないから無理ね」
「なら、儂が代弁いたしましょう。彼女はフローという名で、姫の側仕えでございます。口はきけぬが中々素晴らしい女性でございますよ」
　言われてフローは首を振った。そして京たちを見て一礼。
（そんな大層な者ではないが、よろしく）
　京にはそう言っているように見えた。
「イ・モルト、止めてとさっきも言ったでしょう。貴方達も心得ていて下さる？わたくしを姫なんて呼ばないで」
「では、こちらの流儀に習えばステルニア・テレ様でよろしいでしょうか」
「オグニム、でしたかしら。敬語は止して。三度目はなくてよ。異世界の方にもそう気を持たれるのは嫌。それとわたくしの名はエバ。次、わたくしを不機嫌にさせたら城から追い出すわ」
「……心得とくよ」とリアンが側にいる京とユイファンにしか聞こえないような小声でぼそっと答えた。

「はぁ、なんだあのお姫様は～！？」
「リ、リアン、聞こえちゃうよ」
　京は慌てて周囲を見た。自分たち三人以外、勿論部屋には居ない。長旅の末に辿り着いた王都・レックスアーブのそのほぼ中央に位置する城の、左手の塔にある客間が三人に宛がわれた。今までは旅の道中、三人の同室にシルージャもいたが、宰相を務めるシルージャは城に居所がある。塔のほぼ全てを自由に使って良いと、シルージャに言われていたが、三人はなんとなしにいつもこの客間でくつろいでいた。まずは旅の疲れを癒してから、と言うシルージャの言葉に甘えて三人はこの三日ほど、ただだらだらと過ごしていた。と思っているのは京だけか。たまにユイファンは一人で塔を出るし、リアンも腕が鈍ると言って、城のすぐ横にある修験場に足を運んでいる。
　リアンの愚痴が始まってユイファンは立ち上がって部屋を出るのかと思いきや、部屋の壁をこつこつ手の甲で叩いた。
「ないな、壁が厚い。いくらこいつの声が馬鹿でかくても外には漏れまい」
「ユイ、馬鹿っつったな！？やるかぁ？！」
「だーかーら、止めてって二人とも！」
　正しいつっこみをしてくれる人はこのメンバーでは望めない。京は必死にリアンの気を静めようとするだけだし、ユイファンはリアンを揶揄（からか）うことしかしない。あとひとり、誰か冷静な人がいてくれれば、などと京は考えてしまう。
　リアンはどかっとソファに腰を下ろした。
「あれじゃあ、ルイの方が百倍マシ！あ～、まさかあいつをマシだと思う日が来るなんてな」
「ルイって、リアンの彼女？」
　初めて聞く名に京がわくわくしながら聞くと、ユイファンが冷静に返した。その声には幾分か

、嘲(あざけ)りも混ざって。
「前に言っていたお守りのことだろう」
　お守り、とはリアンの王女警護という肩書きのことを指して言っているのだろうか。
「……なんかお前、俺を揶揄うの趣味にしてないか」
　リアンはユイファンを睨め付けた。と、ユイファンはリアンを一瞥した。
「趣味、というより習慣だな。お前が馬鹿だから、一々の反応が面白い」
「また馬鹿っつったな！そういうお前のオツムはどうなんだよッ！」
　それにユイファンは答えない。答える価値無しと思ったのか、ユイファンは会話からの離脱がいつも急だ。リアンも、ユイファンの興味が無くなったのを見て、そっぽを向いた。まだ機嫌が悪いらしい。
「ねぇ、リアンの国のお姫様の話、きかせてよ」
　京の興味は専らそのことにあった。
「聞いたっていいことねーぞ」
「いいよ、聞きたいんだ」
　そだな、とリアンはぽつりぽつりと話し始めた。
「ルイっつーのはユイの言う通り、俺の国のお姫様だ。あいつも我(わ)が儘(まま)な姫様で、俺達家臣はいつも振り回されてばかりだが……それを迷惑、と思うことはなかったかな。活発なやつで、国のためと自ら奔走する性格で。無茶なことばかり。俺とフィルでいっつも後始末」
　遠くを見るような目で、懐かしむようにリアンは言った。心なしか、嬉しそうにも悲しそうにも見える。京は、故郷を恋しがっているのは自分だけじゃないんだ、とそのとき初めて思った。
「フィルってのは俺の、なんつーか戦友？みたいなもんでさ、いつも言い合いばっかりだったが、気が知れた仲だから腹の黒いようなことはなかった。遠慮無く喋れる唯一無二の奴だ。ただ、言い合いはいつも俺の負けだがな。俺は武官でフィルは文官。当然と言えば当然だ」
「でも僕、いっつもリアンにお説教とかいろいろ聞いてるから、そんなふうには見えないけど？」
　リアンは京をじっと見据えた。
「受け売りだ」え、と京が聞き返すとふい、と窓の方に顔を向けて続けた。「俺も考え無しに突き進むことが昔良くあって、だから同じように諭された。師や、友にな」
　へぇ、と感嘆を漏らすと急に京の頭をがしっと鷲掴みにした。
「言うなれば、お前は俺に似たとこがある。悪いとこでな。でもそりゃ悪いことじゃない。ゆくゆく直していけば良いんだから。それにお前にゃ見本がいて、わざわざ諭そうなんてお節介もいる」
　そういうリアンはちょっと照れくさそうに顔を赤くしている。そして「これも師匠の受け売りだ」と付け足した。
　気付けば話はお姫様から外れてしまって、結局人生訓のような講談になってしまった。でも、京はちょっぴり嬉しかった。そんなふうに言ってくれるリアンが、そんなふうに故郷を思っているリアンがいるということに。

　京はくるりと首を回してユイファンを見たが、ソファで眠ってしまっている。今度はユイファンの話も聞ければな、と思っていると、城の給仕係がお茶を運んでくると同時に就寝を伝えた。もう夜なのか、と京は寝ているユイファンを見る。まだまだこの世界の時間には慣れていなかった。

翌朝、また灯の間にて朝餉(めさげ)が用意された。
顔触れは昨日と同じで王女エバと側仕えのフロー、宰相シルージャと三戦士。肩書きだけは立派な人々がこうして同じ卓で食事をしているのだ。城下の衆が聞けば、なんと華がある食卓だろうと優美なものを想像するに違いない。しかし現実は無愛想なユイファンとリアン、口をきかず身分も知れないフローに、たかが子どもの京である。そして極めつけは犬猿の仲、シルージャとエバであるから食卓は何故か重苦しい空気が漂っていた。京としては居心地の悪いことこの上ない。かといって場を和ます術もなく、皆と同様に黙々とご飯を食べた。今まで通った街の食事よりも数段豪華であるにも関わらず、味の方はこの空気の所為(せい)でちっともおいしく感じなかった。給仕が空になった皿を次々と下げて、最後に香りの良いお茶が出された。この数日で馴染みになった給仕は京が甘いお茶を好むと知って、昨日から砂糖を付けてくれた。苦みを感じることなく飲めば香りが良いので、紅茶のように感じる美味しいお茶だ。京は一口二口と静かに啜って（格式高い城では食事中に音を立ててはいけないのだとシルージャ、リアンの両名から注意を受けた）、はぁっと小さく息を吐いた。まるでそれが合図だったかのようにエバがすっと顔を上げた。
「如何だったかしら、三戦士の皆さん？」
食事のことだろうと思って京は、美味しかったですご馳走様と頭を下げた。エバはそれを見てふふっと息を漏らした。
「そう言うことは料理人に直接言った方が良くてよ。喜ぶわ、きっと。わたくしが聞きたいのはこのクレイドルの感想よ。ちょうど食事も終わったことだし、しばらく歓談と致しましょう」
「エバ様がかようなことをおっしゃるとは」とシルージャが呟いた。昨日の注意を覚えていたからだろう、エバのことを姫とは言わなかった。シルージャは髭をさすって頷いた。「ちょうど良い機会です」
エバはまずリアンの方に視線を向けて促した。リアンはと言うと、昨日の不機嫌がまだ残っているような顔で嫌々口を開いた。
「別にどうとも。寂れた雰囲気の街が多かったなってことぐらいか」
続いてユイファンに目を向ける。
「俺は興味ない」
最後に京へと順番が回ってきた。どうしよう、なんと答えればよいのだろうと頭を捻った。助け船はどこからも出ず、エバも京が答えるのをじっと待っている。京は考えながら口を開いた。
「あんまり……、うん、そうだな。あんまり凄いとも凄くないとも思わなかったし、まだ良くわからないとこも多いし……」言葉になってない、と思いながら考えていて京はあ、と声を上げた。「そうそう、夜がないのが未だに変な気分」
「あら、」とエバはここで興味深げに京を見た。「ヨル。聞いたことあるわ。太陽が沈むそうね。沈むときは取り分け強く太陽が輝くと聞くわ。一度見てみたい」
「え、エバさまは夜を知っているの？」
シルージャが夜という単語すら知らなかったのに対し、エバは夜や夕暮れについていくらか聞きかじっているような口ぶりなのに京は驚いた。この世界の人には全く夜の概念がないと思って

いたから。
「お父様から聞いたのよ」と答えてから眼を細めてシルージャを見た。「その様子じゃあイ・モルト、貴方あまり説明をしていないんじゃなくて？」
　シルージャはきまりが悪そうに顔を歪めると「物事には順序というものがあるのです」と言った。
　これだから年寄りは、と首を振るとエバは京たちの方を見て言った。
「わたくしの父も三戦士でした」
　京は驚いて目を見開いた。
　――――え、前の王様が三戦士って…どういうことだ？
　三戦士が皆そんな言葉を顔で表現し、エバはそれをおもしろ可笑しく眺めた。
「やはり聞いていなかったのね。大方、三戦士は聖域に赴き神の声を聞く、としか聞いていないのではなくて？」
　あたりだ。
　誰も頷きもしなければこれと言った反応を示さなかったが、その反応がないのを肯定の意味と捉えたようでエバは話を進めた。
「確かに、三戦士にはそう言う役目があります。一般的には、ね」
　と意味ありげな含みを込めていった。そこまでエバが喋ってしまうと、今まで喋らなかったことに悔い目を感じているのか、シルージャの渋面が、苦いものでも食べたかのように更に歪んだ。
「でも実際、王位に就くのは三戦士の内の誰かなのよ」
　今まで聞かされなかった事実。三人が三人ともシルージャの顔を見た。シルージャは頭を垂れていた。
「皆様の、王に対する姿勢というものに良いものが感じられませんでした。じゃから、アル村出立の日にこのことは儂としてもとても言い辛かったのです。いつか、と思っておりましたら、もう王都に着いておりました。誠、申し訳ない」
　しかしそのシルージャの判断は吉だっただろう。もっと前に聞いていたら、リアンとユイファンが殺気立っただろうことは言うまでもない。しかし今度は言うのが遅すぎた。シルージャに対しての嫌悪が顔に出た。
「それは本当なのか？」
　リアンが聞いた。シルージャは俯いたままだから、それにはエバが答えた。
「史実の紐解いて過去の文献を調べると、そう、わたくしの父で十五代目ね。この十五人の王は皆、三戦士だと記されているそうよ。わたくしは父から実際その話を聞いているし、千読み達がそう言うのだから、大体は間違いないのでしょう」
　千読み、とリアンが繰り返した。京はもう何度か聞いた単語だ。リアンとユイファンは余りよく知らないのだろう。ユイファンも首を傾げた。
「あぁ、千読みをご存じないのね。もうお解りの通り、王は皆、異世界から来た三戦士よ。文化も違えば言葉も違う」
　京は成る程、と思うと同時にあれ？とも思った。

「言葉が違うって……僕たち普通に喋ってるけど？」
「そのことはまだ、我が王立研究所でも調べている課題の一つよ。なぜかしら、喋ることに関して、異世界人は苦労しないの。ただね、字が違うのよ、みんな。だから、歴代の王達が残した書物を読める人が本人以外にいないの。たまに、王自身が側近に字の読みや文法を教えてくれた時代もあったそうよ。父はわたくしに教えてくれたわ」
「で、千読みってのはもしかしてその字を読む係？」
「察しが良いわね、オグニム」
　エバが微笑んで答えた。
　千読みは、王達が残した山のようにある文献を読む役目を担っている。何代か時代が進むと、王が自ら側近に教え、残したというのが千読みの始まりで、それからは絶えることなく、重要な役割の一つとして残った。しかし時代が進むにつれ、何代もの王が残した字を引き継いで聞かなければならないから、自ずと難しい職となった。今、城にいる千読みは四人。千読み見習いは何人かいるが、王の手記を読むという大切な役割をいずれ持つことを考えると、狭き門とならざるを得ない。今の四人ですら、見習いを抜けるのに十年以上の月日を費やしている。それでも手分けをしなければ読めないから、誰それはどの時代の王、というように役割分担をしている。そして今一番の難題は、初代王の手記だ。二代と三代の王の手記も読めない部分が多いが、それ以上に初代王の字に関する情報はちっとも残っていないため、ノーヒントで暗号を解くような作業をしている。未だに一行も読めていないそうだ。
「ですから、今までの王はその手記から考えるに異世界人。もし異世界人に見せかけた暗号を残すにしても、千読みは常に異世界の字に触れています。暗号か、異世界文字か、いち早く気付くはずです」
　それが、過去の王が皆三戦士だという根拠だという。
「三戦士以外に、異世界人が来たりしないのか？あの森じゃないところからでも、儀式を行えば喚べる、とか」
「見かけよらず、頭が回りますのね」と皮肉半分に言ったエバにリアンは顔をしかめた。「わたくしもその疑問は以前ありましたが、三戦士が来ると言うことは逆に、わたくしたちが異世界へ行けると言うことを意味します。しかし、そんなことは聞いたことありません。そうね、人の出入りはあの森と常闇の洞窟以外ではあり得ないのでしょう」
　常闇の洞窟？と京が聞き返すと、悪魔ルシファーが逃げたと言われるところよ、とエバが答えた。それで京は、プリムスで聞いた紙芝居を思い出した。と、とたんに他のこともずるずると思い出した京は、思わず訊ねた。
「そう言えば、千読みって五人いるって聞いたけど、エバさまはさっき四人って言ったよね？」
「あら、」と意外だと言わんばかりに京を見た。「そうよ、天才と言われた若い千読みがいたわ。でも三年前に失踪したそうよ。わたくしがこの城を出たのが五年前だから、わたくしの不在中のことですわ。余りよく知らないのだけれど」
　エバはそう言うと、シルージャを見た。
「儂もよくよく知りませぬ。元が元なので、どこかでのんびりしとると思って心配などしてはおりませんしな」

「その天才千読みは、イ・モルトの孫よ。彼に読めない文字はない、なんて謳い文句もあったくらいだから、初代の手記を読み解くことを期待されていたのに」
「全くの恥さらしです」
　シルージャは強い語調で言った。が、エバは首を振った。
「でもわたくしは、彼のような性格の方、嫌いではないわ」
　それは、同じ家出者同士だから気が合う、と言うことだろうかと京は勝手に見当を付けた。

ロイは急ぎすぎず、かといって遅くならないように馬を走らせた。
ルシファーは初めこそ騎馬になれなかったが、今ではしっかりと馬と馴染んでいる。どうも生き物が苦手であるようなルシファーに、馬の世話は全部自分でやるようにと指導をして、一週間が経つか経たないかの頃にはもう馬と心を通わせたようだ。今では馬相手に話をするくらいになった。名も付けているようで、いつか『ロード』と呼んでいるのが聞こえた。
プリムス出てから二人は、殆(ほとん)ど野宿をするようになって、街や集落では長居もせずに馬を走らせた。それが漸(ようや)く、アズブルルードに着いて、まともな宿に泊まった。道中、宿に泊まってもその間に馬を盗られたのではたまったものではないから、ロイは安心できる厩(うまや)がない宿では泊まれない、と言って野宿をしてきたのだ。アズブルルードはレックスアーブからも近いのと元が商業で発展した町だから、宿の安全は抜かりない。漸く風呂に入れると思うと心が急(せ)いた。
「立派な街ですね」
アズブルルードの南門を潜るときにルシファーがそう言った。いや、プリムスを発ってからはルシファーではない。ルーファスという偽名を名乗っている。そうでないと、また悪魔だと言って捕らえられるからだ。
「この門の両側、なんだかわかるか？」ロイは二つの像を指した。「エイダとミネルヴァだ」
「これが？」とルーファスは目を見開いた。次の瞬間にはその目を細めてぷっとふきだした。
「お、おい。仮にも初代王と女神の像だぞ。笑うなよ」
ロイは門兵の様子を伺いながら声を潜めていった。
「済みません。あまりにもに別人すぎて」
「この街出るときも笑うなよ。ポーズは違うが北門にもエイダとミネルヴァの像があるから」
「それは楽しみですね」
ロイは道中、馬を走らせていない間は悪魔ルシファーと呼ばれるこの男からいろいろなことを聞き出した。その内容は、ロイの考えを裏付けるものであったり、初めて聞くような興味深いものであったりと、随分楽しませてもらっていた。
元々、本を読むのが好きなロイは幼少の頃から城の図書館に足を運んでいた。一般人なら足を踏み入れることすらできない場所である。ロイはそこで本を読みあさり、ついには読み尽くした。だから、もう何年も使われていない書庫まで足を伸ばした。古い本が沢山あり、古い文語は読みづらかったが面白かった。閉架書庫まで読みあさると、もう読むものがないと言って父や祖父を困らせた。しかし、図書館通いしている内に知り合った千読みが、じゃあこれを読むかと差し出した本があった。それはその千読みが、王の手記を読み解いてまとめたものだった。手書きの本は読みづらいものではあるが、ロイはそれも読んだ。それが一番面白いと感じたくらいである。それからだった。本来なら見習いから始めて千読みになるものを、手順を飛び越えて千読みとなった。最初は古参の千読みに字を教えて貰っていたが、次第にただ読むのではなく、読み解く作業が面白くなっていき、誰も手を付けていなかった第三代王、第二代王とどんどん遡って、初代エイダの手記にまで辿り着いた。誰もが諦めただけあって、エイダの手記はなかなか読めたものではなかった。字が汚いのか綺麗なのかも今ひとつわからないその字は、まるで紙に虫が這ったような字で、同じ字を見つけることさえ苦労した。しかしずっとその手記を睨んでいると、

癖字というのがわかってきて、エイダが書く字をいくらかの種類に分けることができた。何度も出てくる字は自身の名か、『私』という単語であると見当が付けられればいくらか読める。そうやってロイは長い月日を掛け、エイダの手記を読み解いた。その間、誰にもその内容を伝えることはしなかった。責任持って読めなければ嘘を伝えることになると言うこともあったが、エイダの手記は殆ど日記だった。日常に対しての愚痴が主で、たまにミネルヴァのことやルシファーのこと、元いた世界を懐かしんでいるような所もあった。だけれど語調は王とは思えないほどがさつで、随分と人間味があった。こんな内容だと伝えても、嘘だと言われるのがオチだろう。だからロイは黙っていた。

　そして、そのエイダの手記にはこんなことが書いてあった。

　———王なんて、楽な家業じゃない。

　ロイにとって、一番印象的な言葉だった。

三戦士（トリエント）の誰かが王になると言う話を聞くと、ただでさえ旅を嫌がっていたリアンとユイファンが抗議を起こした。森を出た村でのこともあり、京はこの討論は長期戦になるのでは、と予測していたが、あっさりと収集がついた。エバの一声が決め手である。

「あなた方はとても王に選ばれるような器じゃないわ、安心なさい」

王のご息女の言葉は一番影響力がある。リアンもユイファンも互いを見合って、「確かにこいつが王じゃあ、国が滅びる」と言った。お互いの悪口であるにも関わらず、この言葉にどちらも怒ることはなかった。　しかしそうなると、消去法でリアンとユイファンの目が京を向いた。そこで京ははっとした。

———僕が王になるの？！

それこそ冗談じゃない、とは思いつつも、京は動転した。

「わたくしは、子どもに王位は重いと思いますわ。きっと神はあなたも選ばない。今までがたまたま三戦士と言うことでしょう。本来は神の声を聞く役目、今回はそれを全うすればよろしいのよ」

その言葉でいくらかは気が軽くなるものの、十五人の王が皆三戦士と聞くとたまたまなんて言葉では済ませられない気もする。それでも、元いた世界に帰るためにはやはり神の所へ行かねばならないようだ。その話はエバからも聞いた。

「父と共にクレイドルに来た残りの二人は無事に帰ったそうよ」

直接、父王に聞いた話だからと言われると、京たちは安心した。

「どうやって帰ったのかは聞いていないのか」

ユイファンがエバを見ていった。いつも無表情だから、睨んでいるようにも見える。しかしエバは臆せず答えた。

「そうね、随分昔にお伽噺と一緒に聞いた話だから、記憶が曖昧ですけど。確か、”出口”があると聞いたわ。場所も聞いてます。ただ、そのときはお伽噺の延長で聞いたものだから、冗談かとも思いますけど……」エバは何だから答えるのにいくらか躊躇（ちゅうちょ）したが、はっきりとこう続けた。

「———常闇（とこやみ）の洞窟」

「その言葉、さっきも出てきたな。悪魔が逃げたとか」

「えぇ、ユイファンもオグニムもお伽噺は知らないのね。ケイは？」

「ちょっとだけ知ってる。光る石を盗（と）ろうとして、エイダに追い詰められて洞窟に逃げたって話だよね」

「そうね、それは子ども向けで一番一般的な話よ」

あとで千読みに聞くと良いわ、と言ってエバはお伽噺の内容をそれ以上言わなかった。そこが出口だとしても、エバ自身、地図上のどこに当たるのかを知らないという。お伽噺では、常闇の洞窟や堕天使が落ちた穴と呼ばれるそこは、架空の場所であるかのように語られる。正確な場所を知る人はいないだろう。

「ちっ、」リアンが舌打ちした。「どっちにしろ、神って野郎のところに行かなきゃならないのか」
「オグニムは神がお嫌い？」
　エバの問いに、リアンは一切答えなかった。ただ、道中似たような台詞を京は耳にしていた。余程神という存在を嫌っているらしい、と言うことだけは良くわかる。
　エバは無視するリアンに首を傾げながら、居住まいを正した。
「わたくしも一緒に行きますわ」
「エバ様！」
　シルージャが声を張り上げた。
「貴方の異議は通らないわ。わたくしは“聖域に入ることが許された者”よ。セイクルまでの案内が必要だわ」
「王無きこの時勢に、また城を空けるというのですか。なりませぬ。少しでも民を思うのなら残っていていただきたい」
「わたくしがこの居城で踏ん反り返ってどうなるというの？わたくしは父と違って神とは言葉を交わせない。わたくしが城にいる意味はないわ。それよりも、早く三戦士を神のおわす聖峰へとお連れするのが先でしょう？」
　シルージャは口を開いたが、そこから言葉は発せずに、息継ぎをする魚のようにぱくぱくと口を動かしただけだった。言い倦(あぐ)ねいている。そんな感じだ。
「言ったら？」エバが可笑(おか)しそうに言った。「“貴女は象徴なのです”と。ただ己の席で踏ん反り返って固まっていれば良いのだと」
　その一言でシルージャは口をつぐみ、石のように動かなくなった。視線はエバを射止めたまま。
　エバはさっと立ち上がると、さっさと灯の間を出て行ってしまった。その後ろにフローがついていく。フローは灯の間を出るとき、お辞儀をしてエバを追っていった。
「見苦しいところを……」
　シルージャは項垂(うな)れて呟いた。
「別に。あのお姫さんの気性はもうわかった」
　リアンは自分の故郷にいる姫を思った。国のため、民のためと言って、勝手に城下に下りるものだから臣下は手を焼く。しかし、頭脳派のフィルと違って、思い立ったら行動に移したい、と言うその気持ちはリアン自身、身に染みてわかっていた。だから、城下に下りる手伝いをいつもしていたのがリアンだった。今頃は怒っているだろう。窮屈で堅苦しい城に大人しく座っていなければならない、リアンがいないから外に出れないと言って。
　それを思うと、口は悪く性格も人一倍悪いが、考えはリアンの国の姫とそう変わりないのかも知れない。人を小馬鹿にするような言い回しだけは気にくわないが、リアンは少しだけ、エバを支持する心持ちになった。

＊　＊　＊

それから数日、城内の家臣達は慌ただしく動いた。その中で、三戦士だけはその渦中になく、平穏な生活を送っていた。京はすることがないと居づらいと言って、手伝いを申し出たが、これからも北にある聖峰に向かって旅を続けなければならない、だから今の内に体を休めておいて下さいと、突き返されてしまった。

今、城内は三戦士とエバ、そしてフローの旅の準備を進めている。その五人で聖峰へと向かうことになるから、旅路の荷物を最小限にしつつ、貧相にならないようにと言う配慮がされている。これも、王女であるエバが行くと言ったから、家臣としては準備を怠らずに、姫の趣向も考えてやらなければならなくなったためだ。今まで小言を言われ続けたからだろう。家臣達はエバが乗る馬の鞍に付ける装飾まで考えている。宝石をちりばめようか。しかしそれでは鞍が重くなる。じゃあ、手綱に意匠を凝らしたらどうか。成る程、それは名案だ。ではクレイドル一の職人を呼ぼう。そんな会議が続いていたのである。そう言った遣り取りの裏で、実はエバが厩（うまや）から拝借した一頭が気に入ったの一言で決着がつき、手綱云々の話は全て無くなったようだった。今までの長居滞在期間が漸く終わりを迎えようと言うとき、シルージャが小規模ながら宴を催そうと言う。エバは嫌がったが、パーティ会場のように煌びやかな装飾をされた大広間に、これまた正装した人々がダンスや立食しながら談笑するという、京が思っていた以上の規模のパーティが開かれた。エバはあれだけ嫌がっていたのに関わらず、深紅のドレスを着て男性と広間の中央で優雅に踊っている。京やリアンも正装させられた。クレイドルの正装は、タキシードなどではないが、女性が華やかな格好をするのに対して控えめであることに変わりない。白や黒を基調としたローブに金糸や銀糸で刺繍が施されている。

「かたっくるしいぜ」

主賓であるのに二人は広間の隅にいた。京は皿を片手に持っている。

「僕、こういうの初めて。どうすればいいの？」

王女警護しているリアンなら当然、このような催しに参加するだろうと思って聞いたが、式典のときなどは警護勤務なので参加はしないという。そこで二人は所在なく突っ立っていた。

「そう言えば、ユイファンいないね？」

ああ、とリアンが首を巡らす。長身のリアンの方が広間を良く見渡せるのだろうが、どうやら見あたらないらしい。広間も広く、二人は端にいるから反対側までは良く見えないのだ。

「あいつのことだから、どうせサボリだろ」

「オグニムは随分酷いことを言うのね」

気付けばエバが近くに立っていた。いつも腰巾着のようについているフローの姿はない。間近で見たエバは一層綺麗に見えた。

「的を射ている、と言って欲しいね」とリアンが皮肉を言う。「あんたこそ、パーティは嫌がってたじゃないか」

「それでも催されれば出なければならないわ。お役目ですもの」とこちらも皮肉で返した。「それよりも、フローがそろそろユイファンを連れ来る頃よ。私が召し物を見立てたのよ。嫌がっていたけど、フローが着付けて連れてくるわ」

強引なことをしなさる、としかめっ面で言おうと口を開きかけたリアンの顔が固まった。京も

、いつの間にユイファンとエバは仲良くなったのだろうなんて訝(いぶか)しんでいると、ちょうどそこにフローがやってきた。その後ろには金糸の刺繍が入った純白のドレスを着た女性が、フローの陰に隠れるようにして立っていた。髪を無造作に、しかし綺麗に見えるように結い上げられ、こちらも白い花をあしらった髪留めを使っている。その髪は、綺麗な緑色をしていた。その髪の色がなければ、京もリアンも彼女がユイファンだとは気付かなかっただろう。そもそも二人は、ユイファンが男だと思っていたのである。
「あら、思った以上に似合ってるわ」
　ユイファンが赤と青のオッドアイをきょときょとさせて俯いた。
「何が似合ってる、だ。俺は嫌だと言ったのに……」
　呟くように言ったその声は心底嫌そうに聞こえた。京とリアンはまだ固まっていた。ユイファンは女だったのか、と初めは思ったが、エバに男を女装させる趣味があってもおかしくはない、と言う考えもそのうち浮かんできた。だから、どちらなのだろう、とまだユイファンの性別を見切れていなかった。ユイファンはぽかんとした間抜け顔でいる二人を一瞬睨み付けると、食べ物が置いてあるテーブルへと一人足早に歩いていった。その背中を視線で追うと、途中で男性に声を掛けられて逃げるように小走りで去っていった。どうやらダンスに誘われたらしいが、ろくな言葉も返さずに食べ物だけ取って、広間を出て行った。そんな一部始終を見て、リアンは吹き出すよりもまだ首を捻っていた。
「オグニム、ケイ、如何でした？」
「いかがって……。ありゃ一体……なんだったんだ？」
「何って、ユイファンですわ。綺麗でしょう？わたくしが見立てたのよ、あのドレス。やはり女性は着飾らないと。それにあの珍しい色の髪、綺麗なのに結わないなんてもったいないわ。あ、でも肩から流す、というのも綺麗ね」
　独り言のようにつらつらというエバにフローが頷いた。
「ああ、そう。髪型で悩んでいたのね、だから少し遅かったの？」
　それにまたフローが頷く。
　その二人の遣り取りなど、京とリアンには細事だった。それよりも、
　———ユイファンが女だって！？
　その事実に二人は愕然としていた。これまでの道中、ユイファンを男と思って接してきたことは言うまでもなく、だから初めユイファンが着ていたみすぼらしい服装にも、ぶっきらぼうな口調も気にはならなかった。道々野営だってしていた。そのとき、ユイファンは男だらけの中でたった一人の女性だったのだ。そんなところでの寝泊まりや、ユイファンに対する数々の発言など思うと、京とリアンは笑って良いのか、恥じ入るべきなのかもわからずにただ渋面を作った。いつもは隙あらばユイファンを笑うリアンでさえも、口をつぐんでいるのは、先程のユイファンが女性として本当に綺麗に見えたからだ。髪を結うのも、ドレスを着せるのも化粧も、全部フローがやったのだという。それだけで、あんなに違うのかと愕然としていた。
「その様子じゃあ」とエバは片手を頬に当てた。「お二人とも、ユイファンを女性と見ていなかったようですわね。彼女に失礼ですわ」

「いや、あいつはそんなことを気にするタマじゃ……」
　リアンは口に中で呟くように言った。まだ頭はユイファンが女性であるという事実に追いついていないようだ。呆然とした顔つきのままである。
「エバさま、ユイファンが女の人だっていつから気付いていたの？」
「あら、」とエバは目を大きく見開いた。「無頓着に聞くのね。まぁ、子どもですから、素直に聞くことは悪いことじゃないですけど。露骨すぎるわ。女性の前ではよく考えて素早く発言することが、紳士としての弁（わきま）えよ。覚えておきなさい」
　よく考えて素早く発言する、とは矛盾しているように聞こえなくもない。が、つまりこれは、頭の回転が速いことが礼儀を弁えた紳士として求められることである、と言う意味のようだ。京はエバのその言葉の意味をよくよく把握できなかったが、とりあえず頭の中で反復した後、頷いた。
「初めからよ」急な発言に京がえ、と聞き返すと「自己紹介のときから気付いていたわ」
　京の質問に対する答えだった。ということに一瞬遅れて気がつく。京の頭も一時、麻痺してしまったようだ。いつまで経っても木偶の坊みたいに突っ立っている二人を置いて、エバはまた広い会場へと姿を消した。
　京とリアンは顔を見合わせる。どうも、まだ納得できていなかった。

＊　＊　＊

　エバは一人、こっそりと会場を抜け出た。いつもは腰巾着のようについているフローは、ユイファンのところへ行って、今はいない。いつもいつも、こういう催し物を嫌っているエバの性格を家臣達は知っているから、いなくなっても気にする者は殆どいないだろう。階段を下り、少し暗くなった廊下に飾られている銅像に、エバは話しかけた。
「いる？」
「はい、」消え入りそうな声で答えたのはまさに銅像だ。しかしよく目をこらしてみると、その後ろの影にほっそりした人物がいる。「ここに」
「待ちくたびれた？」
　エバは微笑んで彼の傍に寄った。
「いえ。フローはいないのですね？」
「今はね。客人の着替えを手伝いに行かせたから、済んだら戻ってくるわ。それまでに手短に済ませましょう、ノーツェ」
　ノーツェと呼ばれた色白の男は頷いて、エバと小声で話した。その時間はわずか。彼の説明は時間の無駄を省いた的確なものだった。
「そうね。じゃあ、手配は任せたわ。貴方なら、出来る。期待しているわ」
　エバは銅像の影から出ると、ノーツェにウィンクをして立ち去った。ノーツェは、エバがウィンクをしたその場所が空虚になっても、しばらくその場所を、まるで穴が開くのではないかと言うくらいにまじまじと見つめていた。

　コツコツ。コツ。
　ライアは、窓に手を掛けた。今の音は、秘密の暗号。それを知って、ライアは心の内で笑った。
「やぁ、おかえり」
　ライアは窓のカーテンを半分開け、庭先に向かって小声で話しかけた。
「兄貴、寝てた？」
「いや、全然。ほら、城の方から舞踏の音楽が聞こえるだろう？それを聴いていた」
　就寝時間なので、部屋は閉め切って完全に暗くしていたが、カーテンを僅かに開けただけで、室内は眩しいくらいに明るくなった。ライアはそれで目を細めた。庭にいた男は窓枠に手を掛けると、軽々と室内に入り込み、さっとカーテンを閉めた。
「悪いね、こんな時間に」
「だから、起きてたって。ロイも、変なとこ気を使うなぁ。……あ、そうそう、頼まれていた紙芝居、出来てるけど？」
　ロイは笑いながら、首を振った。
「今日はそんなんで来たんじゃないんだけど。あ、でも『ルシファーの大罪とエイダの英雄伝説』はウケよかった。やっぱ兄貴は絵本作家とか向いてんじゃない？」
　ロイは各地で披露した紙芝居の風景を思い出した。特に、プリムスの少年を。彼は今頃、城にいるのだろう。
「じゃあ、どんな用事出来たの？」
　ロイの病弱な兄ライアが、揺り椅子に座って聞いた。本来なら、長時間起きていると体に障る。それでも、家出をしたロイに一番の理解を示してくれているライアを頼らざるをえない。だから、たまに家に帰ると庭からこっそり忍び込み、ライアの窓を、決まった拍子でノックする。それが習わしとなった。レックスアーブには旧知の悪友もいるので、わざわざ情報集めに家に戻ることはしない。何より、この日ロイが家に来たのは、城でパーティがあるという情報を仕入れたからで、今しばらくは五月蠅い家人が少ないだろうという予測からだった。ロイはライアの部屋に忍び込んで、耳を澄ませた。使用人もこの時間は忙(せわ)しなく働く、ということはない。しん、と静まっていることを確認して、ロイは話を始めた。
「実は今、人を匿(かくま)ってて ね。で、その人を匿いつつ、王城の資料室にその人と行きたいんだ。兄貴、この一計に協力してくんないかな」
「んー、」ライアは椅子に揺られながら腕を組んで考えた。「城に入るとなると、僕よりライラを頼った方が良いと思う。だけど、ライラには頼めないから僕のところに来たんでしょ」
　ライラというのは、ライアの双子の姉にあたる。ロイは四人兄弟の末で、歳が少し離れた気むずかしい兄と、双子の姉と兄がいる。必然、歳が近い二番目の兄はロイにとって親しみやすい。
「姉貴より頼みやすいってのもあるけど、まぁそうだね。一番上の兄さんは取りはからってくれないだろうし」
「そうそう、兄さん、最近全然帰ってこないんだ。忙しいみたい」そういうと、ライアは手を打った。「兄さんに差し入れに行ってくれば良いんじゃないかな。使用人の格好していけばいいよ

」
「確かに名案だ！兄さんのいる研究塔は資料室とも近いし、どうせ研究に没頭してるだろうから、使用人が来ようが来まいが気にしないだろうしな。やっぱ、兄貴に相談して良かった」
　ライアはにこりを笑うと、箪笥（たんす）を指さした。
「あの中に、モルト家の胸章と使用人が登城するときの紺のローブがあるから」
　ロイはそれを聞いて目を丸くした。
「なんでそんなもの、持ってるの？」
「ちょっとほつれてたから、直したんだよ。九歳の時の話だけど。戻してって言うのも面倒で、箪笥に入れたままだったのを、僕がこっそり屋敷から逃げ出すのに昔使ってた」
「兄貴、体弱いのにそんなことしてたの？」
「だからみんな、僕を過保護にしすぎなんだって」
　ライアは可笑しそうに笑って、肩を竦（すく）めて見せた。

　ロイは人がいないのを確認して、木の枝を伝って柵を跳び越えた。観客などいないのに、見事な着地をして一人で満足していた。と、そこに声が掛かって、ロイは文字通り飛び上がった。
「運動神経良いんだね」
「あぁ、ルシフ……じゃなくてルーファスか。脅かすなよ」
「脅かすつもりじゃなかったんだけど？」
　確かに、屋敷に行っている間、身を潜めて待っていろと言ったのはリアンである。久しぶりの実家、久しぶりの兄にあって浮かれていたのは言うまでもなく、そのためにルーファスの存在を失念していたとは、我ながら情けない。ロイは仏頂面で頭を掻いた。
「城に入る手立てができた。行くぞ」
「はい」
　ルーファスは快く頷いた。

＊　＊　＊

　そんなロイの様子を、カーテンの隙間から見ていたライアは眉を顰（ひそ）めた。
　五年ぶりに帰ってきた王女エバ、王崩御の後に現れた三戦士、エバ失踪から研究に対して異常に没頭する長兄、変わらぬ王政を維持しようとする父と祖父。彼らが今いる王城に、ロイは行こうとしている。その姿は、底の見えぬ大海にできた大渦に飲まれていくかのように思えて、ライアは不安に震えた。誰が何を思い、これだけ思惑に溢れた人々が城に集まるのか。そして、先程ロイと共に去った人物。白銀の長髪に、異世界を思わせる白い不思議な服装は、千読みを始めてエイダの手記を読んでいた頃のロイが嬉しそうに語ってくれた、エイダの手記に出てくるルシファーの姿に見えた。頭が良く、活発な弟が考えていることはわからない。しかし、彼もまた、世界の渦に飲み込まれようとしている。否、彼は自ら渦に飛び込んでいくのだ。そう言う性格であると言うことは、ライアが一番よく知っている。ライアに出来ることは少ない。弟の無事を

願い、そしてまた弟が訪れたときのために絵を描くことだけだ。
「僕も、昔みたいに、ちょっと無理ができたら良かったのに……」
　ローブを渡してしまった今、屋敷をこっそり出ることも叶わない。ライアは祈りを捧げながら、床についた。

一夜明け、京は朝遅くに目が覚めた。遅く、と思ったのは、リアンもユイファンももうすでに起きて身支度をしていたからだ。
そう、今日の昼には城を出ることになっている。街道を北上して、いくつかの街を経由し、聖域に入る。聖域には、王と神が定めた“聖域に入ることを許された者”しか入れない。王無き今、神の声を聞くためには王以外の国民が登ってはいけないという聖峰に行くため、この“聖域に入ることを許された者”が向かわなければならない。つまり、現時点で聖域に入れるのは三戦士と王女エバ、従者フローの五人で、神がいるという聖峰に登れるのは三戦士のみなのだ。聖域には普段、入れないために王都の北側は発展しない。街の数も少なく、野営は必至だ。だからこそ、今まで五人のために準備がなされた。馬と必要な食料、旅の道具。それらは全て、シルージャが采配(さいはい)してくれた。
「儂が出来ることはここまでです」
そう言ったシルージャは少し悲しそうに見えた。感謝の言葉をかけようにも、京は適当な言葉が思いつかずに、口をもごもごとさせただけだった。が、顔を上げて
「お世話になりました」
京にはこう言うことしかできない。それがシルージャよりも悲しい。
（僕の方が、出来ることは少ない…）
京は唇をぐっと結んだ。
（———でも……、出来ることはやらなきゃ……）
深くお辞儀をした京を見て、シルージャは微(わず)かに微笑(ほほえ)んだ。
「まさか、伝説の三戦士に頭を下げられるとは……。長生きはするものですな」
「俺は礼なんか言わねーから」リアンが腰に帯びた剣に左手を添えながら言った。「無理矢理連れてこられたようなもんじゃねーか。なのに、見送りはここまでかよ？」
ほほ、と白い髭を揺らしながら「誠に残念です」とシルージャは応えた。
「北門まではお供しましょうぞ。次の街までは、今度は此奴(こやつ)が案内いたします」
そう言って、シルージャの背後に立つ大男を示した。
「王都警護団隊長のダルト・アン・モルトと申す。見知り置きを」
ダルトという大男は、リアンのような騎士の格好をしていた。それにしても、体がでかい。警護団隊長という肩書きに納得の迫力があった。
「儂の倅(せがれ)です。儂が言うのも変かもしれんが、腕はなかなかですぞ」
シルージャがそう紹介して、京はダルト・アン・モルトの名を頭の中で反復した。漸く、この世界の人物名の意味が飲み込めた。

王都滞在中、京は初めこそ暇を持て余していたが、ふとアズブルルードであった少年ラルのことを思い出し、千読みとの面会を果たしていた。彼女の名はトルテと言って、王都にいる四人の千読みの中で一番若い新参者だった。だからだろう。千読みに会いたいと言った京の希望を聞き入れてくれたシルージャはトルテを呼んだ。彼女とはまず、世間話から始めた。千読みのこと、三戦士のこと、この世界のこと。そんな話をする内、この世界に京が疎(うと)いと言うことを感じたの

だろう。いつしかトルテは京専属の家庭教師さながら、色々なことを教えてくれた。
「ミツハシ・ケイって名前、変わってるよね」
「そう？」
　京が聞くと、音がするんじゃないかってくらいにトルテは首を縦に振った。動作の一つ一つがオーバーなのが彼女の特徴の一つである。
「音も変わってるけど、何より家名が先って言うのがさ。それに冠名(かんめい)はないんでしょう？」
「冠名って？」
「えっとね……」トルテは人差し指を空に浮かせて、そこに見えない文字を書いた。京にはなんて書いたかはわからない。「私の名前はトルテ・ゲーラ・エストールって言うの。トルテが名、ゲーラが冠名、エストールが家名。知らないだろうけど、一応貴族なんだぞ、エストール家って」
　貴族という単語に今ひとつ実感が持てない京は「へぇ」と呟いただけだった。
「あぁ、凄いとか思ってないね。ケイも貴族？」
　それに京は首を横に振ると、トルテはうんうんと大きく頭を振った。
「やっぱね。気品が感じられないもん」トルテに言われたくないな、と思ったけど口には出さない。「貴族はね、みんな冠名を持ってるの。庶民でも、最近じゃあ風習として冠名を持つ人が増えてるけど。これはね、もともと名で呼ぶには憚(はばか)られるような人に付けられているものなのさ」
　実際、エストール家は総勢十七人家族で、エストール様と呼べば十七人が振り向く。そこで区別のために、冠名を付けて呼ぶ。ゲーラ・エストール様、と。しかしトルテはそう説明したところではにかんだ。
「貴族って言ってもエストール家は下級貴族だから。私なんて末の末で、ゲーラは曾お祖母ちゃんから貰った名だから、あまりそれで呼ぶ人はいないんだよ」
　京は、いつしかリアンがエバに言った言葉を思い返した。
　———では、こちらの流儀に習えばステルニア・テレ様でよろしいでしょうか？
　リアンは冠名を付けて呼ぶという風習を知っていたようだ。京の知らないところで、リアンはいつの間にか多くのことを学んでいる。そう思うと、京はちょっとだけ項垂(うなだ)れた。
「どうしたの？」
　トルテが目敏(めざと)く聞いてきた。それに京は誤魔化すように質問を重ねた。
「エバ様って、エバ・ステルニア・テレって言うの？」
「そうよぉ。十五代王の名が、シス・デステニア・テレなの。冠名付けて呼んだら怒るのよ、エバ様は。お父上の名前と発音そっくりだから、よく間違えられてたし」
　トルテは物知りで、聞く話はどれも面白く、話題は尽きなかった。そして結局、京はラルから預かった読めない字が書かれた金属プレートのことを聞けずに終わった。

　ダルト・アン・モルト———つまり、モルト家の長男と言うことになる。アンが冠名だとすれば、ここで呼ぶべき言葉は自ずとわかった。

「よろしくお願いします、アン・モルトさん」
　おや、と髭をさすりながらシルージャが言った。
「勉強なさいましたな、ケイ殿。しかし儂のことを名で呼んで、倅を家名で呼ぶというのは些(いささ)か納得できませんなぁ」
「え、」
　京は慌てた。礼を欠いただろうか。言われてみれば、確かにおかしいかもしれない。ダルトのことをアン・モルトと呼ぶならば、シルージャのこともイ・モルトと呼ぶべきである。京がそう考えてしどろもどろしていると、シルージャは愉快そうに笑った。
「いやはや、悪ふざけが過ぎました。誰も、ケイ殿が無礼とは思ってませんぞ。ケイ殿が気を使うことではないのです。倅のことならダルトで結構」
　京はわかったと頷くと、ダルトの大きな体の背後に立っていた女性が一歩前に進み出た。ダルトの影で今まで気付かなかったが、まだ若く細身で、光が当たると煌めく橙色の髪をした女性だ。その手には清潔そうに見える白い布で包まれたものがある。
「私はライラ・ア・モルト、ダルトの娘にございます。この中で医学に長けた方はおりますか？」
　そう言われて、京とリアンは思わずユイファンを見た。京が体調を崩したときに薬を作ってくれた経緯があったからだが、エバもつられてユイファンを見た。それが答えだと思ったライラはユイファンの方に進み出た。
「……何だ？」
　睨み付けるようにライラを見たユイファンは、訝しむように言った。
「こちらに薬を一式用意しました。我が王立医療院で製薬したものです。説明いたしますので、暫しお時間いただけますか？」
　最後の言葉は主にエバに向けられたものだった。
「勘違いしているようだが、俺は医療に詳しくない」
「あら、でも、ケイもリアンもそうは思っていないようですわ」エバがユイファンの傍に歩み寄る。「わたくし、多少ならわかります。一緒に説明を聞きましょう、ユイファン」
　にっこりと微笑んでみせると、ユイファンはたじろいだ。その様子がなんだか可笑しい。ユイファンはどうやら、昨夜のパーティー以来、エバに気圧(けお)されているように見えた。エバに促され、女性陣三人は輪になって話し始めた。
　取り残される形となった京とリアンは、シルージャとダルトの二人とこれからの話を始めた。
「私が先導できるのは、次の街ラスクスまでです。そこから先は街も少ないですが、その分、野党などに狙われることも少ないでしょう。道は一本、迷うこともありませんが、その街道から外れると道はございません。見失わぬよう、お気をつけ下さい」
「見失わないよう、っつったてなぁ……」リアンは首を傾けた。「森んときも同じこと言われたぜ。大事なトリエント様だろう？何で最後まで道案内しないんだよ」
「どちらにせよ、最後の街セイクルにはエバ様と三戦士以外、入れません。申し訳ないが、我が警邏隊(けいらたい)も人手不足。何分、トワルスディースでの不穏な空気が、ここに来て均衡を破りそうです

。今は専ら、その対応と」
　とそこまで言ってダルトはちらりとシルージャを見た。シルージャは頷いて言葉を継ぐ。
「プリムスでの難民対策に人を割いております。アズブルルードは、ラティが上手くまとめてるにしても、そこにも警邏隊を配置せんと混乱の中心になりかねませんからな」
　今まで通ってきた街の名前。それがなんだか懐かしく聞こえた。特に、プリムスの名を聞いたときは、京は無性に嬉しくなった。スタンラードがしたことは無駄ではなかったのだ。
「そうか、」それを聞いたリアンがぽつりと呟いた。「確かに、乱世は何もしていなくても乱れる。大変なのは察するよ。俺も、八年前だったか。あの時は非道かった」
　ほう、とダルトが息を漏らす。
「そう言えば、リアンソード殿も警護団のようなお役目だそうですな」
「あぁ。こちらとはちょっと毛色が違うが」
　なるほど、リアンはダルトに課せられた責がどれほどのものかを良く理解しているようであった。先程のように、つっかかっていかない。いつものリアンなら、理不尽な対応に怒っていそうだ。
　ちょうどそのとき、ユイファンたちも話が終わったようだ。ライラから渡された救護セットのようなものを、ユイファンとエバが均等に分けて持っている。
「これで、準備は済みましたわね」エバはおっとりと言った。「では、参りましょうか」
　京たち一行は、エバを先頭にレックスアーブの北の門を潜った。
　時刻は本来ならば、夜に値する陰の五刻。三戦士たちを見送るのは、政務関係者が殆どある。伝説と言われた三戦士は、街の人々には伝説のまま、この街を去ることとなった。次の三戦士が現れるのは、次の王が崩御するときである。それはこれから数百年先となる。

あとがき

　合縁奇縁、よくぞここまで来ていただきました。はじめましての方もそうでない方も、ありがとうございます。趣味人・和です。

　本当は『Cradle』を全部載せるつもりで適宜アップしてきましたが、結構ページ数が重なってきたことと、今ちょうどキリが良いので上巻としてここで一度、完成とさせていただきます。
　話は途中だし、実はまだ手元の方でも完成はしていないので、今後の京たちがどうなるのかは実のところ、この著者にもわかりません。ただ書きたいことは色々あります。面白くなるか、はわかりませんが、著者自身は楽しんで書いています。要するに自己満なだけですが……。
　それでも京たち様々な登場人物の行く末を見守っていただけると、書いた甲斐があるというか、なんと言えばいいのか―――嬉しい！という気持ちを表すのは存外に難しいです。

　これから先は下巻の方に話が進んでいきますが、気が向いたら番外編を入れることもあるだろうし、推敲もまだ重ねていくつもりです。（実は、ミスを見つけるたびに少しずつ直してます）
　それと今、ルビ振りにチャレンジ中です。読みにくい漢字があったら指摘していただけると嬉しいです。あと誤植。気をつけてはいるんですけどねぇ。

　引き続き、下巻をちょこちょこ更新していきますが、何せスタートが趣味で書いている程度のもので、駄文なのは重々承知です。更新が遅いのも、文を書くのが下手で苦手だからです。でも、なんとかこの話は完成させたいな、と頑張っている次第です。

　どうか今後もよろしくお願いします。

　あ、あと追伸ですが、
　本編とは関係がない話として【閑話】を入れておきます。別に作った『【閑話】モルト家の双子』は、時系列で言うなら第八章の後になります。

【第五章閑話】二人の夜

夜とは言え、外は真昼のように明るい。
日の光は木々の緑を映し、水面ではゆらゆら揺れている。あちこちに光が散乱している様は、まるで「遊んで」と走り回っているようだ。これが子どもなら可愛いものだが、相手は何しろ四六時中この世界を照らす日の光である。有難みもなければ、それはユイファンにとって気に喰わないものの何ものでもなかった。南天に在り、動くことのないその太陽は、まるでユイファン達の動向をずっと監視しているかのように感じられたのだ。
ユイファンは道中、そのようなことを口に出しはしなかったが、似たような思いを京とリアンも持っていた。しかし、常に無愛想で仏頂面、自ら話しかけることもしないくらいに人付き合いの悪いユイファンが、そんな思いを他の二人と共有するはずもなかった。
ユイファンは、常に独りだ。
周りに誰かが居ようが、それはユイファンの認知することではない。同様に、ユイファンの存在を誰かに認知される必要も持っていなかった。
トワルスディースに着いた直後の会話も、ユイファン自身に必要な情報を得る一環に過ぎない。元に世界に帰ると言うこと。差し当たっては、それだけを考えることにしていた。———帰った先に、ユイファンが待ち望むものはなくとも。

ユイファンにとって、必要であり、意義があるものは自分以外に存在しない。
だからこそ、ユイファンは自分で自分の身を守る術を持ち合わせていた。だがそれは、初めから持っていたものではない。
トワルスディース滞在初日の夜、どの街でもそうであったように部屋のすべての窓には暗幕があり、就寝時間になるとそれを引いて窓を覆い、光を遮る。厚手の暗幕は、完全とまではいかないが、外からの光の殆(ほとん)どを遮(さえぎ)り、室内は程良く暗くなる。ユイファンには居心地が悪いとしか言えない広い部屋、綿が入った柔らかい寝台や、やけに明るく装飾に凝った照明器具。どうにも落ち着かないその部屋の隅で、ユイファンは地べたに片膝を立てて座り、じっと待っていた。
程なくして、京の寝息が聞こえる。ユイファンはそっと立ち上がり、足音すら立てずに部屋を出た。その様子を、寝台で横になって目を閉じていたリアンだけは気付いていた。
「あいつ———」
リアンのその呟きは、ユイファンが部屋を出たずっと後のことだったので、ユイファンの耳には届かなかった。

ユイファンはリディア家の広大な敷地———屋敷が三つも建っていて、その周囲は雑木林のように木々が覆い茂っているほか、噴水付観賞用の庭などがある———を雑木林に向かって歩いた。敷地が広すぎるためか、庭などに比べるとそちらはあまり手が入れられていないようだった。敷地を囲う柵も、雑木林のところでとぎれている。ユイファンに言わせれば、かなり無防備に屋

敷だ。だからこそ、こうして夜中に出歩けるのだが。
　燦々（さんさん）とした陽の光の中、こうも街に人気がないというのは不気味ではある。この世界の人々は、この世界の『夜』を守っているからこそ、この時間に人気が無くなる。それは、この世界が平和である証なのだろう。争いごとが絶えないユイファンの世界では考えられないことだった。
　だから、もぞもぞと変な違和感が身体を這い上がってくる。
　その違和感がユイファンを動かす。
　———この世界は変だ。
　それだけはユイファンにも直感として判っていた。だから、決して住みよい世界とは言えない元の世界にすら帰りたいと思っている。そして、帰った後に自分が敗者にはなりたくない。だから、こうして夜中に出歩く。その目的は———
「どこまで行くんだよ」
　雑木林にさしかかる頃合いに、背後からリアンの声がした。
　リアンが後をついてきていることには気付いていたから、別段驚きはしない。そして、ユイファンはその歩を緩めない。
　無視かよ、と背後でリアンがぼやいた。仕方なく、振り向いてやる。
「煩い奴だな」
「気にしてやってんだろうが。お子様が夜遊びは良くないことですわよ、と」
　後半、戯（おど）けたように言う。誰かの口真似のつもりかもしれないが、ユイファンにはわからなかった。
「夜遊び、ね」
　ユイファンは空を見た。青く、雲ひとつ無い空を。
　つられてリアンも空を見る。その顰（しか）めた顔を見ると、思っていることは同じようだ。
「んでさ、」とリアンは両手を頭の後ろで組んだ。「マジで何しに行くんだよ。お前がよく出歩くのは知ってんだぞ」
「お前には関係ない」
「～～～～～ッ！ったくよ、いつもそれだ！！ちったぁ周りと打ち解けようとかしねーのかよ」
　ユイファンは首を傾げた。
「必要がないだろう」
　うわぁ、とリアンが身体を仰け反らした。
「一人と二人、何が違うでしょう？」
　急な問題に、ユイファンは顔を曇らせた。何が言いたい？
「人数だろう？」
　答えると、リアンはにかっと笑みを浮かべた。
「違うね。答えは『できること』の違いだ。一人じゃできない。でも二人ならできる。試してみるか」
　何を、とは訊かなかった。ただ頷いた。
「お前が使える奴ならいいけどな」

リアンは知っていた。
ユイファンが屋敷を抜け出して、起床時間前に戻ってくる。そして戻ってきたときはいつも息が荒かった。ユイファンは一人で身体を動かしているのだ。ユイファンの動きを日頃から見ていれば、ユイファンがかなりの手練れであることはすぐにわかった。ただし、まともな訓練は受けていない。歩くときも、足音が立たないような歩き方をするが、動きそのものは雑である。
その日の夜、リアンは思い切ってユイファンの後をつけた。
予想通り、雑木林に隠れての自己流訓練をするところだった。
「組み手、わかるか？」
それにユイファンは首を振った。
だろうな、と言って、リアンは組み手をユイファンに教えた。初めこそ、動きは粗かったが、繰り返す内に精度が上がってきた。手慣れているだけはある。
そうしている内に、リアンは思った。
———こいつは、自分の世界でどんな生活を送っていたのだろう？
見た目は十五、六。騎士を十年近くやっているリアンと対等に組み手ができるほどの技量を、こんな子どもが持っているとは、想像を絶する世界に違いないだろうに。
———それなのに、こいつは元の世界に帰りたがっている。
リアンが一度、諦めかけた帰る道。帰った先に何があるのか。ケイにしろユイファンにしろ、今は帰ることを考えている。お互い、情報の共有はそこまでだ。何故か、は訊かない。まだまだ赤の他人だ。琴線に触れることが怖い。触れられることが怖い。この先に何が待っているのかを考えることを、今は放棄している。
リアンは組み手をしながら思った。
だんだん、ユイファンの動きが見えてくる。どんな動きか、次はどう動くか。どういう表情で、どういう目線で身体を動かしているか。すべては急にわかるものではない。だんだん、時間をかけてわかるものなのだ。まだ、ユイファンの動きはぎこちない。この組み手も、だんだん動けるようになってくれればいい。
焦る必要はない。
（明日も、組み手に付き合ってやろうかな）